木曾山林學校々友會々報

第五號

明治三十八年十二月

長野縣立木曾山林學校
校友會

昭和41年11月10日
資料
蘇門会
第 号

木曾山林學校々友會々報第五號目次

明治三十八年十二月二十三日發行

學術

椎茸栽培法並に其歌　檜崎圭三

檜栽培法　遠藤治一郎

論說

森林と風致　木下清

吾人の責任　川岸滋治郎

旅行に就ての所感　M W生

雜錄

明治三十七年度第二學年修學旅行記　柳澤熊治

佐渡紀行　蜂谷光香

殖林の聲

明治三十八年度第二學年修學旅行記　遠藤治一郎

滋賀縣の林業

樺太嶋の漁業、林業、動物、鑛業、雜感。

通信

中村茂君、平澤政吉君、志津辨治郎君實兄富士太郎君、輪湖正山君、正文實次郎君、遠藤治一郎君、園原咲也君、小松精內君、齊藤昌雄君、下條初太郎君、

文苑

和歌。俳句　玲朝生

眞紅の舌　福翁

木曾名所　寺嶋秋水

夕の想

詞叢

先輩諸君、學友諸君、(妄吾生)希望を大にせよ、先輩と後輩、大に海外の林業に注目せよ、コンモンセンスの修養、共同一致の精神、朋友相互間の制裁、(驥北生)長壽の一夜物語、(肥後金四郎)日記の一節、松と柳、一意專念、(日後生)

雜報

○木曾山林學校第二回卒業證書授與式、第一及第二期卒業生方向調、諏訪中學生の無錢旅行。○寄宿舍だより。○本會彙報、例會記事、會員名簿、會員動靜、○木曾山林學校學則改訂、○編輯局だより、○會告、○木曾山林學校の再生、

木曾山林學校々友會々報　第五號

明治三十八年十二月二十日

學術

椎茸栽培法

岡山縣　檜崎圭三翁講述

椎茸栽培法講習の爲め御料局よりの囑托を受けて當地に來られたるを幸として、檜崎翁に多年實驗研磨せる所の栽培法につきて長時間に亘る詳密なる講話を乞へり、其筆記次の如し。

一、椎茸の利益及び需用

山林の副產物は固より多くして枚擧に遑あらざれ共、就中最も短日時に最も利益が多く且誰にても一席の御話にて簡易に出來得るものは椎茸の右に出ずるものはありません。殊に其販路に至つては內地の需用も月に增し、海外の輸出も年に增加しますが、今日の有樣にては未だ需用の十分の一も產出せざるは誠に遺憾の事ではありませんか、目下の場合は總て輸出品の續々產出するは國家の爲め極めて必要にして大急務たるは勿論なるに、此簡易に出來得る利益の多き椎茸養成の副產物を忽にするのは遺憾に堪へぬので御座ります。

二、沿革

歌

斯くも盛んな椎茸も　昔は野生でありたるを

元錄年間伊豆の人　養成法を發明し

歌の如く昔は養成法を知らざりしが、伊豆の人是を發明したるも之を他に傳へませぬ、然るに寬政の頃とか故ありて豐後に傳はり、其後伊豆又は豐後等より各地方へ椎茸養成の稼に行きしも、堅く秘して容易に其方法を他に傳へざるよりいづれにても之を養成するのが少なかりしわけで御座ります。

三、在來法

在來法の秘密の如くして容易に傳授せざりしと申すのは、唯材木の伐り時で御座ります。

歌

其の季と云ふは秋冬に　木の皮邊より水分が

上り水又下り水　留り水との三期あり

其中水の下る時期　根伐りをなせば生ぬ迚

此期を知るが秘術にて　容易に傳授をなさざりき

是は秋より冬の頃に儘か三日か五日かあるので此期を

知ることが六ケ敷いのであります。其時伐は寒地と暖地とは勿論、又全く山でも上と下とは違ひがあると云ふ程のもので、此伐時を過ては椎茸は生いぬと云ふのであります。而して其伐時を知るには此道に熟練したものは皮邊を斧で打て耳を添へ付けて知るので、傳授を受けましても鍛練せねば覺ね難きより養成するものが少ないので御座います。然るに此伐時を知るには簡易の法があるので御座います。併し此法は容易に傳授致しませぬ、私も先金に千圓位も貰はなくては御話致しませぬので御座いますが、今日は跡金として御話し致します。

歌

立木の皮邊を口形に　倒もて横に伐り取りて
其切口に出る水ゲ　上より出るのが下り水
下より出るのが昇水　上下出ぬが留り水

其留り水の時伐目の水分を舐め試みまして濃ければ未だ伐時が早きか又は遲きかであります、其水分が甘ければ丁度時期の良き頃で御座います、即ち此時を以て伐るので若し其時期を外れたならば生いぬと云ふので御座います。ろれとも前に申し述べます通り土地の寒暖山の上下にて違ひます故勿論、其木によりても違ふので容易く伐り時が覺にられませぬ。唯在來法は一條に伐り時によりてのみ生いるものと心得て、胞子の在ると云ふことには心付かなかつたので御座います。

四、改良の理由

改良は山の中にても海邊でも又市中の宅地の隅にても容易に養成することが出來ます、其法は誰にても一席の話にて分ることで御座ります。最も御斷り申して置きますゲ、私も内地にては各地方にて實行致しまして好成蹟を得た覺ねは御座ますが、なれども北海道には當春始めて參りました位で固より經驗のなきことなれ共、北海道も各地にて天然生の椎茸が澤山發生して居りますのを見受けました故、天然にすら發生するものなれば之に人工を加ふれば必ず發生するは疑なきことゝ思ひます。此北海道の如き樹木の繁茂したる所に椎茸を養成して意の如く發生したる上は、實に巨大なる物産を生じて國家の爲め非常なる利益だと考へました故、實は木炭改良法傳習の囑托を受けて參りましたが、其養成法の話を致しました所が各處から此法の傳習を請求致されます故、傳習することになりましたので御座ります。然るに人によりましては北海道の椎茸は内地の椎茸とは違ふて香りがないとか、或は北海道には椎茸が作れないとか云はるゝ人も御座りますが、私に於きましては内地と同じく北海道に於きましても椎茸を養成するに差閊へなきことと考へます。最も前にも申述べました如く、内地ですら椎茸を作るに適當なる土地を持ちながら輸出品として結構なる椎茸を作るものが少なき原因は畢竟此養成法を知るものが稀なる結果で御座ります故、北海道にて是迄椎茸の養成を致すことの少ないのは無理ならぬことゝ存じます。併しながら北海道で養成の出來ぬとは決して御座りませぬ、既に當春北海道にて天然生の椎茸を調製して試驗致しましたが香と云ひ味といひ内地のものと少しも變りはありませぬ、風味の良くないと申すのは調製方がよくないのと考へます。只北海道は内地に比して寒氣が強きより木の腐り方が遲く從て伐木致してより發生迄の年數が長くかゝるといふのみにて、養成さい致しましたならば内地の椎茸と同じものが出來ぬと云ふことは決してないと信じます。

五、材　木

内地にて最も適當の木は

歌

枹に櫟に見風乾に櫧　椎と栗との六種なり

其他もあれど重なるは　前の六種を用ふべし

北海道にては枹、水楢、見風乾、赤楊、楢、柏等が宜しかろふと思ひます。尤も枹、見風乾は渡嶋にては多く見受けましたが當地方では見ない樣で御座います。依て當地で第一宜しいのは水楢で御座ります、是は天然に椎茸の生て居るのが多くは此の木でありますが故疑ひは御座りませぬ、殊に此木は澤山あります故旁々都合よきことゝ考へます。次は赤楊又は柏で是れも自生のものを見受けます、其外にも右等の木に類した樹木には出來るもので御座りますが先づ右等の木を以て養成を爲し、尚ほ試驗のためには種々の木を用ひて見るも宜しく御座ります。

六、木の大小

木の大きさは廻り一尺以上二尺位のものが最も適當なれども、此れより小なるも又大なるも養成するに更に差閊へは御座りませぬ、只一尺以下二尺位迄のものが取扱ひに便利なる故適當と致すのでございます。

七、伐木時期

内地の樹種の伐り時は歌にあればこれを畧します、北海道にても寒暖の遲速がある故一樣には申し難きことで御座りますが、九月下旬より十月中旬頃までが最も

好き伐り時と考へます、尙ほ内地と北海道とを問はず簡易に伐木の時期を知ることの出來るは歌にある如く。

歌

初霜降りて葉の色の　少し黄色を帶びし頃
根伐を爲せばバラ〳〵と　木の葉落散る頃ぞよし

是の歌にある頃に伐れば最も好き時期にして、其の他は秋の彼岸頃より春木の芽の出かける頃までは何時伐るとも椎茸の生へぬと云ふことは御座りませぬ。

八、材木根伐

材木の根伐りを致すまするは晴天の日が宜しく御座ります、又根倒しを致しまするは鋸にても斧にても適宜のもので伐り倒した儘少なくも三四十日間は枝を拂はずに置て乾かします、總て木は枝付きの儘にて置けば枝へ水分が吸取して能く乾くものである故材木へ皮が善く着きます。依て枝は成るべく取らぬ方を善しと致します、尤も立木ある中なれば倒した儘にてよろしけれども、木のなき所にて倒し木の幹に直接に日光のあたる所なれば、成るべく葉付きの枝を幹の上に覆ひ置く方が宜しく御座ります。

九、材木の小伐り方

材木の根伐りをなして三四十日間位經過し、木のなま乾きになりたる時小伐りを致します、尤も初冬の頃に根伐りを致したものは春の雪融げを待ちて小伐りをするも差支御座りませぬ、其伐り方は二尺廻り以下の木なれば長さ四尺乃至五尺位とし、二尺廻り以上のものなれば短く伐るか又は二ッ割、或は四ッ割にするも妨げは御座りませぬ、併し成るべく丸木にて用ふる方が宜しく御座ります。只材木を一人にて自由に取運びの出來る便利の爲に、太きものは短く伐り或は己むを得ず割るので御座ります。

十、刻み入れ方

小伐りを致しましたならば刻みを入れます、是は鉈或は斧等にて材木の根の方より始めて、五寸斗りづゝを隔て互の目なりに皮より内へ、大凡り一分より壹分五厘位の深さに周圍に切り込みます。是は歌にある如く

歌

一つには上皮剝け難く　二には之より胞子這入
三つには是より水浸て　腐りを早く促せば
柏の類の鬼皮は　削り除けて其後に
刻みを入るゝをよしと知れ

最も材木が太くして鉈、斧等にて刻みの入れ難きもの

は鋸にて切り目を入れても妨たげは御座りませぬ。

十一、材木置場

椎茸を養成するに何より注意致さねばならぬことは、此材木の置場の位置が肝要で御座ります。此の位置が若し不適當の所である時は、椎茸は發生致しませぬ、之も歌に示して御座ります。

歌

山林樹木のある個所で　成るべく北に向はざる
空氣の流通よき所

即ち右の通りで御座りまして、其傾斜は四十度位が尤も宜しく御座りますが、拾五度以上六七十度までの傾斜地にて妨げは御座りませぬ。又方位は第一は南向、第二は東向、第三西向きと致します、北海道にては北向きは惡しく御座ります、此如山林中にて樹木のある空氣の流通の宜しい乾きよき、成るべく暖かにして木の間より日光の少しく漏るゝ位なる所を選みて寢せ込みます。又平地若しくは宅地の隅にても日受けのよき空氣の善く流通する日蔭ありて、乾きよき所を選むことが肝要で御座ります。

十二、寢せ込み方

椎茸は材木を積み込むを寢せ込むと云ひ、上にある樹木を笠木と唱へます。其寢せ込む時期は前に述べました通り根伐りをなし三四十日、又秋冬に伐りたるものは春の雪融けの頃を待ちて、小切りをなし刻みを入れたる時に寢せ込みます。又寢せ込むには位置を定めて下草或は小柴小笹の類あればこれを壽麗に刈り拂ひ、尙ほ落葉も掻き除けることで御座ります、而して寢せ込み方は地形によりて種々御坐りますけれども、先づ平地の箇所に於ける仕方より申しますなら、根太木を二本敷きます、此根太木の大きさは其場所が乾きよき地であれば細くとも宜しけれども、乾きの充分になき所なれば太きものを用ふることで御ざります。

歌

材木の根の方を高して　末なる方を低くなし
伐り目に水の止まらず　雨水入りても出る樣に

此の歌の如くして一と筋並べにするが宜しく御ざります、尤も己むことなく其並ぶる場所が狹き地なれば積み累ねても妨げはありませぬ、其寢せ方は空氣の通ひ好き樣に左右にすかし木を入れて、又も並べて又すかし、二三尺位までは積み上げて宜しく御ざります。而して斜向の箇所にては根太木を敷き、屋根の瓦を葺く如く次第々々に並べて登ります、尤も

傾斜の急なる所なれば寢せ込み方が又違ひまして、其他種々の仕方がありますなれども、是は席上の御話しに致すは六ケ敷御座りまして此間山鼻村に於て實地に御示し申したれば略します。此の寢せ込む位置が肝要で御座ります故、一ケ所に澤山寢せ込まずして各所に分けてするが宜しく御座ります、左すれば甲の所にては生へざるも乙の所にては生へることもあり、甲乙二ケ所とも不結果なるも丁所に發生することもあり、又同じ時に材木を伐り同じ仕方に寢せ込みましても如此ことは常にあることで御座ります故、寢せ込む位置に充分注意せねばなりませぬ。樵夫歌で申せば椎茸は三注意とて伐り時と、寢せ込む位置と、乾濕の適度に宜しきを得ぬ時は菌は出がたきものとしれ。

十三、胞子

歌

総じて菌は種ありて　笠の裏に孑滿ち充てる
是が飛散り木に附て　黄絲を生じて菌糸より
菌の出ると地に落て　生ずる菌の二類あり
椎茸素より木に附て　生ずる菌の類なれど
在來椎茸生へぬ地は　胞子を蒔ねば生ゞたし

と歌の如く、在來椎茸の生へぬ地には胞子を蒔かねば傾斜生へがたき者で御座ります。其胞子と申すは菌より採る法も有ますけれども、是は生まの椎茸がなくては得られませず、假令ひ生なの菌が有も手數を要します。依て椎茸の生ずる榾木の（椎茸の生ずる樅になりたる材木を榾木と稱へます）皮邊の日き所には胞子と菌糸が充ちて居ります故、此處を採りて粉に致すので御座ります、即ち此持て居ますのゞ是を以て製したもので東京にて買入れませば一オンスが五十錢も致します、即ち此通りで御座ります、此胞子と菌絲に付御話し致しませばなか〳〵一時間や二時間にては盡きませぬ故是は後日に讓ります。

十四、播種法

胞子を蒔きますは八十八夜前後を好しと致します、冬材木を寢せ込みたるものは蔽ひの柴木を一應取り除けて蒔き、又八十八夜前後に寢せ込みたるものは同時に蒔きます。其蒔方は歌の如く

歌

胞子を西洋紙にのせて　口にて吹ひて散すなり
此れを蒔くには晴天にして風の吹かぬ時を見定めねば
なりませぬ、其分量は大凡う五尺切りの材木が五百本
にて胞子の目方が七八匁なれば充分で御座ります。蒔き終りましたれば元の如く柴木で蔽ひをなします、尤も其當時寢せ込みたる材木なれば胞子を蒔て蔽ひを致します、宅地の隅などにては古畳の類を蔽ふが宜しく御座ります、此の蔽ひの厚薄は山でも里でも笠木が能く繁りて日光の射すことが少なければ薄く掛け、日光が能くあたれば厚く掛けます、此の厚薄の加減で材木の腐り方が黑くもなり白くもなるものにて、黑く朽ちたのは椎茸が生へませぬ、依て置場の注意は申す迄もなく此の蔽ひにも最も注意せねばなりませぬ。

十五、播種後の保護法

胞子を蒔き蔽ひをなしたれば其後は時々見廻りをなし、蔽ひたる柴抽などが除きて居れば元の如くに直し、或は蔽ひたる時よりも意外に日光の關係に差違を生じたる時は厚薄を適當になし、且つ寢せ込みたる材木の下より草木が生ずれば刈り取る等能く注意せねばなりませぬ。總て寢せ込みたる材木は歌にある如くで御座ります。

歌

空氣の濕氣は好けれども　地中の濕氣は惡きなり
地中の濕氣に逢ふ時は　材木が黑く朽るゆゑ
菌の生ずることゞなき

十六、發生時季

歌

材木の根伐りを爲てより　速きは一年遲くとも
四五年經過せしならば　必ず菌は生ゆるなり

と歌にある、速きは一年とあるのは内地の暖かの氣候の所にてのことで御座ります、尤も内地にても東北地方にては根伐りをしてより四五ケ年を經て始めて發生するを見たる實驗談が御座ります故、北海道の如き寒地にては材木の腐さることが遲き道理なれば根伐りをなしてより速きも二三年遲きは四五ケ年を持たざれば發生せぬであろふと思ひます。依て氣長く持ちて養成致しませぬと一年か二年して椎茸が出ないと思ひて材木を棄てゝしまわぬ樣にして大切に保護を加へねばなりませぬ。尤もこの秋冬或は來春に寢せ込み、來年の秋冬頃に材木を見て皮も剝けず、又少し切り試みて皮の内が生ず木の時の通りに白ければ發生するに遲速こうあれ椎茸の生へることは疑ひ御座りませぬ。若し皮の内が黑くなるか又は皮が剝けるが如きことある分は發生致しませぬ。是は前に申述べました如く寢せ込む位置と乾濕の度合とによりますものなれば、呉々も寢せ込む位置と其後の保護に注意せねばなりませぬ。併

し山に澤山寢せ込みましても其保護と申すは、只折々見廻りて藪ひたる柴などが除きはすまいかを見て刈り掃ひ等の手入れをなす位なれば多分の手數でも御りませぬ。又宅地近傍なれば

歌

米のとぎたる白水を　度々掛るをよしとせり

しろみず中には椎茸を　養成すべき滋養あり

歌の如くたび〳〵白水を掛けるとか、或は寒氣の頃には穴の中にかこひ置くとかする位の手入れをなせば、速く材木が朽ちまして、北海道にても一ケ年若くは二ケ年を經過すれば椎茸の發生を見らるゝことゝ思ひます。

十七、發生後の扱ひ及び保護

椎茸は春秋兩度に生へるを常と致します、春は大概華氏の四五十度秋は五六十度の時に發生するものにて、材木の根伐りを致しまして後ち前に申しました通り年限を經過しませば、春か秋の内には發生致します。

歌

始めて菌の生いたるを　走り子とぞ稱ふなれ

是が萌みた其時は　成る可く其儘採るぞよし

とある如く、始めて發生するには大概多くは出ぬものにて、其時は成る可く材木を臥せ込みたる儘採るが宜しく御座ります。而して二度目に生じまする其前の木の茂りたる地を撰みまして草木芝等を刈り拂ひ横木を採り設けて左右より拜み合せに立てるが宜しく御座います。尤も春は立てたる儘にて宜しけれども、秋は彼岸頃に其材木を一晝夜程水に浸して之れを上ぐる時水中にて材木を足で踏まい鐵の鎚にて両方の切口を四つ五つ强く叩きて水より引き上げ、木の通り立て並べますと四五日の後には發生致します、而して拾四五日經過すれば採集が出來ます。其以後は年々斯くの如くにして春は立てたる儘にて採り、秋なれば水に浸すが宜しく御座います、最も秋とても雨降り續く時は水に浸さずとも宜しく、年々両度宛採收致しまして四五年は材木が保つもので御座います。

十八、採收法及び乾燥法

菌を採りますは根より切り取れば宜しきものなれ共、澤山に發生したる菌を切り採ることは容易で御座いませぬ、夫れ故大概もぎ取ります。

歌

菌の乾し方三樣あり　木乾と日乾と火力乾

其中木乾が第一で　次が日乾と火力乾

木乾と申しますは榾木へ生いたる儘にて乾し、日乾は採りて日光に乾します。之れは何れも火力乾より品が上等にて輸出にしても價が三倍も高く御ざいます。然るに香りがなきよりして又慣れぬ人は品が惡しき樣に思ひますけれども、それを火力で乾しませば香は致します、併し香がする樣になれば味がぬけて食味が惡しくなります故、日光乾にて香が致しませぬのが菌の中に味を含みて食味が宜しく御ざいます、從て價値も高く御ざいますが程よく天氣が續きませんと日光乾はむ走かしきもので御ざいます。而して火力乾にも二通りありまして菌の軸を串挿しまして並べて立てゝあぶる仕方と、亦火仕掛に致しますのは別に室を設け室内の左右に棚を掛けて中央に通行する樣に造り、棚の下にて炭火を起し、巾凡ろ一尺五寸長サ三尺深サ一寸餘りの箱の底に蚊帳にて編みたる盆を敷き之が菌の撥の方を下となし並べてこの棚へ載せまして、始めは火力を柔にし次第々々に强めまして其後に下しまして凡ろ十時間内外乾します、さすれば香はよく御座います故廣く販賣するには此乾し方がよく御ざいます、尙此室の設け方や乾し方に付きましては色々の仕方が御ざいますが、乾し上げましたならば凡ろ十貫目を一つの箱として能く目張りをして輸出するので御ざいます。

十九、收支計算の概略

乾し上げまして一箱十貫目と致し、其代價凡ろ五十圓より六十圓位迄致します。而して榾木より何程生ずるかと申せば廻り一尺より二尺物長さ五尺に在て極最上の分は一年に乾菌が凡ろ五十匁位生するもので、十貫五十圓としても百匁は五十錢五十匁は二十五錢故、一本の榾台より一ケ年二十五錢、千本二百五十圓一万本二千五百圓、是を半分と致しましても一萬本にて千二百余圓といふ金が得られます。内地にて生木十貫目拾錢内外にて買い受けまして收支引き合ふ位のもので御ざいます、北海道の如く至る所木の腐り居ると云ふ所にては無論利益を得られますことゝ思ひます、山に鐵道の枕木の切端等が皆捨てゝあるを見受けました、之は椎茸に適當な檜にて之を材木として造れば山火事の憂ひも少なく、發芽の妨にもならぬ故官長共に便利で、一ケ所にても椎茸材木が一萬本も二萬本も捨てゝある所を見ました、之を小切にして刻を入れ臥せ込むのが一人に百本位は充分出來ます故、一萬本にて百人、一人五拾錢と見ても五拾圓の元入にて三四年の後よりは年に千余圓の金が得られます。材木を新たに切ると致

せば一人して根切りたるものを小切して刻みを入れ臥せ込む迄五六人を要するので御ざります。何角收支計算を精しく御話致せば數時間を費します故かひつまんで申せば、千圓の金を得ますに付き一切の費用が二百圓乃至三百圓もあれば充分にて千圓に達し七八百圓利益が得られます、うれで爾九增倍椎茸丸增倍と申しますので御ざいます。北海道は物產が澤山御ざいまして何より結構なことで御ざいますけれども、尙此の上椎茸が意の如く發生致しませば益百萬圓といふ大物產が增し、國家の爲め實に々々嬉しき事で御ざいます。何卒皆樣も御勉强下されまして、右申す如く一大物產ダ澤山產出致しますよう樣國家の爲め希望致します。尙精しく御話申し上げたきことが御ざいますが、既に点燈時間になりませば之にて講話を終ります、御不審の所が御ざいませば御遠慮なく御尋ね下さい、下手の長談議を致しまして定めて御退屈で御ざいましたろ―。

（拍手大喝采）

（尙翁が其講話中に屢々引用せる椎茸栽培の歌の全部を參考までに左に併錄せり）

椎茸養成の歌

其一

私は安藝の高田郡檜崎圭三と申もの仕方を茲に述ぶるなら容易に利益の得らるゝは椎茸販路はいと廣く海外輸出は年に增し斯くも盛んな椎茸も元錄年間伊豆の人追々諸國に廣まりて伊勢や駿河や遠江石見や隱岐や對島など仕方を組まし申すべし無きにはあらねど大概は根伐りの儘にて三四年適宜に伐りて養成す誤らざること肝要ぞ木の皮邊より水分が溜り水との三期あり根伐を爲せば生ねぬ迚容易に傳授をなさゝりき斧もて立木の幹を打ち

三田村の農民で椎茸養成改良の山林副產物のうち椎茸作るに如くはなし內地の需用も月に增し百萬圓に超過せし昔は野生でありたるを養成法を發明し重なる產地は伊豆三河豊後薩摩に日向土佐左れば在來養成の細き材木で作る地も深山の奥にて大木を腐らし置きて其後に其木の根伐りする時期を其の期といふは秋冬に登り水又降り水其內水の降る時期此期を知るが秘術にて斯道に熟練せしものは耳を皮邊に添ひつけて

根伐をすれば散々と其他は秋の彼岸より何れの材木を切るとても成るべく秋冬伐るならば根倒しするは何時とても根伐したらば其儘に又は春迄置くもよし五尺位に切り揃へ其入方は互の目なり根より始めて漸々に鉈にて深さ一分より皮より內へ切り込まば二には此所より胞子這入り腐りを早くうながさば削り除きて其後に材木の置場を撰ぶには空氣の通ひ好き土地で木の下蔭にて乾きよき少しく溜る丶位なる敷地を奇麗に切拂ひ又は斜面の箇所なれど

木の葉落散る頃ぞよき春の彼岸の前後まで茸は生ゆるものなれど材木は永く保つべし雨降る日をば忌がよし枝をはらはず五六週能く乾かして其後に皮邊に刻を入れてよし成可く逆木にならぬ樣五寸計りを距てつゝ大凡う一分五厘はど一つには上皮剝げ難く三つにはこゝに水染て樫如き鬼皮は刻を入るゝを好と知れ成るべく北に向はざる山林樹木の有る所木のすき間より日光は塲所ぞいとも適當ぞ根太木を入れて並ぶるか根太木を横に敷き設け

水の昇ると降るのと簡易の法で解ふなら鉈もて横にきりとりて上より出づれば降り水上下出ぬが溜り水舐め試みて澁ければ甘ければ好き時期と知る

其二

改良法にて作るなら市中の庭のすみにても材木は別に變りなく椎と栗との六種なり漆や櫨や化香樹の木や色々あれども主なるは北海道にて良き樹種は檜の木や赤楊の木ゾ十五六年以上にて二尺周圍の太さころ太きに過ぐる材木をば根伐の最とも好き時季は初霜降りて葉の色の

溜り居るのを番で知る立木の皮邊を口形に其切口に出る水が下より出れば昇り水又は切目の水分を伐り時未だ來ぬと知り

深山の奥でも海邊でも何れの地にても出來易く檜に櫟に見風乾に樫其外櫨や楊桃や藤の蔓や赤楊の木や前の六種を用ふべし枹水檜見風乾の木や材木の生立つ年數は七八寸の廻りより最も適當なれと知れ割りて使ふも障りなし秋の末より初冬頃少し黃色を帶びし頃

屋根の瓦を葺く如く木蔭の十分ならざると積み重ても惡からず材木の根の方高くして切目に水の溜まらず一筋並べ終わったらば左右にすかし木を入れて二三尺の高さまで木蔭十分なればよし材木の上に葉の付きし乾けば椿になりがたし仕方は同じ事なれど筵の類をかけておけ柴木で日蔭を作るべし度々かくるをよしとせり養成すべき滋養あり止むを得ざれば庭なれば

其三

約して菌に種ありて是が飛び散り木に附きて菌の出づると地に落ちて其斜に從ひ並べべし寝込む場所の狹き地は其積方は根太を入れ末なる方を低くなし雨水入りても出るよう空氣の流通よき樣に又もならべて又すかし注意を加へて積み重ね左もなき場所は日覆に柴木を掛て置かざれば庭の隅にて作るのも材木の上に古蓆か蔭に乏しき場所ならば米を磨ぎたるしろみづを山に寝せたる材木なら度々しろ水注ぐべし

笠の裏に子滿ち充てる菌糸を生じて菌絲より生ずる菌の二類あり椎茸素より木に附きて在來椎茸生ゆる地は木に附き生ゆる者なれど胞子を蒔かずば生わがたし其種取り方申すなら菌の十分開かざる種が散乱せぬ樣に能く乾かして其後に柔らかきをば乾かして飛散せぬ樣密封し又椎茸の生ゆる木の胞子と菌糸が充ちたれば細末となし用ふれば尤も有無を試驗して此試驗には顕微鏡胞子と菌絲がよく見ゆる最も寒地は彼岸すぎ其分量は積みし木が此割合にて蒔くならば次第に種は繁殖し其の蒔き方に積をきし是をとり除け種の粉が生ずる菌の類なれど天然自然に其種が在來椎茸生ぬ地は木に附き生ゆる者なれど成可く大なる物を採り器の中にめをひけて白く朽ちたる材木の是と共に粉となして貯へおきて用ゆるか白く朽ちたる所には此木を採りて乾かして菌で採るより簡易なり用ゆるなれば慥かなり八百倍のを用ふれば其蒔く時季は春彼岸八十八夜迄のうち五百本にて八夕目材木の腐るに從ひて必ず菌は生ゆるなり材木に授ひゐるならば全部へ附着する樣に

種を西洋紙にのせて蒔終へたらば又故の其後は手入に及ばねど空氣の濕氣は好けれども地中の濕氣に逢ふ時は菌の生ずる事ぞなき廢物木とは申すなり椿つきしとは稱ふるぞ生ゐるは疑ひなきぞかし柴蓆などの厚薄の木の伐り時を撰びても菌は生せぬものなれば加減をするこう要なれ

其四

材木の根伐を爲してより四五年經過せしならば始めて菌の生へたるを是が萌みた其時は二度目に生ずる其前に空氣の通り好きやうに横木を設け左右より口にて吹いて散すなり覆ひをかけて置がよし注意すべきの唯一つは地中の濕氣は惡きなり材木が黑く朽ちるゆゑ黑く朽ちたる材木をば白く朽ちたる材木をば椿つきたらば椎茸の置場の位置と覆ひたる加減で白黑分かるれば寝込む場所が惡ければ時々材木を見廻りて

魂きは一年遲くとも必ず菌は生ゆるなり走り子と子稱ふなれ成べく其儘採ずよし木の繁りたる地を撰び下草下枝かり拂ひ拜み合せて立るなり

一坪十本立にして庭の隅にて作るなら程好き所無きときは山中にても里にても生ゐる季節の主なるは寒地は春は彼岸過ぎ其内春子は立てしまゝ秋子を作るは椿木をば水より揚げんとする前に木の根と先との水口より打終わ水より引あげて水より揚げて七八日但し長雨降るときは其儘木口を打てよし秋の收利は多けれど春子ばかりを採るならば一度に多く生ゆる故長雨降りて自づから秋子は材木に手がかゝり手間の費へのあるのみか春子は平數も少くて

一反凡う三千子日蔭に椿木を立ぬべき柴もて蔭を設くべし仕方は同じ事と知れ春の彼岸と秋土用秋は彼岸の頃なるぞ自然に生ゐる者なれど水に一晝夜浸しをき椿木を足にてふみ押へ槌にて嚴しく打ぞよき例に從ひ立つるなり經れば採收出來るなり殊更水に漬ずとも春と秋との其中で春の收利は僅かなり春秋兩度の收利より秋は殊更手を入れず生ゆるに從ひ採りてよし水に漬けたり叩きたり椿木の保ちも三四年椿木の保ちも五六年

左れば地方の狀況で注意を加へて試みよ程よき蔭がないならば柴木の枝をおはいおきされど立てたる儘にては春子は出難きものと知れ

其五

生椎茸の販路が椿木を水に能く浸し暑き頃なら冷やかに塞き頃なら暖かき水より揚げて七八日此他に一つの良法は雨露かゝらぬ小屋内に生ゆる季節に取り出し十分濕りし其時に他の季節なら揚ぐる時數千本の材木をば餘り多くでないならば便宜に隨ひ何時とても在來法は上皮が一樣ならざるものなれば但し春子を作るため冬より椿木を集め立て後岸始めにならべたて椿木に濕りなき故に夢々なほざりなる勿れ汎く有なら何時とても引揚ぐる時是を打ち所を撰びて立て並べ塲所にて温氣を與へなば經れば採收出來得べし蘭の採收終へしのち椿木を立てゝ納め置き四五日間はゞ水につけ春なら其儘揚げて立て水打ちするを忘るゝな容易くかこひ難けれゞ材木の保存も永くして心のまゝに採り得べし腐りて除たる椿木をば再び出ぬものとして上皮腐りて出ぬ時は腐らぬ所を殘しなば是をば捨つる事なかれ

其六

茸の乾燥方三樣あり其中木乾が第一で茸が椿木に生ゐたるを採收たれば簀にのせて火力を加へて乾かすを天氣程よく續かでは火力干にも二樣あり並べて立てゝ焙るのと居炕裏を設け炭をたき茸でゐみたる莖をしき莖に並べて棚にさし次第に强めて又降し大概日の中採收し成可く晴天に採るゞ良き水氣を干かし其後に干し上りたら一箱を是を捨るものなれゞ上の腐りを削りすて又も生ゐ出る者なれば是をば捨つる事なかれ

木乾と日干と火力干

次が日干と火力干其儘乾すが木干なり日光に乾すのが日乾にて火力干とは稱ふなり日乾は出來ぬものと知れ菌の軸を串にさし室を設けて棚を架し淺き箱の其の底へ菌のをさをしたにして初めは火力を弱くして十時間程干すゞよき夕より朝にかけてはせ止む無雨天に採しなら火を掛ざれば惡きなり十貫目づゝに荷造す

一箱五拾餘圍なり一年れよう貳百圍山林測產物のうち養成し給へ椎茸を右は各地を觀察して嘶しを畧せる歌にして尙ほ此上も實驗し重ねて報導致すべし

（をはり）

都會の他にて賣ならば千本材木の收益は斯樣に利益多きもの是に優るを聞かざれば自分の爲めは國の爲め好き廉とりて實驗の汎く參考に資するなり

山檀（ヤマナラシ）栽培法

特別會員　遠藤治一郎

本法は滋賀縣林業技師宮下氏の研究の結果發明せられしものとも云ふ可きものにして、山檀は本法に依らずんば良苗を得ずと云ふも過言に非と信ず

(1)種子採集及貯藏

播種の前年十月二十日頃球實のみを採集し、叺又は俵に入れ、屋内空氣の流通良き處に釣り下げ置けば、十二月中旬迄に鱗片自ら開きて種子出づ、而して之れを貯藏するには塵芥を篩ひ除きたる上袋或は桶に入れ濕氣なき處に置くを可とす。

種子量は球實一升に付一合三勺位を得るを普通とし、種子一升の重量は八十匁位なり。

(2)苗圃位置及整地

苗圃は日當及風通の宜き地にして田なれば排水の便ある處、畑なれば適潤の地を撰み、四月上旬耕土を鋤起し、雨なれば幅二尺五寸乃至三尺長適宜の床を作り、床と床との間に幅一尺位の溝を掘り、其土は左右の床に揚げ以て其床を溝底より五寸位の高とし、鍊粕或は白子若くは細末にしたるものを床上に撒き、能く土に混和し、地均の上鎭裏にて壓し付け置くべし。

(3)播種及日覆

播種量は種子の良否により一坪五勺乃至三勺五才位を適度とす、其方法は平播にして粒糠を種子の漸く隱るゝ位振り掛く、（被土を種子の隱るゝを度としてなすもよし）日覆其他普通の如し。

(4)除草及施肥

除草は苗木の發生より秋季迄に七回以上行はざるべからず、施肥は整地の際施す所の元肥充分なれば夏季に至り其必要あるを見ざるも、若苗木の成育惡しきときは五倍以上の水に溶解したる屎若しくは風呂水を補助肥として注ぐを良とす、本法によりて其年秋季長きは二尺乃至一尺以上の苗木を得。

(5)保　護

苗木は成長期間内は常に適潤なるを要する故、連雨の際は排水に注意し、旱魃の際は適度の灌水を行ひ、雨水を停滯せしめざるを可とす。本苗木は夏期虫害、早秋は菌害に罹り易し、此豫防法は適宜なるべし、

(6)山地植栽中の注意すべき事

一、悉皆地に植栽するに當り、最初堀上げたる砂土を以て根元一寸を埋め、根蔕葉は苗木一本に付十七匁位を用ゐ、長二尺位に折り圓形とし、成べく苗木より遠けて入るゝし、而して其れを入れたる後堀上げ置きたる砂土を以て穴を埋め、苗の周圍を踏み付け置くべし。

二、廣さ八九寸深さ三寸位の穴を堀り、底の砂土を細抹にして藁灰若くは木灰一合を混和し、苗木の根部を埋め込み、更に最初堀上げたる砂土を以て穴を埋め、苗の周圍を踏み付け置くべし。

植栽し終りたらば、長きものは枝條出づべき部分六七ケ所を殘し其先を切り棄るを良とす、而すれは枝條の擴張盛にして早く閉鎖をなす。

要するに、本養成の要は廣潤にして陰氣ならざる適潤の地に仕立つるにあり。

し、我國現今森林の狀態は如何、到る所荒廢に重ぬるに荒廢を以てし、植林の急務は目睫の間に迫り居れり、如斯なるを以て林學の研究は實に忽諸に附すべからず、而して我國土にして林業の隆盛何等遺憾なきに至りては、鷄肋八道も亦吾が植林地となし、遂にはチャンチャン國にも押し渉り作業をなす氣慨を有せざるべからず。

却説、森林は吾人社會に直接間接密接なる利害の關係を有す、余ゞ茲に本紙の余白を借り述べんとするは、吾人社會と多々關係を有する內森林と風敎との關係なり、諸君就に山間の住民を見よ、性溫厚篤實且つ質撲にして言語柔し、之れに反し都會の如きは人々皆華麗を好み語調又佞、不人情にして生意氣なることいはん方なし、これ山間に住するものは朝夕幽欝たる森林及び明媚なる山水を友とし爲めに自然に其感化を受くるを以てなり、然して都會にありては斯くの如き感化を受くるに由なきを以てなり、又林業は他の多くの生業に比し敢利を得るの期間永く、少なくも三、四十年長きは百數十年を要す、故に林業に從事するものは狹量神經質を癒し寬大沈着寬恕等の善良なる品性を陶冶するを得、又上流の森林鬱蒼と生ひ茂りたる所にありて

論　說

森林と風敎

通常會員　木下　清

我國は輓近に至る迄世界各國より微々たる一小島國視せられしに、日清戰爭に、北清事變に、其武威を世界に知られざるなきに至り、日露戰爭に至りては益々其武名を轟かし一躍して世界の日本帝國と稱ばるゝに至れり、然るに驕つて我が國實業界の進步程度を見よ、軍事に比し其進步の程度低く轉た遺憾の情に耐へず、我國民は銃劍の戰爭に熱狂すると火の燃ゆる如く、平和的戰爭即ち實業に注意すること冷々氷の如し、余は我が國民ゞ少なくとも銃劍に對すると同一程度に於て平和の戰爭に注意せられんことを希望して止まざるなり、而かも銃劍の戰爭は甚だ短期なれども平和の戰爭は極めて永し、我國は森林面積全土の五十五パーセント」を占有し、經營宜しきを得るに於ては直接間接に其效を及ぼし、國家社會の利すること大にして、加ふるに　華對水支那朝鮮の如き、木材の大需用地を扣ゑ居るに於ては將來我國の林業は更に有望なりといふべは常に清淨なる水を流出す、之れ降雨に際しても樹木の冠に激しく下向し來る雨水を受け、徐々に幹より下りて林地を蔽ふ地被薬苔に吸收せられ、水瀧の如き作用によりて湧出するを以てなり、然るに荒廢したる林地上流にありとせば右の作用を受くる能はず、故に常に土砂混合の濁水を流す、何人にても清澄なる河流を見れば爽快を感し、濁水の流るゝを見て不感に怕るゝや必せり、一時的の感すら尙斯くの如し、されば濁川の傍に住するものと清流邊りに住居を構ふるものと其性情の差異甚だ大なるを知るべし、又源泉地荒廢せる河に沿ふて田地の存在する時は、夏日旱天の時に際し多くの水を要するも其荒廢の爲め土民供するに途なく、苦悶の餘り小量の水の分け方に爭ひ水論の喧嘩となり、果ては警察の手を煩はすに非ざれば止まざるに至る、斯くの如き例少なからずと聞く、世原因畢竟森林の荒廢より來りたるものなりとせば恐るべきに非ずや、斯くの如く列擧し來れば其例証に迫あらず、要するに森林の風敎に甚だ益あるも之れに反し一度荒廢したらんには驚くべき慘狀を呈するに至るべし、今下に揚ぐる實例は一地方に過ぎずと雖も、其害の風敎に及ぼす多大なる事實に眼もあてられぬ程なり、所は加賀の

國鶴來町にして此地に注ぐ河流の源山地は例の日本特有の產たる発頭痛に襲り見るも慣ゐり、明治二十九年頃なり一日黑雲天に漲り頻りに雨を降らす、発頭遂に之を支ふる暇なく一時に流出して雨水四方に漲り、堤防を破壞し河底を埋め、家屋を流し、田畑を荒し、亂行恰も露兵の所爲に似たり、夫れが爲土木工事を盛にしたる結果多數の土方入込み、之れが影響として自然貸座敷の數を增加し、四五年前に比し數倍となり、之れにより娼妓の數をも增加し、尙ほ密になすものに至りては夥しく多かりしと云ふ、而して青年等は實に惡しき風に感染し、該町及び其附近に住する青年等は其則に犯せす遊蕩者として數へらるゝもの非常に多く、從て例の花柳病の流行夥しくなりしといふ、又隣國より入り來りし工事請負者は商店により諸品を借り受け何咋はぬ顏にて逋走し多數の商店に多大の損失を與へしめ其額の少なきも參四百圓多きに至りては千圓余にして其數人なるを知らず、甚だしきに至りては四五千圓の損失を招き之が爲廢業の止むなきに至りし等其他損失を蒙りしもの多し、即ち附近細民は當時米價高く工事勞働者の賃金割合に高きより喜び競ふて勞役に應ヒ、賃錢後拂なるにも拘はらず其支拂を豫想して大に奢侈放蕩し、是れも例の遊巡法によりて見捨てられ、其豫想は恰も鳩公の誅となり、爲めに其支拂方に困ヒ遂に祖先傳來の不動產を失ひ借金を作りしもの尠からずといふ、其風敎を害し、不德を敎へ、不人情を勸め、人を傷け、家を亡ぼし、世を害する驚くべきに非ずや、以上鶴來町の實例は或書に散見せしものにして其記憶に存するものを書したるのみ、尙詳細に至りては尙ほ大ならんと信ず。

是れ一地方に過ぎずして全國より觀察すれば粟粒にも價せず、然れ雖我國の如き荒廢地を以て蔽はるゝ國土は各地ゐれが爲め幾分宛の風敎を害れつゝあるや疑なし、之れを合すれば亦甚だ大なるものなるならん、風敎に及ぼす害すら實に大なり他方面の損失に至りては統計表を見て愕然たらざるを得ず、豊等閑に附して可なるべけんや、世人近時漸く眼を林業に配するに至り小學校に植栽日を設け、學童に愛林思想を養成し、日露開戰に至りては小學校及び地方團体として紀念林の設をなし面目を改むるに至りしとは云ひ、未だ微々たるものにして尙隆盛の域に進むには長日月を要するや必せり、思ひて益々林業の隆盛を企圖せざるべからず。

吾人の責任

川岸滋二郎

元來筆を執り文を作るは由來短所勝ちなる余の最も短所とする所なり、故に今日遙本會報に意見を發表するの自由を有しながら是をものする事未だ一回も之れ無かりき、然るに今回會則改正の結果其責任を免るゝ能はざるに至り聊か余白を借り所信を述べて其責を免れんとす、斯くの如く極めて拙筆なる余は以て充分なる達意盡情の文を作り得ず、讀者諸君寛大を以て之れを諒せられよ。

却說、吾人は意を此林業に向け笈を負ひて遠く當地に遊び、勉强する事茲に殆んど三ヶ年に滿たんとす、誠に日月の移るが如く速なるものなく、一度消費すれば又歸る事なきは金錢と毫も異なる事なし、而して此時間は宇宙の有らん限り極まる事なし、此極まりなき永久の時間中に短生涯を得て地球上に生れ出で、社會を構成したるは即ち人間なり、而して其各々何事やらん成さんと欲する其企望たる實に些々たるものと謂ふべし、然れ雖此些々たる時日に於て古來大偉業を成就し其名を千載に殘せる人少なからず、故に諸君、余は信ず、此些々たる時日も是を空費する事なく經濟的に消費し以て天稟の性を發揮せんとする時は如何でか大偉業を成就し得ざるの理あらんやと、所謂「彼も人なり吾亦人」の格言を記憶すべし。

凡そ人間社會に於ては地球上に存在する總ての生產材料を綜合し、一般社會の欲望に任せて生產し分配消費して各其欲望を滿足せしめ、以て各自が幸福を享受せんと計るものなり、而して今日の社會に於ては一人以て萬端の生產をなす能はず、必ず分業によりて各人の天稟の性の悉する處種々の物品を製出す、然らば吾人は如何なる分業に從事するか、謂はずして明なり即ち今日社會に限りなく需要ある所の木材を生產するの林業之なり、然らば吾人は社會の如何なる部分に於て、如何なる責任を以て、如何なる大偉業を爲すべきや、次に少しく述ぶる所あらしめよ。

總て何れの國を問はず最も生活に便利なる地點に最も多數の人々集合し、(即ち都會)之れより漸々遠ざかるに從ひて人口稀少となり、生計上の点に於ても次第に不便を增加するを原則とす、從ひて地方により其生業を異にするは自然の勢なり、即ち都會の地方にては概ね商業工業行はれ、其次に位する地帶にては根菜類の栽培業行はれ、尙遠かるに及びて米麥の類耕耘され、

其次に牧畜、最も不便にして最も遠地に於て森林と云ふ如き順序に、職業を配置されたるものなりと或書籍に依りて見し事あり、即ち人々の多く集合する所にては人力を利用するの事業行はれ、之に反する地方にては多く天然に依賴するの業行はる、然らば吾人が志す處の林業は最も生活不便の地点に於て殆ど天然にのみ依賴し、僅に資本及人力を以て之を助勢すれば經營するを得るなり、故に商工業にては資本及勞力を巧に運轉する時は多くの利益を得て社會にも幸福を與ふるが如く、我林業にては此天然を巧に利用する時は資本勞力を節約する事を何生産額を增大するを待、然るに見よ我國に於ては未だ此天然は悉く利用されず、寧ろ放棄しあるを如何せん、即ち天然は吾國土に對して多くの生産材料を供給す、然れども人皆之を放棄して工業鑄寸、製紙等に於て原料たる林産物漸く欠乏を告げんとす、實に邦國の爲に遺憾ならずや、余は嘗て石川縣羽咋郡東增穗村に遊びし事あり本村は三面山積き西方一面のみ開放して海に面し、其中に一條の細流貫通したる砂地不毛の地にして、一度風吹けば砂を飛ばし咋日の凸處は即處に變じ即處は凸處となるの小砂漠の如き地にして人民は漁業鹽燒を業とせし處なりしに、齊藤林學士石川縣技師となられ熱心に林業を奬勵されしより東增穗村に於ても盛に此砂地に向て黑松を植栽せり、然るに天は無常にも風を吹かして砂を飛ばし丘を埋み溪を埋め苗木を埋め或は根を出し植栽事業をして殆ど失敗に歸せしめたり、茲に於てか一考を按出し先づ其砂地に向つて葡萄莖を有する植物を植栽して地表を堅め、然る後に黑松を植栽したるより其結果非常に宜しく漸々成功せんとしつゝあり、而して其成功の曉には以前は一厘だの生産を爲さゞりし此地に於て無慮八萬本の良材を得るならんと、而して八十年を輪伐齡とし一本一圓に賣るものと仮定する時は一ヶ年に一千圓づゝの生産をなす、其他前收入なぜ實に大なるものならん、又從來の飛砂を防ぎ漁業に對して魚附林となり、衛生上風致上等の間接の利は之測り知るべからずと、噫之天然は植栽其日より生産料を始めて與へしに非ず、遙に以前より其れと同樣の天然を與へしものなり、然れども村民は斯くの如き利を此砂地に放棄して意とせざりしものなり、之唯區々たる一例に過ぎず、天下此種の寶の棄ち腐さりは決して少なからざるべし、乍併不言不語の間に受くる損失は之を意とせざるは人情の常なるが故に決して其怠を責むるに足らず、之を知らしめて其利を享けしむるは吾人林學を研究するものゝ責任なり、而して林學も他の諸學科と同じく星移り物變るに從ひ諸大家によりて進歩したるものなり而して將來の諸大家によりて無限に進歩するものたるべし、然らば今日迄に進歩したる林學を一層進歩したるものとして後世の社會に遺すは吾人の責任なり、而して其林學の範圍たる頗る廣々し、又吾人は此本會山林學校を卒業したりとて、其素養未だに淺く、林學の蘊奥なる点迄研究する事能はず、從て後世に大偉業を遺す事能はず、然れども意志の存する處必ず達するあり、學問必しも深きを要せず、眞理は常に目前にて實驗されつゝあり而して綿密なる注意によりて、之れを發見さる、蒸氣力の發見も電氣の發見も皆之なり、然れども亦非常に深奥なる學問によらざれは發明することは能はざるものあらん、只吾人にして更に高等の學校に入學して、高尚なる學理を研究するものにされ、教育に從事するものにされ、地方公共の上に立ちて種々の事業に從事するものにされ、何れの方向に向ふも確固たる意志の劍を以て奮鬪し、短かき一生を犧牲に供せんには如何でか大偉業を成就する事なきを得んや吾人の責任は茲に至りて完せりと云ふべし。

旅行に就ての所感

M W 生

抽文意の存する處を沒却せらるゝの恐れ無しとも限られざる故、大意を括り記して觀者の便に供す。

第一、旅行の効用。
第二、難者の言の愆されるを古事を引て說明す。
第三、精密なる觀察眼を以て旅行せよ。
第四、無實驗なる學問は眞理に其光りを發起する事が出來ぬ。
第五、國民の惡癖と其原因。
第六、不都合ある原因の除かれたる今日より多く修養すべき時代にある吾人は幸ひに進で旅行せよ。
第七、時局の欠点をより多く補んには如何にすべき。

× × × × ×

可愛き兒には旅をさせよとは唯世の中の辛苦を舐めさせんと許りには非ずして、山に登り海を渡りて愉快闊なる風光に接せば自づから豪健なる氣象と高潔なる心氣を養ふ事を得、又域趾を問ひ墳墓を探る毎に當時英雄の偉業を追懷すれば自ら忠愛の心を惹起せしむる事もあるべく、特に實業學校に於ける旅行は一層肝要なるものがある、即ち常に修學せし事を實驗觀察に徵し

て其知識を確實にするの效がある、悉く是等の効能を擧れば旅行程愉快にして又有益の者は無ろふと思ふ。然るに較もすれば修學旅行を批難するものがある、曰く修學旅行等と立派の事を云ふも只貴重の財を費やし、迂闊で喋き廻りて何の土産をも持ち歸らぬ若樣が大部分ある、ぜーも收支相償はない愚の至りである、夫よりは其の費用もて新刊の書物でも購ひ得て熟讀玩味せば如何にと、其の言や可ならん、併し殆ど實行するもの稀れである、猶甚だしきは無爲に過ぎ去るものゞ比々皆然りである如上の論者の說の如きは一應尤もらしく聞ゆるが完き賛成を表し難きものがある、畢竟是の說の可否は人格の如何を決定すれば足るのである、論者の如きは行くも行かぬも人格の主要点に變化なしと認むる處より起る言だろふ、之れは未だ常人に簡單には人格を評價すべき適當の量衡が發見せられて居らんから無理だけれども、其の本を尋ぬれば其の能力が差があると認めてよかろふ、蓋し大なる差は一目して容易に分別が出來るが少なる差は判然せぬ、一寸觀て差別し得ずとて否認するは大早計であろう、試みに或處に旅行せし人とせぬ人との說を聞け、前者は其處の事物に就て確知して誤謬なきも後者は間接に推定するに過ぎず、之れでも差なしと云ふや、彼の批難者の如きを喰はず嫌の人とも云ふべきか、即ち其趣味を味ふた事なく唯目前の小利にのみ惑ひ遠大の利に注目する能はず、書籍や講師に依らざれば修學や智識は得られぬとのみ思ふて居る、實に哀しむべきものである、乞ふ且らく夫子の言を聞け、子曰、予欲スレ無言ント、子貢曰、子如シ不レ言則チ小子何ヲカ述ン焉、子曰、天何ヲカ言ン哉、四時行キ行キ焉、百物生ジ生ジ焉、天何ヲカ言ン哉！嗚呼偉哉此言、是れ修學や得智は書籍や人を待たなくも出來る、萬有は發言せなくとも立派なる講師宇宙は偉大なる教室（クラスルーム）であると云ふ事を教訓せられたのであろう、實に古今を通じての眞理である。然れども旅行したとて不注意の素通りでは何等の益も得ぬが、克く心して之れを迎ふれば宇宙は吾人に向ひ喜んで眞理の扉を開くであろう、されば精密なる觀察力を有する底の人ならんには微細なる變化も眞理を發見するの材料となる事がある、熟したる檎子の落下も不注意なる人の目には無爲に看過せらるゝも、一度ニユートンの目に映ずれば引力の發見となり、鐵瓶の口より發する蒸氣も蒸氣機關の大發明となる樣な譯である、さればニユートンの心して聞けば流水も眞理を語るべく石も秘密を教ふべしと、實に千古の知言、之を見るも講師や書籍によらざれば知識は得られぬと思ふのは大なる誤りであると云ふ事がわかる。

彼の實驗に依らざる學問は恰も油を欠ける時計の如く、殆んど見ゐに變りはないが滑動する事が出來ぬ、金剛石もみがゝざれば光らぬ、人も社會の風濤や天下の雲水に研鑽せられた後に始めて良材となるのである、否らざれば眞摯に學問の光りを發起する事が出來ぬ、徒らに乾燥無味なる三角や四角張つた規矩や繩墨で尺寸せらるゝ机上の空論に心醉せんよりはなるべく實地に就て研究せられよ、大に自得する處があろふ、宜べなり本校の修學旅行を一學科中に編入せられてある事をや、遠地より茲に遊學せられつゝあるものは途上幾多の變象に遭遇せられしならんも、平素斯る心懸けを欠ける人にはとりわけ旅行は必要であろう、元來我邦民は鳴國根性（ホームシツク病）とてあまり嘆賞すべからざる性癖があつて宜しくない、是れ何によれるや、即ち幕府時代の制として事大小となく鎖國制に則とり、處々に關門を設け旅人を煩はし、大船を造る事を止め遠洋航海を禁じたる影響として國民をして退嬰的ならしめ、旅は憂きものよつらきものと云ふ觀念を知らずの間に注入したる因襲の然らしむる處であろう。

併し明治維新と同時に諸外國との交際は開け、交通頻繁となつた其結果として外國の事情も明かとなり、自然國民の思想も多少濶大となりました、今や既に區々たる島國的根性に拘束せらるべきれ時ではない、宜しく大に打破せねばならぬ、之れには旅行をするのが最良の手段と信ずる、殊に團体旅行は大に安ずべき點ゞある、各自進んで採るべき事と思ふ、吾人は今より多く修養すべき代時である、此時に於て遺憾なく蓄積し他日雄飛の資とせねばならぬ。

今や我國は東洋の平和を攪乱しつゝある暴露を膺懲せんとて、百萬の雄軍をして已でに滿洲の敵を蹂躙せしめて居る、而して海に陸に戰へば必ず勝ち攻むれば必ず取り版圖漸く膨脹せんとして居る、武器を以てせば流石の那翁も三舍を避くるであろうけれども、平和の戰爭即ち經濟上の競爭に於ては之れと並行しない樣に考へる、此處吾々の迎へつゝある實業場裡に於ても熱慮と蹶起に須たざるべからざる處、祿々として終生五斗米の爲に腰を屈せんよりは寧ろ平素鍛練せる處の手腕を揮つて極大なる實力の發展を謀り、我大帝國の光輝をして海外に赫々たらしめん事を期さねばならぬ。

雜録

第二學年修學旅行記

（明治三十七年度）

時茲に萬山紅葉もて染なし、秋風うよ吹きて人の心淋しさを感ずる時、十月三日より、向八日間北越地方へ修學旅行すべきを師の君より豫言せられたれば、早く其日の來れかしと鶴首して待ちに待ちたる其日は愈々來りぬ。

十月三日、福嶋發奈川着奈川一泊。

滿腔の樂を以て午前五時半の起鐘と共に床を蹴つて窓を押せば、嗚呼天吾等に晴天も借さで烟の如く霧の如き細雨は霏々として下り、雷鳴さへ響き渡りぬるも何のうのと言はん計りにて、時鐘七時を報ずるや旅裝の用意も全く整ひたれば、指導の先發者を除き現員十七人如何なる惡魔も踏みひしぐべき勢にて校庭に整列するや、途中便宜の爲め五組に分たれたり、愈々七時半の時振と共に勇豪壮々松田校長及び百瀬教諭に引率せられ校門を出づ、諸先生亦に三一學年の君達に雨天にも拘はらず遠途送見送り給ふ、吾等の深く謝する所なり、共に暫時の別を告げ余等の一行は踏み占むる草鞋聲々と東に向ひ歩を進め、七笑橋を過ぎたる頃は雨も止み、宮の越に至れば木曾義仲や巴御前の昔忍ばれて菩提吊はんも時間の猶豫なければ後日に讓り、道すがら快談談笑薮原に達し米屋に休憩せしは午前十一時なり、此所に於て寺嶋三原の両君も一行に加はり其れより中仙道線を離れ小木祖地に入り、卒業生永瀬君の宅に於て用意せる中食を食し休息二十分の後足を進め坂井峠（海拔一三〇〇メートル）の險も越へ小木曾小學校等を視察し約一里程も在らんずる御料林中を横ぎり奈良竜屋に着せり、時に午後五時三十分なりき。

福島以東木曾川の沿岸は痛く荒廢し檜花柏等の生ひ立てる森林なく、至る所孤立木地雜木林其多數を占め、殊に薮原附近は森林に最有害なる山野火入の形跡あるを見る、之れ牛馬の飼料又は肥料として柴草採集の爲め斯かる惡習を實行しつゝあるならん、されば是に就きて適當の方法を講ずるは目下の急務ならんと思推す、薮原奈良井は共に櫛の名産地にして毎戸之れが製造に從事せざるはなし、而して其櫛の原料樹種たるや早や該地方は既に跡を拂ひ、今は遠く飛彈地方より供給を仰ぎつゝ有りと言ふ、然れども飛彈も亦此種の無盡藏なるに非らざれば其原料需用の前途を憂ひつゝ有るは勿論ならん、故に斯業の發達繁榮を計るは原料樹種の植栽を成すに在り、該業は今後幾年かの後に於ては一大打擊を來し各戸悲境に陷る事有らん、故に此種の植栽を促すは喪に忽諸ゝ附せべからざる事なり、小木祖に入れば所々に落葉松の人造林散在し居るを視る、而して細嶋より少々隔たりたる道の右側に小木曾分教場學林有り、樹種は落葉松にして卅三年四年に植栽したるものにして反別五畝歩、地は南向にして生長頗る良好なりき、然れども學林地としては距離遠隔なると植栽法手入保護に於ては不適當の感を抱けり、これより登る凡半里程にして坂井峠の頂上に達す、此所には檜、椹、唐檜、其他雜木年齢約七八十年生の者適當の開墾を保ち散生混交林を成し居たり、此の頂上は非常の濕潤地にして五六町の間は恰も鐵道枕木の如き木材を横へて人馬其上を通行す、此地に植栽するに適當なる樹種作業法に付きて校長先生より説明あり、左に記す。

廣大なる山野火入の跡地、即ち無立木地に造林するには先づ落葉松を粗く植ゑ、而して五六年後に至りて檜椹等の良樹種を植栽し、落葉松は用途ある時に之れを伐採し、扁柏花柏の單純林を造成すべし、又御料林の如き天然林には帶狀に皆伐作業を行ひ、而して側方天然下種を行へば費用も少額に造林する事を得と。

本日の日誌を記載し、各自午後九時半の時振と共に就床す。

十月四日、奈川發島々着嶋々一泊。

午前六時起床すれば、嗚呼天亦も吾等に何の恨みある者か本日も雨降りしきり余等の一行を困難ならしむ、さりとて逗留すべき餘日もなければ兼皆雨を犯し午前七時に旅宿を出發し嶋、行く〳〵眼を四方に廻せば突兀たる山岳皆禿頭の疾病に罹り、土地は崩壞して森林荒廢の度殆んど最高限度に達し居り、偶々落葉松等の立木地を見受けしも之れ亦思ふべき林は余等の視線には觸れざりき、一里程にして奈川村役場に着し半時間の休息時間を得たり。

奈川林産物並に製造品表（明治三十六年度調査）

炭粉、縣内輸出二千七百貫此價格千六百二十圓

仝、縣外輸出一千五百貫此價九百圓

合計四千二百貫總價二千五百二十圓

但し一貫目六十錢製造所二百戸（農業餘業）

薪炭材、縣内輸出炭五萬五千六百貫此價二千二百二十四圓(但し一貫目四錢)炭窯數拾五個

薪、縣内輸出拾六萬貳千貫此價壹千貳百九拾六圓(但し一貫目八厘)

雨も止みたれば全所出發コンパスを伸し始めぬ、梓川の清流を左に見飽立たる奇巖快石を右に眺めつゝ、西筑摩郡の最北極端なる茶屋に於て中飯を喫し、尚は進みて天狗巖等の奇巖を視、午後二時三十分に南安曇郡安曇村御田長七氏の借用に係る鑛泉風穴貯藏所に着し全所を視察したり、其構造は四方石垣にて積み重ね入口は六尺四方、北向にして穴の廣さは三間四方あり、光線を取る爲めに一尺に二尺位の窓を設け有りき、其中は非常の冷氣を覺ゆ其溫度五月は三十五度、夏四十五度、九月頃五十度、繁殖紙入貫は枠製一枚一錢平均一枚二錢にて、貯藏期節は二月頃より八月廿日頃迄なりと言ふ、斯かる風穴二個在りて繁紙六萬枚位を貯へ得ると謂れも、午後三時稻核に至り非常に生長良好なる稻核共有林の落葉松、杉の植林地を視察したれば該地に就て見聞せし儘を記さんに、全地は明治卅一年より經營事業として毎年一萬本を植栽し、卅六七年には杉一萬本宛植林したりと、而して其植林法は稻核村全戶百卅戶の内より毎戶一人宛を出し、一日に一萬本植付くるに足る丈けの土地の燒拂へ穴掘等を成し植付け居ると云ふ、其杉一萬本の代價は四十五圓落葉松は一萬本拾五六圓なりと、三十一年に植栽したる落葉松は早や貳間余り伸長し居たり、斯くの如く熱心に植林したらんには近き將來に於て一大財源の成立せらるゝは疑ふべからざる事實と思考す、夫れより稻核小學校に立寄り島々の加藤富七氏方に宿せしは午後五時にて、九時各自就床せり。

十月五日

午前六時半の朝飯後、七時より八時迄小林區署長の演說有り左に之れを記す。

安曇小林區署長窪田林務官の演說

「只今此小林區内の森林事業は伐木を以て目的として居る、うゝして其伐木材はクシ木、薪、建築材の三種で有りまして目下搬運搬中で有ります、クシ木の長さは三尺で有つて七五三に割るので有る(七五三とは七寸五寸三寸の割合を以て割るなり)之れはクシ、天井板、屋根瓦に用ふるですが、此のクシ木材を運搬するには長さ一尺厚さ一寸の板で製した樋に由りて順次運搬するので、場合に依つては十町乃至廿町を運ぶので有ります、一丁の價は拾五錢乃至廿五錢で此割賃は一丁一圓五毛位である、クシ木に使用する樋は唐檜、白檜、樅、栂等で有るが、樋は樅より都水力强き爲めに價に高下が有るけれども、樅と栂は概ねて賣却して居る、薪は「タッガ」にて運搬をする、之れは所々に水を留め置き一時にどつと水を流す方法である、此法を行ふときは廿六町歩の面積内に在る木材は二日間で運搬することが出來ます、夏期法は特賣と公賣の二法で有ります、昔時は當地方は盜伐が行はれたですが近年に至りては官公事業を行ひし結果今日に至つては大概有りません、然し只今でも貧困なる者が往々椹の皮を剝ぐことが有ります、大白川巨下伐木地面積は參拾八町で樹種は樅、縱、白檜、唐檜、椹で伐出量は八千三百四十尺〆で有つて其本數は長さ六尺乃至三間の着壹萬四千本であります、此伐賃は一尺〆拾壹錢之れは伐木造材共です、只今は八尖七十八居ります、當伐木地より嶋々の土橋迄の運搬造材伐木賃は一尺〆壹圓拾錢であります、故に山地に在りては立木の價は極めて安い者です、最初は造材、伐木、運搬費の見込は九拾錢で有りましたけれども受負の如何によりて斯樣な現象を呈します、而して大白川國有林の總反別は壹千五百町歩で有りますが、昨年伐採した面積は貳拾八町歩で來年度は六拾町歩の見込で有りますから壹萬貳千尺〆は毎年得らるゝ目的であります、然し面積の上より言ふときは立木の粗密に依つて差異があります。」

其れより居るまと時余嶋々製紙株式會社を視察す、借いかな余等の至りしときは運轉中止にて遺憾乍ら其運轉製紙法を見ること能はざりき、只だ抜手の說明を受けしも時間無きと機械の複雜等其他の都合に依り理解充分なるを得ず、只だ十五萬圓の資本金に五萬圓の普請費のみは耳底に止まりし。

長野大林區署營林技師吉田林學士の施業案編成に就きての說明

「安曇村國有林約壹萬五千町歩其三分の一は造林し難き地なり、本談本部三角点の所在地は鉢盛山、舟ケ谷、梓、北澤、有明山、燕岳、中俱岳、笠ケ岳、燒岳、十石山、乘鞍岳、池ケ峰、保倉、常念岳、小嵩山、大圓山、穗高山、霞澤岳、鎗ケ岳、以上十九ケ所。農商務省の三角保点、曲り澤、室山、金正寺山、矢嵩澤、飯山、花峰、熊の澤、槍峠、悲峠、大地、高山、四ッ岳、釉山、以上十三ケ所。

最高所、鈴ヶ岳、乘鞍岳にして此山頂は大概塞帶に属し、樹種は樅、栂、唐檜、白檜、低所には檜、椹の類多し。針葉樹一ヶ年の收入は壹千尺〆にして雜木の收入も有り、大白川伐木跡地は人工造林をなさずして天然更新を爲すの目的なり。

安曇小林區署の管轄の面積は安曇一ヶ村にして壹千五百町歩ありて三保該區に分たる、保安林面積は參拾町歩にして何れも縣道に沿へたる地なり。

國有林は樅、栂、白檜、唐檜、等主なる樹種の混交林なり、而して一ヶ年の收入概算は本年度三萬三四千圓、林地貸料一ヶ年に五六十圓なり。

喬林面積約百町歩矮林貳拾町歩あり、然して本年の稻被村造林面積六十四町歩にして植栽樹種扁柏苗木數貳十八万本、造林法一反歩に付き四百五十本、四尺六尺の長方形植なり。」

午前十時鳴々を出發し小林區署長窪田氏の案内にて安曇村大野田川の木材貯蔵所敷地を視る、巾十間長さ百間の水溜に水の出入口在り、入口は九尺にして出口は六尺なりき、此所に貳十分余の休息を爲し行くこと八九町にして東筑摩郡の地籍に入る・林相は漸次に變りて赤松六分位の占領する樣に見受け、又行く〳〵落葉松の造林所点々せるも植樹法余り感服せず、波多國有林は縣道に沿ふて廿七町全面積百五十二町歩の赤松の單純林にして誠に見物なりき、最大なる者は年令二百年位にして周圍六尺又二尺位の者も有りき、されど平均四尺高さは平均十二間位なりき、聞く所に依れば材質良好なりと、又此國有林を今後五十ヶ年間に天然更新をなす目的なりと、午前十一時半波多苗圃事務所に至り中食を爲し苗圃を視察す、左に苗圃經營の大要を記す。

波多苗圃總面積貳町四反五畝歩

特別經營の貳回床替部

樹種	本數	反別
落葉松	五、一三四五本	八畝廿三歩
公孫樹	五四六本	六歩
扁柏	七、四五七五本	九畝〇六歩
赤松	一、三五〇〇本	二十九歩
杉	五、八五〇〇本	一反〇〇歩

特別經營の一回床替部

樹種	本數	反別
落葉松	四二、七八一五本	四反一畝十九歩
公孫樹	七九二本	五歩

金松	三六〇〇本	七歩・
山檜	一、四七〇七本	三畝十五歩
樅	三、一七〇二本	二畝十六歩

林區之部

杉の一回床替卅一萬千三百七十本此の反別七反八畝歩

播種之部

樹種	種目	種子	面積	附属地
杉		一三〇合	七畝三歩	一反一畝歩
扁柏		三一五合	七畝五歩	一反七畝五歩

杉播種一坪に付き一合五勺、面積一反十七歩にて發芽總本數百九十一萬本にして一坪に付き發芽本數二千八百八十六本種子一升に付き發芽本數四萬本、種子一升の粒數に對し發芽量は二十二%に過ず

扁柏播種量一坪に付き二合、面積三畝七歩五厘にて發芽總本數廿八萬本、一坪に付き發芽本數二千八百八十六本にして種子一升に付き發芽本數一万四千三百九十五本種子一升の粒數に對し發芽量は六%なり

吾等思ふに明治卅七年四月二十一日播種せる杉の一反歩は成蹟良好なれども杉檜等一回床替のものは不良なり、されど該苗木の二回床替のものは良好なり、又地苗木にて落葉松の一回床替不良(四十萬本余の内本年枯損八万本即二割の枯損なり)山檜は大畧枯損、樅又不良、されど金松は枯損なく先つ佳なり而して赤松に於ては佳良なりき

播種苗圃畦間三尺歩道二尺

床替苗圃畦間四尺歩道五寸

床替距離	一回	二回
落葉松	五寸、二寸	五寸、三寸
扁柏	五寸、三寸	五寸、四寸

肥料に就きては播種苗圃には一坪に付き人糞尿六合大豆粕六合を施し、床替苗圃には一坪に付き大豆粕二合を施し追肥として人糞尿又は過燐酸を施肥すと云ふ

人夫賃に付きて尋ぬるに男一人に付き一日三十五錢乃至三十錢にして女子は一人一日二十錢乃至十七八錢なりと

午後一時苗圃を出發し一里餘も進行せしが非常に天地廣々となり遙向に小倉國有林を眺む、遙望一見歩を至らしめずして林相の立派なるを認む、然れども其附近非常に荒廢し禿山の多きを感じぬ、偶々柴生ふ路傍の安樂椅子に一休し夫れより急進して三時半松本停車場に着し飯田屋に一休す、此所にて後町金太郎、山下藤

一、北原利雄、河島正己君等來り會す、團体切符を求めて四時四十七分發の上り列車に乘じ八時十五分長野市に着す、夫れより大門町東洋館に投宿せしは八時四十分なりき、當所に於て春原善太郎、鵜殿正雄の二君も來り合せ一行總勢二十五名となりき、電燈の下に午後十時半迄の隨意散歩を許さる、或は街路淵歩に時を移す者あり、或はホテルに蟄居して一日の勞を慰むる者ありしかして相前後して夢の世に入る。

十月六日晴天、長野滯在、大林區署並に測候所訪問。午前六時頃より漸くがや〳〵、七時例に依つて例の如く草鞋脚胖に足を堅め行厨腹にして出立す、時は八時、直ちに行きて詣でし善光寺堂の構造や宏にして壯、有難く拜し踵を廻して測候所に向ふ、行きて場員の說明と共に晴雨器其他の氣象上に關する器械の縱覽を得たり、居ること約一時間去て大林區署に至る、署は長野市の北方高地に在り、營林技師小山晉次郎氏の先導にて同署所轄の苗圃を見る、所屬町歩約五町歩にして扁柏、花柏、樅、胡桃、山榿等の數種播種及び移植し有るを見る、然れ共是等は單に苗木を得るの目的にて栽培したる者に非らざれば播種量等詳細に知るを得ざりき、時恰も正午を過ぐる分餘なりされば各々腹にせる行厨を食し憩ふこと時余、時に松本事業區施業案說明書を貸與せらる、依て各々額を集めて見る左に是れが說明書の摘記を擧ぐ。(故ありこれを畧す)

本日は余等一行の爲めに署長より何か有益なる演說を受くる豫定なりしも折惡く不在中にて其の事に及ばざりしは實は遺憾なりし、是にて本日親察の豫定も濟みたれば禮を述べて出發す、夫れより各自自由散歩を許さる、此夜東洋館に宿す。

十月七日　曇天　午前九時より午後二時迄降雨。

吾々二十有余名午前四時床を蹴て飛び起き四時半には朝食を終へたり、用意も整ひたりいざと宿屋を發せしは午前五時、曉風に衣を拂ひつゝ長野ステーションに至れり待つ事少時にして長野發下り第一番列車に搭載し瀧笛一聲諸共に直江津さして汽車は走り始めたり、窓を打ち明け眺むれば稻田遠く連なりて葉末に置ける白露は風に亂れて玉と散る、嗚呼心地よき哉秋の朝、やがて瀧車は吉田豐野を打ち過ぎて午前七時柏原停車場に着せり、吾々は一先づ此所に下車し黑姫山麓國有林の植林地を見る可く西の方細き山路に分け入り行く行く山間の一小村落二の倉と云へる所に至りぬ、此所は甘茶の產地にして一ヶ年の收入一千圓に上り製造家約三十戶ありと、尙歩を進むると暫時にして廣大なる原野は余等一行の前面に現はれたり之れ即ち黑姫山麓國有林の植林地なり、思ふに此地は今より數年前は只ボウボウたる草原たりしならん、然れども今後此地に植林し數拾年の後に至らば實に廣大美麗なる大森林となるべし、更に歩を進めて漸く林道に出でたり時にタマタマ驟雨に逢ひ困苦を僕して午前拾一時二ッ澤と云ふ所の事務所に到着せり、事務所は天幕製にして保護區員の寢食する所なり此所にて保護區員の談話を聞く其大要を記すれば左の如し。

「抑も此國有林は上水内郡にあり、總面積二千五百町歩、造林に使用すべき面積二千町歩、之れを五ケ年間に悉皆植付終はる豫定にして三十五年度三百町歩、三十六年度三百町歩、三十七年度三百町歩、三十八年度三百町歩、三十九年度は其他の不毛地を植栽すべき豫定なり、而して其植付樹種は扁柏、赤松、杉、樺、栗落葉松なり植方は赤松杉扁柏は列間六尺苗間四尺なりしが本年は苗間を五尺とせり、栗樺は六尺の正方形植にして栗は又六尺の正三角形植をなしたる所あり、人夫の割方は男四人女三人を一組とし、內男一人は植穴の位置を定め三人は唐鍬を以て穴を堀り女は手八丁を以て植をなすなり、而して二組每に一人の苗木配布人を附して穴を堀りたる所に之れを配分せしむ、三組乃至五組に一人の組長を置き之れをして苗木の出入計算組下人夫の監督をなさしむ、目下人夫は二百五拾名にして之れを三拾五組に分てり、植栽時間は午前七時より午後五時迄十時間の中一時間の休息時間を與へ九時間を勞働せしむ、植付本數は一日に栗樺は一組に付き千四百本一人二百本の割合、杉扁柏赤松は同じく二千四百本一人につき三百五十本計の割合、落葉松は同じく二千八百本一人四百本の割合なり。

二十町歩を一林班とし區畫線は防火線を以てす、一町歩の造林費は苗木代を除き地拵より植栽し終る迄拾五圓位なり、人夫賃は男一日三十錢乃至三十五錢女は十八錢乃至二十五錢組長は四十錢乃至二圓位なり、又植付の請負をなさしむる事あり三ッに分つ事業請負、供給請負及び小傭請負之れなり、事業請負とは一事業區の請負にして直接に使用するもの、供給請負とは何時にても必要の人夫を出し得るものにして、小傭請負は一人一日の賃錢を定めて植栽すべき苗木の數を契約するものなり。

防火線の巾は拾間にして之れが燒拂は春秋二期に於て

す、春は四月上旬より六月下旬迄秋は十月下旬より十一月下旬迄に行ふ、而して之れが方法は三百間の間に十人ばかりの人夫を配布し、風上又は風下或は山上山下等其時の都合によりて之れを行ふ、一日に大低三百間のもの二本位を燒く又野火番人四人を置きて受持區域を巡視せしむ、此地は殊に西風强し。」

午前十一時二ッ澤事務所を出發して雨中人夫等が植付をなすを視察し、原野の中を走りて正午十二時國有林柏原苗圃に着せり、此苗圃は面積拾五町歩使用面積十一町歩余にして樹種は扇柏、杉、落葉松等にて成蹟概して良好なりき。

吾々は午後一時柏原發の瀛車に乘らざる可らず、故に急ぎ此所を發し猛雨沛然たる中を走り濡ねづみの如くなり柏原停車場に着せしは零時二十分なり、此所に休息する事暫時午後一時發列車に搭載し直江津の方に向ひたり、田口關山新井高田の諸停車場を經て直江津に着し停車場前のいかや支店に投宿す、午後三時より五時半頃まで隨意行動を許されたり、吾々元氣數倍走りて海岸に至る、時に波風荒くして狂瀾怒濤嶄巖絶壁に激して音轟々たり、夕陽波を彩色りて海原遠く晴れ渡り遠帆靡するが如く近帆行く、洋々たる水を隔てゝ觀望すれば雲烟漂渺として遙に佐渡の嶋山を見たり、遠近人の船を呼ぶ聲磯打つ波に千鳥の聲蘆の上葉を渡る風の音、漁村柳風に靡きて襲はす門の夕日影入日をあびて飛ぶ千鳥、神心ために恍惚としてしばし爲す所を知らず、飽かぬ眺めを後にして宿に歸れば既にランプは點せられたり、やがて夕食も終り欄によりて休む事少時直江津小林區署長及び次席の二人訪問されたり、諸々の語を承はる其大要を左に記さん。

「直江津小林區署の管轄區域は東頸城郡西頸城郡中頸城郡及び莇田郡の四郡にして全面積五萬六千町歩、内西頸城郡三萬町歩中頸城郡二萬町歩東頸城郡五千町歩莇田郡千町歩、其内七分は森林にして三分は無立木地なり、保護區は絲魚川關山直江津安塚の四ヶ所にあり、國有林の主なる樹種は山毛欅八分を占め五葉松篠竹は僅少なり、而して無立木地に植樹をなすには三十六年度百十八町歩（赤松）三十七年度八十六町歩（赤松）にして今後百町歩づゝ七八ヶ年の間に植付終はる見込なり、一町歩の造林費は苗木の代を計算に入れずして地拵より植栽を終る迄約十七圓なり、造林に用ゆる樹種は赤松約八分杉二分にして植方は赤松にありては四尺に六尺の方形植杉は六尺の正方形植なり。

人夫賃は男廿五錢乃至三十五錢女十五錢乃至十八錢組長は五十錢位なり、而して植付一方にて熟練者は一日六百本を植付け普通は二百本乃至三百本にして一日の勞働時間は十時間なり、海岸に二千町歩の保安林あり、國有林より產出するものは主として薪炭材にして一棚三十五錢乃至五十五錢なり、一ヶ年の收入は薪は一千二百圓地所貸附料二百圓副產物八百圓其他造誤伐等より多少の收入あり、一ヶ年の伐採面積は喬林五十町歩矮林二十町歩合計七十町歩なり。

昨年なりき、赤松の植付後七年八年九年のものに小金虫發生し之れを捕殺するに男子三十人女子二十人を使用し、男は樹木に登り之をゆすり落下する虫を女が箕を以て集め三日間之れをなして二石八斗を捕集せり以て其害の甚だしかりしを察するに足る。」

談話終りて皆寢につく之れ明朝出發早きを以てなり。

十月八日　晴天

午前五時用意整ひていかや旅館を出發し道を海岸の方に取りて有名なる「イントルナショナルウイルコンパニー」を遂觀すべく急ぎしが時間の切迫せしため細かに視察する事能はざりき、加之案内者の說明を記するは外人の厭ふ所なれば之れを止められたしとの案内者の言故に充分之れを記憶する能はざりき、案内者の言によれば本社の資本金一千萬圓にして規模の廣大器械の完備實に驚かざるを得ざりき、吾々は先づ案内者に從ふて第一原油の入れられたる釜を見たり此釜は八百石乃至一千石を入るゝに足るべく、諸所に原油の貯へられたる大桶あり原油は發堀所より鐵管を以て導かれ此貯藏桶に入り、之れを釜に入れ熱する時は蒸氣となる、之れを鐵管に依て次の釜に送り此所に冷却せらる、而して前の釜に殘りしものは燃料に供する所のコークスかり、此冷却せられたる油は次の釜に送られ混合物を沈澱し純粹なる石油となる、尙之れを熱すれば重油器械油等を製するを得るなり、純粹なる石油は又鐵管に依て鑵に詰める所に送らる、此所にて一時に十二個の鑵に詰られ箱詰所に送らる、總て皆器械の力に依りてなしたるものなり、石油鑵の製造箱の製造等實に迅速にして職工の仕事は各分業となり居り、實に吾人の眼にはめづらしく感じたり、其他詳細なる事は到底筆に記する事能はず、吾々は一通り視察を終へて會社を辭したり、然るに時間は切迫して余す所僅に少時疾走して直江津ステーションに至り氣笛の聲と諸共に日本海の波を後にして歸路につけり、昨日通りし所を

再び通りて長野に至り篠の井線に乘りかへ屋代に下車し八幡社へ參詣なしたり、社は鬱蒼たる老杉中にありて頗る有名なるものなり、此所にて晝食を終へ月に名高き姥捨を見姥捨ステ！ションにて再び乘車し午後八時頃松本に着し、東町なる川口屋旅館に投宿す。

十月九日　曇天

午前七時川口屋を出でゝ松本小林區署を訪問し、又長野縣設置有林苗圃を視察したり、此苗圃は面積七町四反歩にして現在使用面積一町三反歩本年始めて之れを經營せしとの事なり、土壤は粘土質にして旱魃の害に罹り易しと、此故にや落葉松は枯死せるもの多かりき、現今試驗しつゝある種類は、敎土試驗、肥料試驗、播種期試驗、播種量試驗、種類試驗等なり。

吾々一行は午後〇時三十分松本發列車にて鹽尻に着し山岳のうね〳〵たる木曾街道に入り、洗馬に一休し午後六時頃贄川に着し當地に一泊せり。

十月十日　雨天

午前六時起床七時出發、雨を侵して第二の古郷たる福島町に至るべく奈良井に一休し鳥居峠を越へ宮の越に至れば、三年生及一年生の諸君は此雨にも不拘遠路わざ〳〵出迎に來られ、七笑に一休し旅行話をなしつゝ午後四時無事學校に到着せり。

佐渡紀行

柳澤熊治

變化なき生活は趣味に乏しく人をして倦怠に陷らしめ從つて精神を疲勞せしむ、吾人は常に山間幽谷の間に生活す、故に偶々海洋を航して孤嶋に遊び、境涯を異にして心神の慰安を求め、高潔清麗の氣宇を養ひ、地理を探り人情を訪ね、己れの識見を廣め以て吾人修學の料に資せざるべからず、況んや吾人の如き志を林業に存するものは殊に異なる土地を蹈み異なる氣候に浴して異なる森林を視察するは、之れ所謂百聞一見に如かざるの謂にして活物に當つて活智識を得る所以なり、之れ吾人ゞ佐渡旅行を企てし所以にして、今余輩が會報の餘白を汚さんとするに際し、一言して諸君に旅行の趣味ありて且つ必要なる所以を述べ、以て諸君に佐渡を紹介せんとす、但し日記に先ち佐渡に關する大体の説明を附する事とせり。

(一)佐渡國地誌

佐渡は北海の孤島にして、十數年前迄は金礦の産出を以て日本一と歌はれ、今尚其三位を降らざるもの之れ佐渡が嶋根なり。

嶋根は火山帶なるを以て國中第三期層を見るなるのみなり、地質學上に於ては實に簡單なるものなり。

交通　新潟と毎日の定期航海を始めとし、西は下の關より東は北海道行の滊船往復の通路に當り、加ふるに北海第一の兩津港を有するが故に、其便利なることは鄙に殘れる

來へと言たとて行かりよか佐渡へ

佐渡は四十五里波の上

俗歌は只々古代の名殘を止むるのみなり、陸上は汽車こうなけれ縣道四方に通じ車馬の往來自由なり。

面積　五十三方里十分の三にして、内に一萬九千五百七十町歩の山林及び九百七十四町一段一畝四歩の原野を有す、而して其山林は五〇％の赤松二〇％の杉一〇％の黑松二〇％の雜木を有す、赤松黑松は其成長良好にして國中の松材は建築材に供し、海岸地方の松材は薪炭材に供す、材は樹脂多き故桶材として越後方面に輸出す。

今茲に參考の爲め明治三十六年度佐藤森林伐採表、森林植栽表、郡有林設計書及佐渡郡竹林植栽の方法を記せん。

森林伐採表

第一　木材

樹種	用材 數量	用材 單價	用材 總價	薪炭材 數量	薪炭材 單價	薪炭材 總價
羅漢柏	一、八七〇	三〇〇	五、六二〇	—	—	—
松	一九、二〇〇	二、二〇	四三、二四〇	二六、二〇〇	一、四〇	三二、六八〇
杉	一九、六〇〇	二、四〇	四九、〇〇〇	一、三〇〇	一、二〇	一、五六〇
計	四〇、六七〇	—	九七、八九〇	—	—	—
栗	二、四四〇	三、四〇	六、二二五	二〇一〇	一、四〇	三〇一五
欅	二、五〇	五、〇〇	一、二五〇	—	—	—
其他	二、六九〇	一、五〇	四、〇三五	—	—	—
計	五、三九〇	—	一、四一〇	—	—	—
雜木	—	—	—	五、八〇〇	一、一〇	六、二八〇
合計	四六、〇六〇	—	一〇九、二六〇	七二、三一〇	—	八九、四一六

第二　竹材

種類	數量	單價	總價
眞竹	二、六三九、二九九	五〇錢	五八一、九一圓
淡竹	二〇、三九〇	四五	三四九
篠竹	一〇、二五〇	二〇	二〇五〇
計	二、六七二、八九九	—	六〇三、九〇〇

備考一九とは九寸以上一本七寸以上二本六寸以上五本五寸以上七本四寸以上十二本三寸以上二十本二寸以上三十本一寸以上五十本篠竹一束は三尺縄〆なり

着手期　明治三十八年度
皆伐年期　明治八十七年より明治百六十六年に到る
収入豫算　五十万七千六百十圓
郡収入　四十萬六千九十九圓

苗木植栽表

樹種	面積	苗木數 一町歩付	苗木數 全面積ニ付	苗木數 全面積ニ付補植	植栽費 一町歩付	植栽費 全面積ニ付	植栽費 全面積ニ付補植費
扁柏	二八反	八〇〇〇本	二三四〇〇本	六、二〇〇本	四三、七〇〇圓	一二二、三六〇圓	三、〇〇〇圓
杉	四二、三	八〇〇〇	三三、六〇〇	二、四〇〇	四〇、〇〇〇	一六八、〇〇〇	二六、二〇〇
松	一、四	七〇〇〇	八、八〇〇	二、〇〇〇	四五、〇〇〇	五五、五〇〇	七、〇〇〇
落葉松	四、三	七〇〇〇	三〇、一〇〇	二、四〇〇	四五、〇〇〇	一九五、六五〇	一三、〇〇〇
雜木	一三、〇	六〇〇〇	七、八〇〇	五、七〇〇	三〇、〇〇〇	四、〇〇〇	三八、〇〇〇
計	七三、〇	—	四八、〇〇〇	—	—	二九五、一五〇	二七〇、五〇〇

備考植栽費中には苗木代も含有す

佐渡郡植林設計

目的　郡の基本財産を造るを以て目的とす
位置　眞野村大字眞野地内御料林反別百五十町歩を借り三官七民の設定（部分林）
経費　一萬四千圓
事業　十五ヶ年繰續事業

造林地　南向の傾斜地にして風害の少き礫質沙土
造林法　二年生にして周圍三寸位發育方正節の低きものを選み、舊八月の曇りたる日を以て古枝二三枝を殘し六尺位以上より斜に切斷し、切口は竹皮を以て覆ひ雨の浸入を防ぎ、根株は直徑一尺六七寸乃至二尺位に取り、之れを植林地に運搬し五尺乃至六尺の距離を以て正方形に植栽す、

施肥　鳥賊肥又は人糞或は海產肥料を林地内諸所穴を掘り之れに入れ土を覆ふ
保護　雪害に對しては數本又は數十本を縄を以て束ね以て之れを防ぎ、又は竹林中に樹木を成立せしむ、
伐採　三四年以上の者をにて伐り、伐り株は之れを打ち碎き以て早く腐敗を促す、期節は舊八月以後とす
利用　利用の途開けず、竹子、樹皮、樹枝等は殆ど利用せず

尚ほ佐渡へ渡るには佐渡が嶋根には定まりたる渡航期節は有らざるも、十月より三四月に至る六ヶ月間は風浪烈しく且つ運船賃五割の騰貴をなすを以て四月以後十月以前に於て之れを行ふを可とす、而して渡航口は種々あるも竹林を視察せんと欲せば寺泊より亦泊に上陸する事を記憶するを可とす。

（二十月十日）

暴飛强雨と云へば渡海保護學上此上なき禁物なり、されば昨夜來の曇天に氣を痛めしも神ならぬ身の詮方なく、汽船のなきに任せ空しく怨を五十石積の北辰丸に載せ午前四時號報と共に寺泊を發す、船中には余等三名以外に紳士淑女あり商人あり農民あり殆んどあらゆる階級の人々集合一小社會を成す、談は多岐に渡り船中の心得より日常の雜談に移り、甲已れの長所を談すれば乙之れを駁し丙之れに和し又天候の如何を顧るの暇なし、然れども寺泊を遠からざる一里程の處より形勢甚だ宜しからず、然るに一行の氣焰は愈々揚り紳士は戰爭の有樣を物知り顔に語れば商人は經濟界の不振をかこち、淑女は之れを靜聽し余等一行は之れに對して恰も馬耳東風なりき、然れ共天候は數分を出でずして形勢益不穩となり、あはやと云ふ間もなく疾風猛然として怒濤を吹き送り、巨浪は舵器を奪はんとするもの幾回、帆柱は暴風の爲めに挫折せんとす、此に於てか船人は帆を降し帆柱を倒し、船中に浸入せし海水を汲み出す等雜沓困難を極め、船の動搖益甚しく登るやあるぶすの峰降るや奈落の底かとあやしまれ、余等船客の苦しみは紙筆の能く名狀し能はざるに達し、以前の氣焰は何時か消え失せ、呻き號びしも遂に其音も出し得ず、神よ佛よと心中に祈るのみ、之れも暫が間にて神心の疲れと船暈とにより恍惚として人事不省に陷りぬ。

忽然小木〳〵と叫ぶ船人の聲に驚かされ、苦しき頭を擧ぐれば船灯早や小木港に投錨しあり、朝暾は山の端を離るゝ數尺身は海水の爲めに濡れ鼠の如く海上の事は其如何を知るに由なかりき。

船人の急くまゝに蹣跚足を踏しめ、八時半頃上陸し港岸の茶亭に憩ふ。

此地は東北西一對は山岳を以て覆ひ、南に風浪平穩な

る小木港をひかへ、赤泊兩津二道の要衝に當り、海上は船舶輻輳し輸出品は此地を去る東北三里なる羽茂地方より出ずる竹材なり、而して其販路は信越並に北海道にして其價格の安き材料の多きは數十里の海路を賦つて尚ほ大面積を以て誇り居る稻嶋二加の竹林をして顏色なからしむるに到らしめたるを以て知らる、海岸より港上を望めば港中の岩石は其形千態萬狀、壯嚴奇石、錯然峙立一として奇を爭ひ妙を競ふは宛然一幅の活畫圖の如く、無情に似たる海水浸蝕後も何ぞ吟咏に値する詩材に乏しからざるなり。

小木近傍海岸に面せる山岳の高さは四五十米突にして、黑松赤松杉檜扁柏及び他の雜木混交異齡の天然林にして人工林を見ず、從て伐木造材植林保護の如き点に於て研究するを得ざりし、此地は彼の北越地方沿岸の如く落葉を採收せし跡を見ざりき、こは之れ地の薪炭材の豐富なるに起原すべし、然れども反面より之れを思ふに之れ皆此地の木材利用の途の開けざるに起因せるならん。

此を出で相川に向ひ小木街道を進む、小木街道は巾三間傾斜急なる處に於て十度以内にして其保護の行き届きたる驚くばかりなり、小木より村山に至る三十余町の間は街道を夾みて赤松の純材赤松黑松杉扁柏の混林雜木林竹林草原地皆鬱積してゐゝ其間に農地の介在するのみ、赤松純林は年齡八十年程を最高とし其間に黑松の点在を見るのみ、混交林は其年齡種々にして其成育は良好なり、草原地中には今尚根株の存在を見れば十數年前迄は其地が森林なりしを知らる、午後五時村山に着す、此に於て高柳氏の知る處となり氏の案内により午後六時西三川村旅亭に投じぬ、西三川村は佐渡に於て金鑛最初の發見地にして砂金山及中古金を採取せし井あり、今尚砂金の採收海岸に於て行はる。

(三十月十一日)

今日は恩人高柳氏の案内により笠井氏方の竹林視察をなし余等佐渡旅行中最も爽しき日の一なりき、之れを樂しみに早朝宿を立ち笠井氏方に至る、茶菓の饗を受け九時笠井氏並に高柳氏の案内により竹林視察をなす、此竹林は西三川村上ケ平に在りて東南に面せる傾斜地にあり、面積一町六反竹種は眞竹なり、竹林の沿革は明治七年國有林より拂下げ十人の共有林となり後明治十七年買償五百圓にて笠井氏の手に入りしものなり、竹の大さは五寸以上一尺以下にして六寸のものゝ高さ七間半、一本の占領面積九平方尺弱、竹枝竹葉竹子の利用さるゝことなく、施肥は行はず、竹林に害を及ぼすものは雪兎なるも之れが豫防驅除を行はず、只人の害に對し番人を置くのみ、歸途佐渡竹林栽培並に利用の途を語らる、十一日笠井氏方に着す氏は此の地の豪商にして味噌並に味噌桶を製造し直接味噌を北海道に輸出せらる。

午後二時辭して出發し田切須大倉背合附近の山岳は雜木林を以て覆はれ用材となすべき林少し、然れ共故山に於て見ざる常綠濶葉樹の繁茂するを見又芭蕉の如き熱帶植物の庭園又は家の周圍に茂れるを見る、午後三時半志那戸に着す、志那戸は眞野灣に沿ひ遠く澤根港に對し、其間幾千の釣舟の波間に隱見するが如きは山中に住み飽きたる余等には海岸の興深く覺ゆ、此地にて檜の割木を見しが長さ二尺二寸周圍二尺四寸一束二錢四厘なりと、新町の入口より小木街道に別れ四時半順德院の御陵に詣ず、御陵は石垣を廻らして一段高く造られ綠翠滴らんとする老松は處狹き迄に生ひ繁り何となく神さびて見ゆ。

歸途御馬石御舟石石竹の梅を觀る、梅は順德院御手植の者と稱せられ流石は古木に觀受けらる、眞野社は新町と御陵との中間に位し社は結搆甚だ美なりとす、然れども境内極めて狹隘なり、内に日野公の碑あり案内を乞ひ寶物を拜觀す、余等の參考と成りしものは少きも短刀と云ひ順德院御宸筆の軸物と云ひ一として承久の古を忍ばしめ斷腸の種ならざるはなかりき、時既に黃昏急き歩を返し新町寶屋に投ず、館は海岸に臨み一方は平野に續き他方は眞野灣に臨み、風景の佳なる終日の疲勞を一するに足りき、膳に昇るは潑剌の魚後園の野菜喰味の稻や可ならざるも鮮は即ち鮮故山に於ては夢にも味ひ得ざる處なりき。

(四十一月十二日)

所々啼鳥を聞きつゝ午前六時宿を立ち出ぬ、右は平野にして左は眞野灣、嗚呼眞野灣陛下は再び歸り給はぬぞ磯打つ波は寄せては返し永久に永久の古を告ぐ、

いささらば磯打つ波に言給はん
をきの方には何事かある

今日は我國教界の偉人僧日蓮上人が遺跡を訪ぬる日なり、常に反抗的威力絶大にして一回も挫折せし事なき日蓮の行爲を學ばんには、余等の勇氣は常に倍し兩津街道を取り十數町にして又之と別れ田圃の中を行く數町にして妙宜寺に至る、境内廣く山門本堂五重の古塔の如きは規模宏壯なり、日野資朝卿の墓は山門の傍ら

に立てり、此寺こう日蓮の遺蹟なり、日蓮其初め怒濤逆捲く房陽の小港の磯邊に風々の音を上げしより陰謀暗殺遠流斬罪等あらゆる危難は彼の上に壓下し來りしも、彼の堅固なる信念と絶大なる反抗心は万難を排して遂に最後の勝利を得たり、嗚呼吾人は多くを此成功者日蓮に學ざるべからず、余等寧物を拜觀せんと寺僧に乞しも得ず空しく相川に向ひ發足しぬ、傍に日野阿新丸の隱れ松あり阿親丸父をしたい數十百里の途を經て此に到ると父子親愛の情誠に斯くこう、拾町余にして日野神社に至る、此近邊は山となく麓となく平地となく多く赤松單純林にして所謂國中地方の松材とは此地方の松材を言ふなり、之れより河原田町を經て澤根町に至る、之れより西北は山林荒廢し目に入る者は草山のみ、三時半堀割に至る、堀割は澤根町より相川町に至る中間海拔二十五米突の峠にして一つの立木をも見ざる程なり、此地は以前は美林なりしも伐採後跡地の植林となす事を顧ず、牛の產地なるに任せ牛の餌料採取所に宛てしに基源するものにして、宛然木曾に於て馬の餌料採取の爲めに數十百町歩の無立木地を有するが如し。

四時半相川町に着す町は余等旅行中最も遠極地なれば紀念にもと一行は旅裝の儘撮影せんとして土足のまゝ寫眞館上の人となりぬ、撮影後出でゝ出雲屋に投ず、食後無聊のあまり相川町夕暮の景を賞し古人の跡を訪んと宿を出でぬ、夕陽は西海に沈み聞ゆるものは夕暮と共に歸り來る小舟の音と磯打つ波の音ばかりにて、聞き慣れぬ余等一行には物凄く感せられぬ、足の進むに從ひ殘照次第に褪せ行き普賢寺に至りし頃は釣する小舟の燈火と紺紫の如き水色と相映じ、わもいはれぬ風情なりき、普賢寺は相川町を去る四五町の海岸にあり、寺後に此地に左遷せられし藤原某氏斬刑に處せられし名殘りの墓あり、余等某氏の履歷を知らざるも誰れか能く其末路の果敢なきを嘆せざる者あらんや。

歸途に着きぬる頃は日全く暮れ、或は見わ難ひの苦屋も朦朧たる夜のとばりに包まれ、小舟の燈火も星かと怪まれぬ、八時宿に歸り覺わず華胥の國に入りぬ。

(五十一月十三日)

午前九時朝暾既に高し、急き旅亭を辞して杖を礦山に引く九時十五分事務所に着し刺を通じ參觀を乞ふ、工夫案内の勞を取り指示說明すと雖も器械工學の目なき余等に取りては半錢の益する無く、只機關壯大なりしを記憶するのみ、礦山は相川町の北輙金北山の麓に在り、濁川河口より之を逆のぼる十町ゞ間に擴がり、從來開鑿せる抗口は其數夥多なるが現に採擴中の者三ケ所皆千尺内外の深さを有す、勞働者は總べて八百名にして一日の勞銀男貳拾五錢乃至四拾錢女拾五錢乃至貳拾五錢、斯の如き僅々なる勞銀に甘じ日に拾時間乃至拾貳時間の長時間働きをなし尙嘆々として其業に勵ひ、世の上流に立つ者日に一二時間の業につき尙其永きを嘆じ月に數十百金を得て尙其少きをかこち其業を勉めざる者あり、余は諸君に勞働者たるは願はざるも他日社會に立つに及び職務に忠實なるを願ふ、尙記したき事在るもうは諸君の渡航の時の研究に殘し、左に林業上より視たる相川礦山の大略を記せん、先に記せし如く佐渡は比較的木材豐富なるに關はらず礦山近傍の金北山一對の有樣は濁川が源を金北山に發と聞ば其河名を以て署々知るを得べし、余等が此に至りし日は石を以て兩岸及び海底を卷き河底の修理を行ひつゝ有る時なりしかば初めて其河の名に反せざりしを知る、斯の如く金北山の荒廢を來したる源因は幾多有るも其主なる者は數十百年の古より礦山に於ての建築材及び薪炭材として森林を伐採し、跡地の殖林を適當に作業せざりしが故に强き海風の爲め目的を達するを得ず之れを放擲して顧みざりしに基因する者にして、今や礦山は更なり相川町民に至る迄木材の欠乏と魚類の欠乏に苦しみ、建築材は之を國中地方に仰ぎ、屋根板材は海岸四里を距る戸中地方より魚類は河原田地方より輸入せられ、而して木材の欠乏は金北山荒廢と知るも魚類の欠乏は礦毒に基源すとなし怪しまざるなり、社會の識者之に着眼して一つは木材の欠乏を補ひ他は間接に魚類の增殖を計り以て相川町の富源を起すべきなり、拾貳時礦山を出で佐渡郡役所に到り種々調査をなし一時此を立ち町に至り佐渡陶器無名異二三を標本にもと金礦を求め、巡査派出所の前を過ぎんとせしに計らざりき海上暴風警戒の揭示は現れぬ、皆過日の海の事ども思ひ起し明日こう余等の生命を天帝に捧ぐる日かと言葉も立て得ざりき、然れども此に於て躊躇すべきに有らざれば勇を鼓し相川町に別れ佐渡横貫をなしぬ、三時頃河原田町に着きぬ、町は相川より小木兩津に到る分岐点にして中に佐渡俊才なる青年の集合せる佐渡中學校あり、之れより二十余町にして黑木の御所に至る、御所は山麓の物凄き所に有り、而も今は悉く廢頽して古塔は徒らに槃苔の裡に埋もれ當時の御所は訪ふに由なし、九重の深きに住み給ひし帝のかゝる所

に行在し給ひしかと思へば哀情痛憤せざる能はざるなり、之よりは又奇景の目を惹くに足るもの無く唯尋常一樣の山容水態と、三十年前後の赤松に送り迎へられ田圃の間を辿り行く事凡そ一里余其間に日は稍々西に傾き余等の黒顏を射る、中黒村に近づきし頃には峯巒全く日を呑みつくし黒闇々、然るに偶々月は西山の頂に懸り入時頃兩津港に着き無事佐渡横貫を終りぬ。

町は加茂湖を以て真港の兩市街に分かれ、北陸有數の要港にして汽船常に輻湊し、稅關水上警察あり、商業盛にして多く烏賊を輸出す、此地に產する烏賊は其鰯にして商業上二番鰯とも稱し內地及ひ支那に輸出し

(六十月十四日)

佐渡輸出品中の一位を占む。

汽船汽船と旅館內の蝿も屋外の蚤も聲を等しく呼りぬ、時は十月十四日懷しき親國に歸るとて昨夜より新潟行の汽船を待ちつゝある身なり。

余は立ちて兩戸を排し見れば空には一点の雲だに無く昨日相川に於てなせし憂ひは全く杞憂に屬し海風警戒の常てにならざりし事の幸ひなりき。

兩戸に吹き來る海風は遠慮なく床に有る一行の夢を破りぬ、蝿の呼はりし新潟通の汽船は黑煙を擧げ兩津港に入り來りて勇ましく汽笛を鳴らすと共に沈み行く錨の音は遠く余等の鼓膜を衝きぬ、船は十一時に出るとの事なれば餘す處僅かに四時間十時宿を辭しぬ、余等を待ちつゝ有る度津丸は兩津の埠頭より幾十人の旅客を載せ新潟行の麥粉及ひ砂糖を北海道かよひの汽船より小舟にて積込中なり、余等之れを怪しみ問へば風浪甚しく斯の如き大なる汽船は冬季新潟港に入るを得ずと、嗚呼年々數十萬圓を築港に投ずるも尙斯の如くなるか新潟市の衰微する又宜べなり。

今や羅針盤は新潟を指して航行を初めぬ、同船の人々口を揃しく今日の晴天を祝しぬ、實に空に風なく海に波なく而して船体は靜かに進み行くなり、兩津は早や波間に沈み水津の砲臺は余等並に度津丸を保護する物の如く、望樓は余等を送り又余等の再來を望むが如し、船は益々其進行を早めしも風波靜穩人をして船中に有るを忘れしむ、三時頃新潟港は天より降りしか將地より出でしか余等の眸中に入り角田彌彥の二山は余等の來るを喜ぶが如し。

天いよいよ麗にして日は漸く傾き、四時度津丸は兩側に人造及ひ天然石を以て築きし堤を望み信濃川に入り投錨しぬ。

さらばよ人々。

殖林の聲

校友會常通會員　蜂谷光香

今や一般に愛林の思想高まり殖林の聲起りしは實に喜ぶべき事にあらずや、之れ畢竟一般が森林の効用を感じたると共に木材の欠乏を告ぐるに至りし結果ならん、懷ふに我國の森林たる昔時鬱蒼として至る所畫尙ほ暗き原生林を以て覆はれしと雖も、人畜の增殖農工業の發達に伴ひ森林は漸次荒廢に傾き古への林相を見る能はざるの地多く、之れが爲に豪る處の損失は直接に間接に到底計る可らざるは之れ識者が屢々痛嘆する處なり、然れども近來殖林の急を喚ぶもの漸く加はり林業の經營到る所に起り新植地の面積は年と共に增加し、先きに殖栽せしもの今や鬱蒼として充分なる閉鎖を保ち吾人をして合理的に林業を營むの必要を感せしむ、昨春偶征露の戰役起り我忠勇精鋭なる皇軍の敵に當る恰も疾風の枯葉を掃ふが如く戰へば必らず勝ち攻むれば必らず占め戰報到る每に我軍の大捷を傳へざるなし、此絕大の壯擧を千載に紀念すべき事業種々ありと雖も征露紀念林設置の如き亦其中尤も適切なるものならんか。

府縣此處に着目し之れを奬勵するに至りて各地に於て紀念林設定の擧起る、吾人は此擧の益盛ならん事を熱望しで止まざるなり、顧みれば木材利用の途日に月に進歩しつゝあるの今日に於て林相は逐年衰頹し、林地は益減少し鬱蒼たる美林も今や慘憺たる雜木林無立木地に一變し、其だしきに至つては禿山の現象を見るに至る、此結果は獨り森林の減少と木材の欠乏を告ぐるのみならず、遂に所謂森林の無形的效用たる氣候の調和を破り水源を涸らし洪水を汎濫せしめ爲めに國るべからざる處の大害を來すに至らしむ、如此は昨年我木曾南部に於ける水害の如く例證滅に顯然たるものあり、今や鬱蒼たる林相を保つもの僅に木曾秋田等のみ、是れ舊幕時代に於ける最格なる林制の下に保護せられたる賜なり、乍併之れ又漸次伐採せられ目下靑々として繁茂するものは僅に御料林の一小部分に過ぎずして交通不便人蹟少なき山間僻陬の地に至りて伐木を免るゝあるのみ、私有林の如きは殆ど美林を見ずと云ふも敢て過言に非ざるなり。

嗚呼世人が木材を見る恰も無盡藏自由物の如く輕視し濫伐利用して木材の欠乏に瀕するの今日、漸く富源の山林にあるを知るに至り、昔日の腦裡一變して愛林の

思想起り殖林の必要を感ずるに至れり、抑森林は獨り經濟上一大財源たるのみならず國土の保安上其他間接の効果を有し然用實に無窮と云ふべし、今や一般に愛林の思想高まり殖林の急務を說くもの漸やく四方に起り、斯業隆盛の域に進むに至れるは吾人林業に志あるものゝ喜ぶべき事なるのみならず國家の爲祝すべきことなりとす。

第二學年修學旅行記

（明治三十八年度）

五月二日　雨天

曉鳥の聲に夢を破られて起き出ずれば早五時半、昨夜來蕭々として降り出せる雨は容易く止むべくも見ゆず元氣の銷沈するもの甚だし、六時半校庭に集合し敬慕せる三學年生と廣小路に於て袖を別ち三年生諸君は西に余等は東に向つて愉快なる修學の途に上りぬ、雨は益加はりぬ、されど一行の氣焰は高まり來りて亦天候の如何を顧みざるが如し、間もなく宮之越に着す休憩數十分にして歩を進むれば嶮峻なる櫻兵衛峠は吾等が行手に當つて高く聳ゆたり、斯かる峠の一つや二つ何のうのと勇氣を揮て頂上に達す時に正午十二時なり、依て先づ中食をなし暫時休息して下る行き行きて伊那の平に出す、雨は止み日光麗らかに余等の頭上に輝き白雲遠く連なりて恰かも綿を積みしが如し、見渡たせば天龍川の漲りは長蛇の横はるが如く曠漠たる野原には百花爛熳として咲き乱れたり、行くこと暫時片倉氏の造林地あり此地は共有林にして二三年前漸く植林に着手せしと云ふ、更に歩を進めて遂に伊那町に着す箕輪屋に投宿して午後四時頃縣立上伊那農學校を視察す、余等は同校教諭矢野先生に案内せられて校舍及び實習地を見る。

實習田畑總面積は五町歩にして内田地三町五反歩桑圃一町歩余は麥畑なり、大麥は田を使用すと、同校生徒の耕地整理をなしたる所小部分あり、地質は砂質壤土にして肥沃の点に於て郡下第一位を占め之等の土は皆三峰川に依りて冲積せられたるものなり、苗代は一反歩につき凡う十坪の割一坪の播種量三合にして短冊形なり、水田の肥料は紫雲英、綠肥、大豆〆粕、蓖麻〆粕、骨粉、鯡等を用ゆ、米の收穫量は一反歩に付き三石乃至三石五斗にして一俵三斗五舛入とし二俵を一駄と稱す其價九圓なり。

此地方一般養蠶に熱心にして水田をも變じて桑園となす等其大容を推知するに足る。

農具置場には數多の器具整頓しあり、主なるものは脱穀器、穴堀器、代耙具、馬耕器等なり。

家畜には馬豚鷄あり。

校舍は頗る完全にして講堂化學室標本室博物室寫室各教室あり、寄宿舍は十二ケ室ありて各室數人を入る、皆充分整頓してあり運動場の設備は最も完全なりき、余等は參觀を終り午後七時旅舍に歸り夕飯をなして寢に着けり。

五月三日　晴天

六時起床七時發縣設苗圃地に向ふ、途中製板所を視察して苗圃地に至る、地は南箕輪村の西方の原野に在りて赤松の單純林其近傍に密生す、今該事務所に於て見聞せし事を記せば、

一、苗圃總面積　五町歩（床數二百四十二床一床三坪）

二、土質　輕鬆

三、苗木の種類　落葉松　赤松　檜　杉　椹等

四、播種量　赤松一坪一合にして杉は二合扁柏は六合にして落葉松は羽去り坪三合羽付六合

五、肥料　人糞尿（一坪に二舛の割にして一舛三錢三厘）

六、風害　霜害多少あり風は南風なり

七、除草　年四回、

八、勞働時間　一日十時間内休み二時間

九、人夫賃　男三十五錢に女子二十二錢にして最多忙の際は人夫白人以上を雇ふと

九、種子產地　扁柏は木曾、落葉松は佐久、黑松は千葉縣より購入すと

十一、山出苗　赤松落葉松は三年乃至二年生のものをなし、秋季は多くは假植にして春季多く山出すと、されど本年度は山出苗更になし、

十二、本年度移植數

落葉松	四十三萬千三百二十六本
赤松	五萬千二百五十八本
杉	一萬六千三百九十本
栗	一萬五千三百六十本

十三、山行苗の價格

落葉松	一尺乃至一尺五寸　一萬本　三拾五圓
杉	一尺乃至一尺五寸　仝　上　三拾圓
扁柏	一尺乃至一尺五寸　仝　上　拾　圓

十四、借地代　共有地なれば年拾圓なりと

仝所を辭して南箕輪小學校長岡田先生の案内により仝

校の學有林を視たり、地は南箕輪村の西部にして大芝原と稱する所に在りて、吾等の師福澤先生率先して明治廿八年より始め現今迄の植付數は松葉松十萬本赤松九萬標檜各三千本植栽せしと、而して長さ大なるは四五尺小なるは二尺内外にして成蹟可良なり、夫れより岡田校長の案内により中箕輪村に出で先生と別る、中箕輪村は天龍川の沿岸にて氣候濕暖交通宜しく地味肥沃にして地人稚愛林思想のあるを見受けたり、夫れより朝日村へ方向を取り道を急ぐ、朝日村平出驛に着せしは十二時なりき、時に天候は又々雨を以て吾等の一行を迎ふる模樣なり、次第に一滴知り二滴感じ雨降りとはなりぬ、此所より疲勞者は馬車にて一行は有賀峠を越ゆて上諏訪町を指して○時半此地に出立す、峠は上ること二里下り一里の極めて緩傾斜の土地なれども土質粘土を以て形成し爲め辷ること甚しく皆々難に困却の聲を發しつゝ頂上に達す、此地は既に諏訪郡靈山村の一部落にてぞありける、四方を圍繞して眺に盆地の如く湖景又よし、下り終りて湖南村なる畦道を行く里余道路の泥濘又甚し、四時上諏訪町に入る至れば此地にて再び櫻花の爛熳たるの光景を眺めぬ、夫れより牡丹屋に着し一夜を諏訪の

天地に明かす。

五月四日　木曜日

午前七時牡丹屋を發し諏訪湖を横ぎる、湖上溶々として風なく三十有余名の同胞舟を揃へて吾開校紀念の歌を奏し、櫓の音ぎい〳〵と濕きおす程に遙に向ふの岸邊よりかとあし揃へ我に向て突貫する二小舟あり、我も負けじと船頭を促して進みよれば彼等は雀具取るにやあらん舟を押止め網打ちて進み行きける、舟路半ばを過ぎたる頃風起り波荒らく舟搖くは面白しとするもをかし、舟はやう〳〵磯には付きぬ、歩行僅かにして諏訪神社に詣で上下六里の和田峠にかゝりぬ、油汗を流して西餅屋に至りつき爐に鞋踏み込み飯食し居れば、はら〳〵珍らしや五月雪落花の如く霏々として降りしきる、聲も立て得ず見認る間に雪は止み日はさして雪は消へたり眞に夢の如かりき。

晝仕度して行き行けば着くは長久保不濕宿、うれに加へて外出許されて不腹滿て一夜を宿しぬ。

五月五日　金曜日　晴天

昨夜の不平の爲めか將た勞かれしに依るか起床すべき時間となるも一人の起くるものなし、先生の注意あるも下女の小言を逃るゝも皆馬耳東風午前七時漸く起き

出でたり、用意を整へて宿屋を發するや既に八時半なり、之れより小縣と北佐久との境なる笠取峠を越ゆて佐久郡に出づ、峠の絶頂に立ちて眺むれば前方に淺間山の白烟を吹きつゝあるあり之れ亦一つの壯觀たるを失はず此山海拔八千尺余天武帝の御代に破裂し以後屢大噴火あり、天明三年七月夥しく灰砂熱泥を噴出して上野に流下し三十余村を埋沒し人畜の失はれしもの數萬に上りしと、峠を下り茂田井望月八幡を經て五郎兵衛新田に至り晝食をなし、之れより路を南佐久郡なる大澤村に向つて取る、岸野前山櫻井を經て大澤村に達せしは午後三時半なりき、之れより大澤村造林地を視察する筈なりしも造林地の遠きと時間の無き爲め役場にて之れに關する記錄書類を借りて野澤の宿に至りて筆記す、大澤村は一般に愛林思想に富みたる村なり、野澤に着せしは午後六時頃晩餐館に泊し一日中の勞を慰やしぬ。

五月六日　土曜日　曇天

午前六時野澤發岩村田町立乙種農學校を視察、茶菓子の饗を受け夫れより實習地を視察し、御代田に晝食、北佐久苗圃を視察し御代田イケダ屋に投宿せり。

岩村田町立乙種農學校概況

一、沿革　明治三十四年三月實業補習學校設立、其農業科を三十五年四月に至り乙種程度の農業學校に變更し同八月文部省より許下となる、

一、經費　參千百五十五圓三十六錢　明治卅五年度
　四千百參拾壹圓九十八錢五厘　仝參拾六年度
　內臨時費　五百三十八圓五十錢
　貳千五百〇六圓七拾壹錢六厘　仝三十七年度
　貳千五百九拾壹圓貳拾八錢　仝三十八年度

一、實習地面積　畑壹町五反歩　水田五反歩

普通作物
特用作物
畑
園藝
桑園
果樹園
見本園

一、建物　校舍　間口貳拾四間　奥行四間半
　推肥小屋畜舍馬壹頭　間口參間半　奥行八間
　常農夫住宅農具室　間口參間半　奥行八間

一、實習之方法　養蠶の實習は三年生をして行はし

め、教室には教名を宿直せしめ學校にて之れを賄ふ。

一、實習に依りて得たる農産物中穀菽類は入札にて賣却し、野菜類は廉價を以て生徒に賣却す。

一、教科書は左の如し、

書目	第一學年	第二學年	第三學年
國語	農學校用國語讀本卷之一	仝 卷之二	仝三及農學校用漢文讀本
養蠶		養蠶示教	
理科	博物學教科書	普通理科教科書	養藝化學
地理	國定小學地理		
畜産		新編畜産學	仝 上
算術	改正算術教科書上	仝 下	
森林		森林大意	
肥料			肥料學教科書

麥の栽培しありし種類左の如し、

日本一、米國モルト、ゴールデンメロン、三島、郡益、モルト、鬼がら、赤坊主、坊主、芹田坊主、獨乙春蒔、エバンタイム、スコットランドシュウバリー、ハレヅト氏純正シュウバリー、イムベリアル、ベストホルンダイヤモンド、エスコルキオン、ショウレー氏シュー、バリー、六角シュー、バリー、ケープ、雷電、六角、青種、

牧草種類左の如し、

チモシー、オワチヤードグラス、トールメドウフエスキユー、レットトップ、ケンタッキイブリユウグラス、トールメドーオーツ、トールオードグラス、イタリアンライグラス、アルファアルフワー、メドウフエスキユー、ペレニアルライグラス、ウエオリスリープト、ホワイトクロバー、レッドクロバー、アニアンライグラス、ウオンレスブルーム、イングリッシュライグラス、ベルベットグラス、

當地方の産物は左の如し、

バター、（神津牧場に於て製す）

人參、食用及び藥用とす

桃、　三ケ岡より産し鑵詰として出す

副産物としてはれらんだいちご、氷豆腐等あり

北佐久苗圃概況

總面積八町歩にして、栽培樹種は落葉松赤松檜杉栗等にして、山出苗の年齢は落葉松は一回床替扁柏杉は二回床替なり、大さは何れも一尺より一尺五寸位なり、播種苗圃にありて苗木の肥料としては人糞大豆粕又は油粕を用ゆ、霜除としては苗木を圍むに熊笹を以て

し、扁柏にありては特に藁を周圍に散布す、除草は年に數回施行す、而して播種に用ゆる種子は落葉松は川上産のもの扁柏は木曾産杉にありては吉野産のものを以てす。

人夫の賃錢は技術の巧拙に依り男子は三十錢より五十錢女子にありては二十二錢より二十七錢とし、勞働時間は八時間乃至九時間とす。

苗圃の床巾及び長さは不規則にして一定せず。

土質は火山灰土にして六七寸の深さに溝をほりて床を作りありたり、是れ排水の便をよくせんが爲なり。

霜害の甚だしきは杉なり。

苗圃地代は一反歩に付き三圓六拾錢にして凡て民有地なり。

五月七日　日曜日

五月雨瀟々として降る中を二つ子合羽を纏ひ午前六時御代田發、岩村田小林區言圃に至り視察せんとせしも主事不在なれば其實に由なし、されど各自其生育狀況及其概況を調査して夫れより當所分担區主事の案内によりて淺間山麓視察、正午小諸町に着、當町は縣下第一の商業市にして繁盛なる舊城下なり停車場前の一茶店に中[illegible]となし列車の至るを待つ事時弱、時針は廻り列車は至り此所にて團体乘車をなし田中を經ぎて田を横ぎる、されど車上の事なれば其概要だも視るに由なし、只地方温暖桑葉二錢大をなしま丶桑摘む乙女を視とめたり、坂城に着し下車し戸倉温泉笹屋旅館に投じ一日の勞を當温泉の樂天的生活に委ねぬ。

鹽野苗圃概要

全面積　七町八反壹畝三歩

内	
固定道路	六反五畝十二歩
建物敷地	六畝五歩
井戸敷地	四歩
固定溝渠	六反廿四歩
藩　籬	六畝廿四歩
使用地	六町四反二畝三歩
木年度市用地（特別經常共）	五町九反二畝十歩
殘反別	四反九畝十八歩

三十八年度鹽野苗圃床替表　　特別經營の部

樹種	面積	本數	床地回數	經費	備考
栗	〇三三四	八四一〇四	一	一八〇〇〇	列間五寸株間四寸

赤松	一〇九〇五	七二〇、六五〇	一	三二一九〇	列間四寸株間四寸
落葉松	三四三三八	一、五六六、二二二	二	二四六三、九五〇	列間五寸株間四寸
栗	〇一二〇〇	二八四〇三	二	七〇〇〇	列間六寸株間五寸
赤松	〇六八一四	三三、八七四	二	一九九六〇	列間五寸株間四寸
櫟	〇〇四二〇	一六九〇〇	二	三九八〇	列間五寸株間五寸
計	五三一〇二三	二、四九九、一九四	五四五	二八〇	

三十八年度鹽野苗圃播種表　經常の部

樹種	面積	石數	一坪の播種量	經費	備考
栗	一〇六二四	一一石	八合	三四〇九〇	八合の粒數三百列間四寸粒間三寸深二寸

卅八年度鹽野苗圃床替事業人足別（特別經營部）

種目	單價	人數	備考
小供	〇円一八	九六	此外に馬耕單價一圓貳拾錢三人半
女	〇二〇	三六	
仝		二一	
仝		九六	
仝		二二	
仝		三六〇	
仝		二二	
仝		二五二	
仝		二三	
仝		二〇四	
仝		二四	
仝		二〇四	
仝		二五	
仝		二六	
仝		二八	
男		二九	
仝		三〇	
仝		三一	
仝		三三	
仝		二四	
仝		三四	
仝		三五	

三十八年度鹽野苗圃床替事業人足別（經常部）

種目	單價	人數
女	〇円二五	五五
女	三五	五八

一、床替の方法

人夫八人を壹組とし（鍬持四人植手四人）內兩側には注意よき人夫を配置し列間及株間を規止する定規を取扱しむ（列間は竹に印したるを用ひ株間は繩に赤片を以て印しをなしたるを用ふ）、然して先つ定規の位置定まるや鍬持は此定規に倣ひ苗木を眞直に植わ

得る樣畝を作り、植手は苗根の曲らぬ樣植わ付け、仮りに苗木の傾倒せぬ程度に土を掛け置き、鍬持は鍬にて苗木の根に土を掛け行き、其後を植手は之れを踏付く、鍬持は更に其後を均らし行く、普通此位にて宜しきも鹽野苗圃は土質輕鬆にして且つ傾斜地なるを以て、夏季雨の際は苗根を洗ひ出す事あるを以て可成踏付け置くの必要あるに付、植手は更に其後を苗木為雨側より踏み付く、斯くして順次進み行くなり。

一、施肥の方法

本年は肥料は施さゝりしも、例年施肥の方法を擧ぐれば肥料は大豆粕及油粕を用ひ、馬耕にて土地を耕耘したる後散布し置き、其後床替をなす。

一、除草の方法

除草は年々六月中旬より八月末迄行ふを常とす、卅五年度迄は草の稍々成長したる時季を見斗ひ、多數の人夫を雇ひ一時に除草するの方法によりしも、卅六年度よりは六月より八月迄拾名內外の人夫を定雇とし、毎日出勤せしめ草の少しく生ひ出づるや直ちに除草するの方法を取りしが、一得一失にて前法は草の成長したる時に之れを除く爲め草に多少の肥料を吸收せらるゝと、草根も伸長し居るを以て之れを除草する際苗根を動搖せしむると、草の大なるを以て人夫賃も多分に要するの三失あり、後法は前記の三失を補ふ事を得るも天候の如何に拘らず除草する故土塊を乾燥せしむるの一長あり、二法其得失を比較する時は後法を以て得策と認めらるゝを以て本年も亦後法により施行する由なりと。

一、霜除の方法

霜除は當苗圃の樹種は何れも霜の害を被らざるなきもの故別に之れを設けたることなしと、只落葉松赤松の播種床には土の凍起を防ぐ爲め切葉を苗間に散布す。

淺間山麓國有林記事

一、全面積　一萬貳千町歩

內

立木地八千町歩（新植地（落葉松千八百町歩）、部分林（赤松千　町歩）、天然林（赤松千二百町歩））

一、林齡

(1) 赤松は天然生苗木にして明治十七年頃より人工を加へたり

(2)落葉松は明治二十七年より植栽を始めたり最高年のもの十三年生

三、本多博士の間伐

(1)間伐林齢　植付後十年

(2)間伐年月　明治[illegible]年[illegible]月三十一日

(3)間伐度合　一反歩四百五十本植付の内百五十本即ち間伐は全体の三分の一

(4)間伐方法　最小最大其他発育不完全のもの

四、其他

植方は列間五尺株間四尺五寸の長方形植にし、防火線完備し其巾十間程なり

五月八日　月曜日　晴天

樂しかりし戸倉温泉にも[illegible]の自由を得ず、六時半旅舍を發し屋代町を經て谷間至る所沃野開け青草黄[illegible]茂し、雲雀の聲は喧し、行くに從ひ眼界は愈新に[illegible]や松代も程遠からず、越の勇將上杉が陣なせる[illegible]が山も目前に在り乍ら登りて往古の武士を吊はむ[illegible]間の餘裕を得ずして松代に至る、此地に往古海津[illegible]り、武田氏の臣山本晴幸の築きし名城にして武田[illegible]びし後織田氏之れを得て森長可に賜ふ、信長の一[illegible]び本能寺の夜襲により殺さるゝや長可城を棄て上洛し上杉景勝慮に乘じて之れを奪ふ、德川氏に至り森、松平、酒井等の城主更代し元和八年に至り眞田信幸上田より移りし以來子孫世襲し其高十萬石を以て維新に至りし地にして、磨藩の後大に衰頽し今は只だ製糸の業を以て其の名を知らる、此地に於て中食をなし夫れより吾人の先輩者中村君に案内され立石峠に上る、此峠は即ち本日の視察地なる保科山砂防工事のある地にして斯業の熱心家北澤常吉氏の引導によりて深切に説明さる、夫れより山を下りて保科村に至る、此處にて一行の中校長先生及二三の疲勞者は北澤氏の勞によりて氏の宅に宿し、地の一行は勇を鼓して須坂町に向ふ時是れ六時、日は既に沒して諸鳥の塒を求むるの時なり、されど一行は川田綿内の諸村を經て須坂町太光樓に着せしは八時半なりき。

本日の視察事項

保科山國有林造林事項

一、総面積　二千百十六町六畝十一歩

二、新植地面積　四百五十町歩(五尺の正方形植)

1落葉松　七年生は最も早く七年生は八十町歩其本數二十四萬三千本二年生六十町歩此等の費用九百圓

2扁柏　百二十町歩

3杉　二百町歩　造林費用八百圓

三、植付人夫一日の効程落葉松二百五十本杉扁柏各二百本

四、防火線　巾三尺に堀りて五六間巾を燒く

同山砂防工事記

一、目的

山を作ると共に森林を仕立て以て洪水を防ぐ

二、方法

山の上部より漸次四尺程を距てゝ芝を植ゑ付け其の中に赤松を植ゑ付け以て破砂を止む

附芝は厚さ二寸巾六寸長さ一尺

三、同所工事の總面積　八百町歩

谷止　水の集合する所に密に芝を埋めたる所を以て多少の砂止としたるなり

張芝は谷止めの上方より土砂をかき落したる後其の上に一面芝を覆ふ而して芝置き終はれば其の傍に三尺置きに赤松若しくはハゲシバリを植ゑ付け而して植栽するには油粕着に灰貳十俵を混したるものを一株に一握づゝ與ふ

四、施行之始年

明治三十三年同山人來たりて三畝歩程見本としてなせしなり以後續き成しつゝ有り

面積十町歩

植栽すべきものは赤松に限る

以上は大林區署の施行したるものなり、其他大林區署施行地と縣廳の施行する境に保科川有り、是には土砂を流出せざるの目的を以て多數の砂防工事をなしたるも、何分其の両側の山は無立木地加ふるに降雨の度毎に壞れ來たる樣子なれば如何なる方法を以て砂防したるが可なるか未だ考への及ばざる所在り、或は考を起して工事を施したるも其の効果なきか、然れども當局者はかゝる障害の爲めにも挫折せず絶ゑず工事を經續しつゝありたり。

附富造林は落葉松杉扁柏等にして落葉松の如きは更に補植なく、杉扁柏等は僅か二割位の補植なりき、然れども成蹟可良なり。勞働時間は八時間一日の植栽本數落葉松二百五十本杉扁柏二百本にて、賃錢最高なるものにて四十錢なりと。

五月九日　火曜日　晴天

須坂町大光樓を九時出發、是れより進みて日野村間山杉林を見る、私有林にして杉の單純林なるを以て一名

信濃の吉野とも云ふ、此の森林を視察して是れより中野に行き中長館支店定宿に一夜の燈を乞ひたり、此處には温泉ありたり。

日野村間山の森林に就き説明す

一、一名信州の吉野とも稱す（其理は全山杉林なる事及民有林なるが爲め也）

此の邊は甚だ粗放なる林業にして吉野の比に非ず

二、總面積　　參百十町歩

内立本地八千町歩

三、林齢　四五十年生最高木なりとす

四、伐期　三十年乃至四十年其の用途は實用的林伐期を撰ぶ

五、造林法連續作業林なり

六、成長量は形數〇、五にして最も良好なり其の理は

一氣候

二空氣中に含有する水蒸氣の多量

三地味適當

（以上の三点を天然に具備す）

七、植方目測なれども五尺の方形植

八、山出植は二年又は三年

九、小丸太材は開伐作業法に依りて得たるもの（間伐なし）

十、種子は實の數少くして實の大なる樹木を撰び六年生位より十年生位に至る迄秋の十一月より採集すと云ふ

十一、枝打期は春秋二期に行ふ而して春は早く秋は遲しと云ふ（但し此の期に於て枯紅二葉は變色する時は好期となす然れども其の甚だ粗なるものにして例へば竿に鎌を付けて枝を打落すが如し）

十二、植付は春にして秋は行はず

十三、良地には十本植惡地には十三四本を植ゆ是れ良地は惡地に比し林の閉鎖速なるを以てなり

十四、種子壹舛の價は拾五錢位なり常時は米壹升と比較して大差なしと云ふ（一日の採集量二升種子一舛の代と山出百本の代と同じ）

校長先生の口演に付速記す

此の土地は間伐の必要を生じ居れども間伐をなさず、加之極めて粗植なるを以て閉鎖は遲く從て土地を損し易し、若も密植せしむる時は早く閉鎖を保つ故又間伐する事を得、又幼木に雪害ある場合は混合林を造る（但し雪害に對しては密植は利あれども此地方面に於ては粗なるの利あり故に混合林の利あり）

（附）枝打の拙なるにより死節を生ずる事。

此の森林は昔佐久間象山先生の所有に歸したるものにして、穗並村佐久に人造林をせしなり。

十五、苗圃

（一）農地の一隅を耕して甚だ粗放なる仕方を以て苗圃を仕立ありたり

（二）始終無肥料

（三）人夫賃　男廿五錢三年前迄三十錢内外なりきと　女廿錢

四、苗價　百本一圓乃至一圓八十錢普通一圓五十錢

五、人夫の効程良地は一日一人に付百二三十本平均百本

十六、保護

A雪倒木繩を用いて起す（植付より十年位迄特に多し）

B夏季の刈拂（木の一生涯三回程行ふ十年目廿年目位又は十五年位の際にも行ふ）

C植付には苗木の根を切らずと云ふ

D密植せざる時は閉鎖極めて遲し、從て成長の度も惡し、右の如くに付き混合林を仕立に利あり

E植樹一町歩に就き三千本位の割

十七、市價

A材價當山にありては一本壹圓市場に出しては參圓を普通となす

B薪炭材　在にては一棚壹圓八十錢

C同面積に於ける杉林と薪炭材との收入比較は地味により異なれども同質地なれば略同と

十八、幼時に枝折して好期なるも是れを施さゞるは拙劣なり　以上

五月十日　水曜日　雨天

本日は當所より豐野驛に至りて九時余の列車に乘じて柏原に至り、同地苗圃及黑姥山薪造林地視察の豫定なれば、六時旅舍を發し泥濘を犯して安源寺立ゲ花を過ぎ、千曲川を渡りて上水内郡に入りぬ、行く十數町にして鳥居村には至りぬ、夫れより停車場に至りしに列車の至るに餘刻も在りしにより一休して列車の至るに乘ず、途中の光景又山より外に映ずるものなし、愛林思想は有るにはあらねども供給餘りあれば林木の存立又多し、牟禮驛に着し夫れよりは見ゆる山皆低し、され

ど高さは黒姫山班尾山あり、一般以て平垣なりと稱すれば溢言たり、氣候は增々冷く車上四望するに所々に雪塊の存するを認めぬ、以て地方の寒きを知る、柏原驛にて下車し一休して柏原苗圃に向ふ、土質概ね朽土にして道路の歩行又困難なり、行くこと里餘にして目的地に着しぬ、雨天にも係らず移植の業は盛なり、仝所を視察し仝苗圃主事の案内によりて大林區署黒姫山麓の造林地を視察して再び柏原停車場に着す、列車の至るに時餘を有す其間刻を利して野尻湖に遊ぶものあり、時を待つに汲々たり時振は刻々進み遂に吾人の乘車も至りぬ、されば一行は長野市さして乘車す、途中の觀望又何等の感あるなし、六時長野停車場に下車し大門町五明館に泊す、夜卒業生中村君松本君原君坂本君柳澤君等の來訪を受く。

●視察事項は前號報告と大差なし故に之れを畧す

●五月十一日　木曜日　晴天

五時半起床七時朝食を終り中村君杉本君坂本君の三氏に案内せられて長野大林區に到る、苗圃を視察し後杉本君の案内にて經不眞田講習所及縣會議事堂を參觀し、其れより午後二時發の列車に乘じ鹽尻に向ふ、途中の停車場には有名なる姨捨あり、此地は觀月の名所として其名遠近に高し、鹽尻に着せしは六時なりき、之れより徒歩にて洗馬迄來り近江屋に投宿す。

長野大林區署苗圃害虫驅除試驗要項左の如し

播種面積二十坪とし、信濃山林會信濃教育會兩會事務所庭内の一部を借入れ之れに充つ、

播種すべき樹種は扁柏杉落葉松赤松の四種とす、

害虫を別地蓄養し置き、播種後種子發芽し壹寸以上生育してより害虫を播種地へ移し、苗本の害に罹るを待ち、種々の方法を施し該驅除の試驗をなす。

害虫驅除の方法

播種區域の周圍へヲギニンニク等を植栽し害虫を誘引し驅除する法、

播種面小區域の周圍へ菊を植栽し驅除する法、

播種面小區域全面へ藥品を注入し害虫を殺滅する法、

害虫豫防に有益なる雜草等を植栽し驅除する法、

●五月十二日　晴天　金曜日

午前六時洗馬を發し本山賛川奈良井を經鳥居峠を越ゑ藪原に着す、此地は櫛の產地にして近年迄は皆人工のみなりしが今は器械を用ひて盛に製造しつゝあり、此所を發して少し來れば壹平生諸氏の迎へに來られしに會し、拾壹日間の旅行の話などなしつゝ午後六時無事にて學校に着す。

滋賀縣の林業

遠藤滋一郎　治

一、本縣に於ける森林事業

本縣に於ける主なる森林事業を別ちて左の三となす。

一、苗圃事業

二、植樹奬勵事業

三、保安林整理事業

左に之れが事業の大要を記せん。

一、苗圃事業（三十五年度より四十九年度に至る十五ヶ年間の繼續事業にして、豫算金總額十八萬六千四百十六圓二十九錢五厘）本事業は主として公有林野整理の目的を以て經營さる。

縣下を四ケの林區に別ち各林區に一個の主苗圃及數個の分苗圃を置き、各苗圃に於て養成せる苗木を左に掲ぐる如き林野に造林するものに對し無代下付す。（苗圃に於て養成の樹種は杉、檜、赤松、落葉松、櫟、栗、樺、山榿の八種なり）

一　禿赭の林野

二　無立木の林野（本項林野の多くは大字又は町村有に係るものにして、將來公共團体若くは學校の基本財產となるべきものに屬す、

三　森林法により營林の指定、又は造林を命ぜられたる林野

四　右列記以外にして水源涵養其他公共の利害に關係を有する林野。

二、植樹奬勵事業（三十六年度より四十九年度に至る十四ヶ年間の繼續事業にして、豫算金額拾八萬千四百三十壹圓六十二錢。）

本縣の山林は禿赭實に甚しきを以て該禿赭山の整理は誠に至難と云ふべし、故に唯に縣に於て育成せし樹苗を無代下付するのみにて決して充分と云ふ能はず、故に大に造林を奬勵し又植樹奬勵金交付規定なるものを設けて、前掲の林野に造林したるものに對し左の規定に基き奬勵金を交付するの道を取る。

一　禿赭の林野に植樹したるものは植樹員數百本毎に拾錢以内、

二　小學校基本財產林又は學林に植樹したる時は植樹員數百本毎に四十錢以内

三　一二以外の山に林植樹せしものは植樹員數三千本以上壹萬五千本未滿は千本毎に金三圓五十錢以

內、壹萬五千本以上三万本未滿のものは千本毎に金三圓七十五錢以內、三万本以上は千本毎に金四圓以內。

以上の二事業は林業技術員直接之れに當れり、參考の爲め技術員の執務概畧を掲げば、

イ、樹苗を育成して之れを交付する事

ロ、下付せし樹苗が適當に處置され在るか否やの檢査

ハ、植樹奬勵金を下付するに當り其出願個所につき、出願の正否又無立木地の造林計畫をすゝめ、望に應じて造林計畫を立つる事

ニ、各擔當區內を隨時巡回して造林を奬勵し、又造林の事蹟を調査して之れを報告し、又は望みに應じて林業の講話をなす事等なり、

苗圃事業と植樹奬勵事業とは地方林業奬勵上相待て實に適切なるを感ず、而して本縣の如き兩者完備するものは他府縣に余り見ざる處にして、本縣の林業は其基礎完備せるものと云ふべきなり。

左に參考の爲め苗圃事業及び植樹奬勵事業費各年度額を掲ぐ。

勸業費中

一金十八萬六千四百三十六圓二十九錢五厘　勸業諸費苗圃費

內　譯

金二千六百八十二圓八十八錢　明治三十五年度支出額

仝八千七百十一圓五十錢五厘　仝　三十六年度支出額

仝八千六百十八圓九十二錢　仝　三十七年度支出額

仝一萬千九百十四圓七十二錢五厘　仝　三十八年度支出額

仝一萬三千百四圓十四錢　仝　三十九年度支出額

仝一萬三千七百九十六圓六十二錢五厘　仝　四十年度支出額

仝一萬四千百六十九圓七十錢五厘　仝　四十一年度支出額

仝一萬四千五百三十四圓三十錢五厘　仝　四十二年度支出額

仝一萬四千八百圓六錢五厘　仝　四十三年度支出額

仝一萬五千二十二圓十五錢五厘　仝　四十四年度支出額

仝一萬五千四百五十三圓八十八錢　仝　四十五年度支出額

仝一萬五千九百七圓四十一錢五厘　仝　四十六年度支出額

仝一萬四千七百四十九圓七十四錢五厘　仝　四十七年度支出額

仝一萬三千十圓五十九錢五厘　仝　四十八年度支出額

仝九千五百五十九圓六十三錢五厘　仝　四十九年度支出額

各年度支出額は縣施業上都合に依り、繼續年度內に於て次年度に繰り下げ使用する事を得。

勸業費

一金十八萬二千四百三十一圓六十二錢　勸業諸費植樹奬勵費

內　譯

金六千九百六十圓九十五錢　明治三十六年度支出額

仝一萬二百二圓七十二錢　仝　三十七年度支出額

仝一萬二千九百八十一圓七十錢　仝　三十八年度支出額

仝一萬千三百二十九圓四十錢　仝　三十九年度支出額

仝一萬三千三百三十七圓四十錢　仝　四十年度支出額

仝一萬二千七百二十八圓五十五錢　仝　四十一年度支出額

仝一萬二千九百七十圓五錢　仝　四十二年度支出額

仝一萬三千九百三十九圓六十五錢　仝　四十三年度支出額

仝一萬三千九百十七圓九十五錢　仝　四十四年度支出額

仝一萬四千七百九十二圓四十五錢　仝　四十五年度支出額

仝一萬三千二百四十八圓二十錢　仝　四十六年度支出額

仝一萬三千二百四十八圓二十錢　仝　四十七年度支出額

仝一萬三千七百三十一圓二十錢　仝　四十八年度支出額

仝一萬八千四十三圓二十錢　仝　四十九年度支出額

各年度の支出額は事業の都合により、繼續年度內に於て次年に繰下げ使用することを得。

三、保安林整理事業

縣下の保安林は其當初實に四万餘筆を以て數へらる、蓋し禿赭山野の多く且つ水源を琵琶湖より發す

る淀川流域の關係上斯く多數なりし由なれ共、去る三十五年以來專ら是れが整理に着手し、其必要なきものは着々解除し、現在は其半數に及べり、本年度よりは更に亦是が淘汰の調査をなし、保安林取扱心得に指定せる調書を作成し是が整理を期する物の如し。

參考の爲め本縣に於ける林業の機關を記せば、本縣の森林事業は官制改正以前は第六課に於て處理せしも、現時は第三部內森林係に於て是を處理す、而して森林係には技師一名林業技術員十一名（內八名は現時各林區へ常時出張）保安林調査員二名屬二名及雇一名を以て組織し各事務を分擔す。

樺太及沿海州の漁業

鰊漁業、鰊漁業は現今樺太西海岸及び沿海州中の一部に過ぎず、從來鰊は肥料に製するのみなれども之れが鹽藏若くは燻製は歐洲人の嗜好に適するを以て之れを外國に輸出するを得べく、現に樺太に於ては露人スコンノフなる者去る三十一年鹽鰊の製造業を起し以來漸次擴張したるを以て、開戰前即ち三十六年に於ては千六百樽を製造し浦塩其他に販賣せり、元來本邦鰊の漁業は產卵の爲め沿海に群來するものを漁獲するが故に其肉質肥膏ならず爲めに之れを肥料とするも、將來沖取漁業を起し最も肥膏なるものを漁獲する時は彼の英國鯛逸和蘭等に於て珍味として食料に供するものを得べく、故に將來日本海オコック海の漁業を開發する時は其漁獲大にして其利益又鮮少ならざるなり。

鮭鱒業、鮭及鱒の漁業は黑龍江下流及び樺太のタムラオ地方を主とし、又其東海岸及び堪察加の一部のみなれども、堪察加の如きは各川殆んど鮭鱒の遡上を見ざるなく、且其種類はレッドサーモン最も多く其他ハンバックサーモン、ドッグサーモン、シルバーサーモン、キングサーモン及び普通の鱒あり、其西岸諸川は僅かに一日乃至三日位に我帆船は滿載するに至るを以て如何に其豐富なかるを豫想し得べし、元來本邦產の鮭はドッグサーモンと稱する劣等品なるも該地方には歐洲人の美味として珍重するレッドサーモン、キングサーモン等頗る多く、現に堪察加漁業組合は去る三十四年よりアバチャ灣なるタリインスキーに百五十萬留を投じて魚類罐詰製造所を開設し、米國技師を聘し極めて新式の器械を据付け一晝夜に四萬斤以上を製造しつゝあり、又黑流江口ニコライスフスク港の漁業者は冷藏庫を裝置したる漁船にて鮭鱒の鮮魚をハンブルグに輸送するの計画をなせり、從來該地方の漁業者は歐洲市場に向つて輸送を計畫したるものありしも費用の多額なるを恐れ今日數艘の米船來漁し、現に去る三十六年報効義會の澤崎丸が試漁せしに不完全なる組織なるにも拘らず二萬尾の鱒を得たり、出漁中米國船に邂逅したるを以て漁業の實驗談を聞きしに、同船は沿岸に於て約三ケ月間に僅かに三回位錨地を轉ずるに過ぎずして年々二十萬尾以上の鱒を漁獲するは極めて容易なりと云へりと。

樺太島の林業

植物帶は六帶にして即ち左の如し

第一帶　海岸帶
第二帶　下層濶葉樹帶
第三帶　針葉樹帶
第四帶　上層濶葉樹帶
第五帶　偃松帶
第六帶　アリピー帶

而して其第一帶と第六帶とは殆んど樹木を生せざるを以て森林帶と稱すべきものは第二帶より第五帶迄の四個帶なりとす、今各帶の特徵に付き概記すれば、

第一帶、には殆んど著しき植物を認めず數種の海岸草類を生ずるのみなり。

第二帶、には多の濶葉樹を生ず、其種類は樺木、白楊、赤楊及び有香白楊の類之なり、又太帶に繁茂する灌木類はジモロスチ、忽冬の一種、接骨木、覆盆子等なり又此帶にはアングロフイルムウレシーヌムと稱する喬大なる徵形花植物を生じ、高さ八尺に達する者あり、斯の如く本帶は森林としては頗る有望なりと雖も、此帶中直接寒風に曝露せる場所は漸次不毛の沼濕地の狀態に陷りつゝあり、彼のッイム河下流地方の如き即之れなり。

第三帶、即ち針葉樹は西比利亞落林の林況に似て頗る美良なる森林に富む、其樹種は主として唐檜及び樅なり、此帶の樹間殊に傾斜地には黑覆盆子、小蔦及びチッス（朱樹の類）等の小灌木叢生す。

第四帶、は海拔直高七百フート、より始まり、樺木を主とし稀れに樺及び楊柳と混ず、而して場所に因ては煤竹廣區域に繁生せることあり。

第五帶、は偃松一面に地上を蔽ひ、之れを伐り開く事頗る難事たり。

第六帶、は高山草類の占領區域にして本島中の最高位

置にあり、本帶には高山草の外他に植物を發見せず、尚全島到る所落葉松を見ざるはなく、而して寒風の中らざる地に生ずるものは頗る良林を產せり。

森林の行政機關、本嶋は殆んど其四分の三は森林地なりと雖も、森林に關する行政機關極めて不完備にして殆んど全たく放置の狀態に在り、且つ西比利亞と同じく年々大火災あり、沿岸及び部落附近は概して荒廢の傾あり、其原因は西比利亞地方にて稱する所の野火及び惡漢の放火より起るものにして、年々數十露里若しくは百露里に延燒すると雖も、本島森林監督機關の不備と浮浪人の夥多なるとにより到底之れを防禦するの術なく、現今は漸次木材の欠乏を告げ住民日需の用材及び薪炭材の如きも、部落を距る事近きは七露里遠きは十露里若くは十五露里以上の距離に至り之れを採收せざる可らず、又夏季には本邦の漁夫上陸して多く沿岸の森林を伐採すと云ふ、然れども深く嶋の內地に入れば天然の森林にして未だ斧斤を入れず空しく天然の腐朽に委しあるの狀況にして、本島の林業は最も幼稚の域に在りと云ふ。

樺太島の動物

樺太嶋の內地及び沿海面には多くの動物棲息し、今日迄發見せられたる哺乳動物の種類は三十種以上に達し其重なるものは貂鼠、水獺、栗鼠、海豹、白熊及び各種の狐等にして皆地方產業上必要のものたり、然れども近年森林の開拓と共に獸類も次第に減少の傾ありて獵業者の收入も從て減少せり。

本島に於ける野獸の最大なるものは即ち熊なるが、大陸の熊に比すれば其性質柔和にして從つて家畜に對して比較的其害少し。

嶋の北部に於ては多くの馴鹿を產す、同地方のツングース人種及びオロチエン人種は之れを橇牽に使用せり。

山岳中には麝香及びアリビー猩を產し、其他大野猪、羅賀鼬、貂鼠、水獺及び多くの狐を見る事あり、而して全嶋到る處最も多きは兎なり。

禽類は海岸に多く森林內には少し、而して最も多く湖邊に棲息す、今其種類を擧ぐれば鶴、雁、鴨、鷸、ヤーブチク、信天翁、鳥鴉、山鳥等なりとす。

又家畜類にては牛馬羊及び豚を飼育し、家禽は家鴨、家雁、鷄及び七面鳥なり、又オーヤクーム人種アイヌ人種は普通の犬の外に橇牽犬を飼育し、冬期は之れに橇を牽かしめて間宮海峽の氷上を旅行し、又は嶋內を旅行す、實に雪中島內の旅行は殆んど此方法に依るの外途なしと云ふ。

樺太の鑛業と產額

重なる鑛業　本島に於ける重なる鑛業は石炭なり、實に石炭は本島天產物中最も恒值あるものなり、本島の石炭は千七百八十七年に始めて其存在を發見せられたるものにして、現今はアレキサンドロフスク附近に於て四ケ所及び西海岸のッエ、ムカチー、ホエ等の諸地に於て採掘せられ、而して此西海岸の石炭は大なる鑛層をなし水平面に强き破目を有す、然れども其層の傾斜は僅少にして之れを採掘するに當り鑛道を穿つの必要なく採掘頗る容易なり。

石炭の性質と需用　本島の石炭は理學上及び化學上の性質頗る善良なることは聖彼得堡鑛山學校の實驗に依りて明瞭なり、該試驗の結果に依れば炭素は百分中七十四乃至八十四を含むと云ふ、又其需用も頗る廣く露國にては之れを浦港に送りて大平洋艦隊及び東淸鐵道の焚用に供し、又東亞諸海岸の需用に供せりと云ふ、

石炭の採掘　石炭の採掘はマコフスク私立商會の手にて採掘するものと、集治監に於て囚人を使役して採掘するものとの二種ありて、集治監の官行採掘に屬するものはウラジミルスク及びアレキサンドロフスクの二炭層にして、主としてアレキサンドロフスク港に於ける官公衙の需用に供し、又たマコフスク商會にてムガチー及びッエの炭層を採掘せり。

石炭產額と價格　一千九百年に於ける石炭採掘量を揭記すればッエ鑛區に於て二萬四千五百八噸半、ムガチー鑛區に於て一萬三千二百八十八噸、ウラジミルスク鑛區に於て四千噸なり、其他全島に於ける石炭の產額は頗る多額なりと雖も未だ充分なる統計を得ざるを以て之れを知る能はず、又採掘勞力賃一ケ月一人につき十五留乃至三十留なり、而して一噸に對する採掘費用は五留にして其賣渡價格は七留二十五哥なり、然るに本島石炭業のために惜むべきは輸出に適する良港灣に乏しく船舶の碇繫に困難なるが如に、露國船又は外國船の北海を航行するものは重に我國の石炭に供給を仰げり、故に開戰前より西比利亞の事業家に於て港灣の改築計畫をなしつゝありと云ふ。

石油及び金鑛　石炭の外本嶋には石油金鑛及び鐵鑛に富めり、然れ共金鑛及び鐵鑛は其存在確知し得らる

ゝと雖も、未だ其採掘に着手せざるを以て其産出量を知る能はざるも獨り石油の採掘業は頗る進歩せるが如し、殊に本嶋のオコック海岸地方に於ける石油は油井及ひ石油アスファルトの狀態にて多額に産出するが故に、數年前ニコラエウスフの漁業家ゾーフ氏其他採收を試みたるも不結果に終りしが其後千九百一年エフフクメヤ氏も石油採掘業に從事し、其最も多く産出するフアダミン河附近に採油場を設けしが漸次著しく發達をなしつゝあり、將來極めて有望なりと云ふ。

樺太雜感

本嶋森林の價値　本島の森林も亦多望なる將來を有す、濫伐を戒め其利用を誤らざるときは必ずや漁業に次ぐの富源たらん、余が實地に見たる處及び諸人に聞く所の事實に徴するときは本島面積四千九百方里其三分の二は即ち森林なりと云ふを得べし、特に喜ぶべきは連山悉く鬱蒼たる樹木を以て蔽れ内地に於て見るが如き禿赭の山巓を見ざる事なりとす、斯の如きは期せずして水害豫防林たるのみならず、或は瘴癘の氣を和らげ、或は又魚附林たるの効用をなして沿岸漁業を倍々多望ならしむるものとす。

本島の樹林は南部と北部と自ら多少の相違を見る事なきにあらざれども、榎、松、椿、落葉松、樅、山楂等を其主なる者とす、就中榎松落葉松最も多く木質堅くして建築上の良材なるのみならず燃料に於ても亦此右に出るものなしと云ふ、即ち本嶋の山野は是等價値ある樹木密生して連亘盡る處なく殆んど内地に於て見るを得ざる壯觀を呈せり、而して密生せる樹木は直くして高く數丈に及び、最も建築材電柱鐵道枕木等に適すべし。

本島の森林は斯くの如く多望なりと雖も之れを利用すること能はざるときは實の持腐れとなりて斧斤入らざるがまゝに朽敗し、或は都邑附近濫伐頻りに行はれて木材欠乏風水害等の弊を釀すに至るべし、交通運輸の不便なるは林業經營上の一大欠点なりと雖も本島の地勢南より北に細く長くして、其中央に高き山脈を有するは林道開設其他木材を海岸に運出するに於て尠からざる便利を有するものといふべし、又南部及び東部に於ては流木に適する河流あり、又冬季雪上に橇を用ひて運出を容易ならしむるの便もあらん、殊に本島に在住する農業者の副業として冬季木材伐出業を營ましむるときは一舉兩得の利あるべし、世人の知る如く本島住民が十一月より翌年五月に至る半歳以上の冬籠期間は僅かに燃料採取をなすの外一定の業なく閑居不良をなすの結果を見たりと云へり、今後我政府にして統治の實を擧げんと欲せば須らく此弊に鑑みて冬季間の副業を興ふるの要あるべく、而して伐木業奬勵の如きは最も適當の方策たるを信ずるなり、林業經營上最も恐るべきは濫伐の弊なり、南部コルサコフ附近は既に此弊に陷り市街を距る五六里にして漸く森林を見るといふ、歴山府の如きも亦此傾向あり木材薪炭を得んと欲せば二三里の遠きに求めざるべからず、地味氣候等の不良なる一因も亦之れに歸すべし、次に怖るべきは山火事なり曩に「樺太行」中に少しく記すところありしが爾來各所に實見して其害の愈大なるを經驗せり、歴山府より ルイコルに通ずる道路の一傍若くは両傍皆災殃を蒙りウエルファルムダン附近に於て其著しきを見たり、土人が地を拓き牧場を作らんがために森林を燒き拂ふは一應理あるに似たれども火焔は遠慮なく四方に燃ひ擴がりて可惜大面積の樹木を灰燼となす、又樹木の發生を防がんがために例年其燒拂ひを行ふは遂に一木なからしむる所以なり、又路傍を燒くは山中の一條路が左右樹木の蔽ふ處となり晝尚暗くして通行不便なるがためなりと云ふも、之れがために四圍の山野を荒凉たらしむるは愚といふべし、本島の如き寒國にありて森林を重んずる注意を欠くときは冬季日々の燃料をも欠乏するに至りて拓殖上の一大障碍をなすやも知るべからず、戒めざるべけんや。

本島森林を如何なる方法を以て處分すべや、而して如何に之れを經營し保護し利用すべきや等の問題に至りては之れを言ふの時にあらず、今は唯本島森林業の有望なるを世に知らしむれば足れり。

（以上五項は興味ある記述なるを以て見るに從て新誌より抄出するものなり）

通信

出征福島江軍後備第一師團第一旅團第二中隊附

○　中村茂

上陸以來自己及ひ所屬部隊の行動及び目的は軍の秘密に屬するを以て御報導申上兼ねし候得共今日まで觀來りたる遼東の模樣を少しく申上候

一、遼東即ち半嶋一部の森林に就きて申せば先づ余が今日迄行軍途上に觀來りたる處に依れば森林としては

毫もこれなく又森林樹木も少しも之なく行けば行く程皆禿頭裸峯一株の雜草すら見當らず實に驚く昼ぜのものにて候稀には人家に近く白楊樹これあり樹木としては白楊山梨柳松等に之あり候両三日前羅漢柏を四本見當り申候尤も北東に進ひに從ひ樹木次第に增加いたし白楊も植栽せられ赤松黑松も莊河附近には學理的に植栽後四五年のものも之あり申候

河川は到る處に河原をなして存するも河水は皆乾涸して僅かに河の形成をなし居るのみに候河幅は大なるは一千メートル位小なるものは四十メートル位何れも供水の爲めに土砂を沒し積砂膝を沒し恰も彼の日本の神戸と兵庫の間を流るゝ湊川に類似いたし居候

二、農業の狀態に就きては土民は專ら農業を本業とし其耕耘地の廣大なる實に驚くゝらいに候小丘は皆農地に開墾せられ居り候惟ふに土民は廣大なる土地を有して粗放的農業を營ひ者の如くに之あり肥料は堆肥のみにて堆肥の要領は稍學理に適ひたるものゝ如くに之あり候へども堆肥小屋を設けざるは土民の土民たる本領ならんと存せられ候農作物は粟黍大豆小豆等にて何れも其稈は七八尺ばかりも生長し居れば燃料其他の材料には皆この稈を用ゐ居り候

三、家畜は主として牛馬にして各戸三四頭づゝを飼養いたし居り家及ひ禽は農家の副業の如く鷄家やき等飼養いたし居候要するに此地の農耕は牛馬の力に依るらしく見受け申候　先は要点まで如斯に候頓首

○　群馬縣利根郡赤根城村足尾銅業會社赤根出張所權兵衛驛　平澤政吉

僕は五月末に足尾の地に至る豫て耳にせし如く四面皆禿山点々砂防工事の施されつゝあるを見る一日諸工場を見物に出る唯吁と云ふ語を發するのみ他に出ずる言を知らでありました町の繁華なることは又福島町の比ではありません六月十二日迄本山の調度課に出勤致して居ましたが僕等は利根に行くべき者故別に仕事としてはなく朝七時より午後五時まで椅子にあるので一寸困つて居りましたが十二日より課長も歸り利根山に來ました僕は利根山の樣兵衛と云ふ停車場に居りますが下條君は圓貴と云ふ一里午を隔てゝ僕と同じく鉱業に附ける木材の伐木造材運搬の監督の見習をして居るうです仕事に就ては別に困難といふ程でもないようです利根山は縱梅山毛樺等の樹種のみで本會の檜柏などは迚も見る事は出來ないです尤も海拔五千尺の高地冬は非常な寒さだとの話です

○　岐阜縣高那郡飯川村和田區　六月三十日　志津富士太郎（肆次郎君實兄）

拜呈暑氣の候に御座候處先以て貴位益々御清榮の段大賀奉候降て愚弟儀在校中は一方ならぬ御厚誼に預り且又歸家の砌は特別なる御厚意を蒙り誠に有難く御禮申上候早速御禮申上ぐべき筈の處彼是と召集の名目にかけられ今に本意も得ず實に慚愧の至りに御座候然し決して忘却は致さず思ひながら延引候始末何卒平に御宥恕下さるべく御依賴申上候扨愚弟事去る二月十二日を以て出征軍に從ひ行動國報中の處彼の奉天攻擊に於て天晴白蓮華の香中と相成候由戰友より只今情報に接し中には種々の報道も有之候へ共今だ其筋よりは通知これなく候間確と申上ぐ事は出來申されず候が今以て書翰不通なる處より察すれば戰死は慥なる事と思ひ居申候何れ後日公報次第早速御報申上ぐべく候何分桜長閣下始め各諸君願くは御健全にて日夜御勤學あらん事蔭ながら居祈候　先は御禮旁々御知らせ迄斯の如くに御座候　早々頓首

○　東京府麹町區上武藏町九番地　輪湖正由　金子方

謹啓春意漸く催し梅香馥郁として黃鳥の舌滑かなるの時先生樣には益々御すこやかに御暮し遊ばるゝ由何よりの事と存候降而小子も相不變孜々勉學致し居候間乍憚御休神なし被下度願上候

去りにし年は山林學校の定めの業を嬉しく卒へこれに付けても全く先生樣の多年御樂篤なる御教導によりて愚なる性にて林の道は無下にありけるを年月の御恵の露の深きなさけにてようよう卒へしは嬉し共嬉し此御恵は海山にたとへんも中々嚴なるべくいつの世力忘れまつるべきや御前を辞せしより最早一星霜と打なりぬ不能なる私等に於て到底盛岡高農の試驗に應ずるも見込は無之候得共經驗の爲め受驗致し度候に付卒業証明證御下附相成度願上候　早々敬具

愛媛縣上浮穴郡久万小林區署　正又實次郎

拜呈小生赴地御周旋なし下され誠に難有謝し奉り候偖て出發の際拜顏至し度處御不在の樣に承り其意を得ず赴地へ出發仕り候段平に御海容被成下度願上候

去る三日自家を出發し南村君と同道吾妻橋に一泊四日午前四時同所を出發九時十二分中津發の氣車に乘り名古屋にて凡そ二時間休憩致し午後二時三十九分發の汽車同日午後十一時大坂着一泊五日午後二時出帆なる高知行藝陽丸（一七七）に乘船仕り四時神戸港へ着郵便

物の都合にて三時間余を要し七時三十分同港を出帆仕り候是より高知直行にて他港へは寄らず六日午前十一時高知へ到着仕り候海上波稍荒く艱難なりしも幸に無事にて揚陸する事を得候六日は宿にて休憩仕り七日午前中高知大林區署へ出頭し拜命仕り候然るに高知大林區署よりは特命にて久萬小林區署第一號保護區勤務を命ずとあり而村君とは同居するを得ず遺憾ながら赴任旅費を請求し八日南村君と東西に別れ字猿橋に一泊九日午後五時四十分目的地に到着橋長てふ旅館に投宿仕り十日久萬小林區署長心得森林主事笠木寛殿と面會し十一日より同署内務に從事致し居り候内務は主として件名簿の記載通牒文の發送及回答文の發送等皆事新しき物のみに候得ば一々上官の指導に依るの外なく追々内務も慣るれば出張の命令あるべく言はれ候兎角新參者の事に候得ば誠實に上官の命を守り他意熟心なる考を以て勤務致し居り候間他事ながら御安心下され度候

先は御禮旁御報知迄右混雜中亂筆御免

明治三十八年九年十三日

○　遠藤治一郎

拜啓暑氣日に烈敷相成候處校長先生始め諸先生御一同御精勝に在らせられ候哉伺い上げ候次に小生事今度滋賀縣犬上郡高宮村第三林區へ常時出張を命せられ岡本町北村吉平方に下宿致し居り候間以後御芳書賜はる節は右記の宛にて御差出被上度　先は不敢取御通知迄申上度如斯に候(卅八年八月)

○鹿兒嶋縣熊毛郡農林學校教諭關原咲也君よりの通信

謹啓又候夏の時節に相向き候處先生初め皆々樣一同愈御盛大益々御清福の段大賀奉り候降て小生爾來無事消光在能候間憚りながら御安心下被度候柳田君の書狀により學校の樣子も萬事委細承知仕り候處益々の御盛業誠に有り難き極に御座候光蔭は鐵砲玉の如くにて候小生渡嶋以來最早一有年と相成り昔の面影は全く失せて學日に退歩し變態過期を以て有名に候(中略)小生の學校は職員五名生徒六十五名にて候小生の課目は

林學通論	(二)	一年
造林	(四)	二年
森林利用學	(一)	一年
植物	(二)	一年
代數	(二)	二年
地文	(二)	三年
算術	(四)	一年

先は下らぬ事ゑで恐縮謹言　(六月九日)

○召集一令の下に出征致し鴨綠江軍後備第一師團騎兵隊第二中隊に勤務中の中村茂君よりの通信

しげる幸に無事去る三月一日より毎日引續き戰爭に御座候當地は奉天城廠の中間に有之乾河子と云ふ處に有之戰線は乾朝子北方約一里の障堂と云ふ高地に有之候露助も中々馬鹿になりませんよ

寒氣は攝氏○度下五度位に有之候入浴は去る一月三十日内地廣島に於て浴せしのみ手や顏面眞黑漆の如くに有之候當地樹木少し樹木澤山の處は大孤山以北當地以南に有之候山は澤山にて山又山に有之候樹は柏欅類多く針葉樹はまれに松あるのみ皆落葉の濶葉樹にのみ有之候雜木は木曾三番開田地方と一般に有之候雪は少し沿道の土民村落は實に憫然の至りに有之候先は(下略)

三月五日　乾河子露營火の下に於て　しげる

○在新潟縣北蒲原郡五十公野村五十公野小林區署小松精内君の通信

謹啓在校中は一方ならざる御教導にあづかり誠に難有御禮申し上げ奉り候尚ほ種々非常なる御厚情にあづかり是又難有御禮申し上げ奉り候過ぎし十九日長野大林區署より召狀到着致し候間二十一日出發致し候て當日大林區署長より辭令書を拜受致し新潟縣北蒲郡五十公野小林區村杉保護區官舍詰を命せられ翌日は逗留致し二十三日一番列車にて長野市を出發致し當日は沼垂町に宿し翌日(二十四日)歩行にて午後四時五十公野小林區署に到着致し候間御禮旁御報迄　早々頓首

十一月二十五日

○兵庫縣有馬郡農林學校に在る會員齋藤正雄君よりの通信

諸先生には益々御清榮奉欣賀候さて(中略)其大なる御厚情に預り誠に有難く茲に紙面を以て御禮申上げ候拙生儀去る十一日福嶋町發十三日午前十時三十分當地着翌十四日より出勤致し居り候へ共當校々長は現今缺員にて未だ小生の受持學科は未定に御座候何れ來學年に相成り候ばゝ決定致す事と存じ候へば其節御通知可申上候

尚ほ當校の模樣に就ては當校一次年報御送付申すべく候間御覽被下度候

三月十六日認む

○在足尾銅山下條初太郎君よりの通信

謹啓永々御無沙汰致し候段平に御海容被下度候さて先生には如何御消光被遊候や降て小生儀も出發以來調度

課へ勤務致し居り候處今回又利根出張詰を命せられ本月拾壹日辭令受取十三日より出張所へ出勤致居り候間御安心被下度候次に當所に於ては主に利用のみにて造林等の事は更に之無く毎日木材木灰の受入鑑索の運搬方等の事務にて候毎日朝六時より午後六時までわらじにて執務致し居り候間身体は至極健全に事務も愉快に候が珠算の不出來に一番閉口致し居り候

調度課に居るころには四五十人の中で何にも仕事なく只默然と机に向ひ居るより今日の方餘程氣樂に御座候次に木材の種類は矢板支柱材留木等が主なる者にて候當地は非常なる山中にて人家は事務所員の役宅及び人夫住家の外一軒も無之山中にて候初めは小生も平澤君と同一にて候ひしが平澤君は只今權兵衛と云ふ所に在勤致し居り候其外申上度き事は山々に候へ共又後便に致し先は遲延ながら御無沙汰の御事斷りまで　敬具

下　條　生

文苑

和歌

夕暮の松　　奇峰

賤が家の夕げの煙たなびきてねぐらにかすむ松のひともと

秋　　仝

破がきにすだくこほろぎ聲やせて紅葉の一葉風なきに散る

月　　仝

彼方なる檜の林漏れ出でゝさやかにうつる秋の夜の月

秋の夕暮　　玲朝生

日は西に月は東に空淡く靜に暮れて吹くや秋風

初秋　　仝

一聲の秋は柳に音づれて寒さ身にしむ寄宿舍の窓

夜半の月　　清雲生

川の面にうつる月影友として一人ゐむ木曾川の邊

○　　天翠

秋風はあわれをうへぬ昨日今日ふみよむまどのまつがこづゑに

むかしをばしのぶか秋の月の夜にうらみをこめてなくむしの聲

中村志津両君の戰死を聞きて、桂月

何事もともに學びし倒を偲へば袖のれもり行くなり

各務が原　　靜風

名にしれふ各務が原も霜かれて七草千草色あせにけり

秋の即事　　仝

さびしさに秋野のれもるながひれば聲もあはれに鈴虫のなく

俳句

木曾川の水も染めけり右左　小林桂月

寄宿舍の窓一面のもみぢ哉　同

秋の日や草の實こぼる川の底　同

通學の鞍音寒し秋の暮れ　同

寄宿舍炊夫の交迭

朝寒や火鉢圍みて噂かな　同

たけがりやひなしく手折る萩の花　玲朝生

すゞむしの聲美はしき秋の月　同

蜘蛛の巣に二ひら三ひら落葉哉　泉水生

夏逝ひて秋風立つや木曾の山　清雲生

秋の野に淋しく渡る鐘の聲　同

秋風に連れ立ち昇る木葉かな　同

秋の野に淋しく咲くや女郎花　同

秋空の夜半に結ぶ刀哉　秋夕生

白菊や笑ましく咲ける秋の庭　同

はるのよ

天地有情の一節

あるじぼたれやしらうめのおぼろの月なたよりにてうのわくらはのてすさびにやすかにもれしともしびにたゆりほぼてじ花の枝おろぼの月のうらみよりことはむなしく音なたねてあゝそのよはの梅が香を

やぶりにむせぶ春のよはしのびて聞けばつまなとか。すゞろに酔へる人とゝろ花のすがたは知りしとか。なれしやぶりの鳥なかむそのよくだちぬ春の雨。つまぼた忍ぶかれひとも

あゝ其よはのつきかげを。

眞紅の舌

玲朝生

飄と打ち付くる砂　　南風烈しき夕

早鐘の聲はみだれて　　紅は天に滾る

ばらばらと落ちくる火の粉　　囂々と火の手の勝閧

猛然と焰あがりて　　天津空焦さんす勢

誰か來て吾屋根の上の　　飛火消て給へと祈ぶ

乙女子の父はけうしも　今日はしも留守にてや
若やかの花嫁すがた　年老し母を負ひたる
いやたけく吹きまく煙を　押分け逃げ行くもあり
颯々と火を卷き散して　之でもかと許り狂ふ
風の爲めに靡く焰は　廂より廂に移る
火鳥出て四方に散るや　三所より火焰は起り
大なる火玉銜ふて　火中を綾に飛び交ふ
逆卷くやはのはの車輪　魔神の紅の舌
十有數戸の家悉く　時の間に舐り畢んぬ
野となりし昨日の此處を　見渡せば湯煙白く
眞菰の小屋こゝやかしこに　朝げ焚く煙細しも
畑となりし七珍万寶　灰となりし大厦高樓
何方や昨日の姿　駒ケ嶽山一際高し

福嶋關。　山邨良由　山村家世々常福島之國

美矣山河固。關門傍二水濱一。只今何用レ閉。來往太平人。

小野瀑布。

石壁三千尺。飛流日夜寒。長留不消雪。幾度入二毫端一。

寂覺床。

偶來石牀上。懷古立二煙汀一。投レ竿人不レ見。片月數松青。

巴潭。

美人何地去。千載水悠々。中有二盤渦處一。猶爲二巴字一流。

御坂吉田　蓋隱二千此一　茶好。

幽人居二此地一。獨往北山隈。千載山猶在。幽人安在哉。

木曾名所　福翁

予讀書の際木曾の勝區に關せる故人の絶句數章會心のものありたれば左に錄して同好の士の一瞥に供す

崎陽之作。　坂本天山

夢結鄰山萬里程。神遊一夜涉二玄瀛一。華商館裏殊方別。赤馬關頭故友情。浪花所親家不レ辨。美濃養老跡難レ明。行臨岐蘇溪中險。驚破仙床激浪聲。

夕の想　寺島秋水

夕陽は今落ちて薄黑い靄が野から山を罩めやうとする時、彼の低い山の半腹にある鐘樓からは今や入合の鐘の音が靜かに響き、鳥は平穩なる塒を求めんと此方の里より彼方の山へと飛び行き、農夫は一日の働を了へて鍬を肩に鎌を手に各自夜の團樂を樂みつゝ家路へ急ぐ折柄、余は獨り茲木曾の川邊のとある石に腰を下ろしつ、清き水面に落葉の一片二片流れ來る景色に見とれ居る中何時しか吾にもあらず深き思ひに沈みぬ。

思ひ來れば百感腦裡に漲ち充ちてはとはと堪へ難くなむ、年々の花は相似たれど年々に人は同じからずと實に今年の吾は去年の吾に非ず、嗚呼人間限りある命數をにないて限りなき文の奥を極めんとす、いでや勉めざるべきにと思はぬ年とてはなきものを、又今年も思ふ事の一つだになし得ずしてはや新しき秋を迎ふるに至りしはかなさ。

とうとうかゝる樣に過ぎ行かば、遂に我身もふりまさりて後悔の八千度己がほろを噛むもなんのせんなくて空しく時雨ふる墓に名もなきしるしを止むるに至らむ、されば我も魂ある一個の男子と生れながら如何で此の生涯を夢と過すべき、いでいでこむ春よりは材肝の心の駒に鞭打ちて文の林の奥に分け入り、昇る旭の光をしるべに學びの海に漕ぎ出でゝ孜々として勉めばや。

長き默思より醒めて眼を擧ぐれば、いつしか夜の黑幕はうが無限の翼を擴げて山も川も人もはては我身迄も包みぬ。

時の後れしに驚きれもむろに立て歸路に向はんとすれば、我行く先を導かんとてか西の空高く宵の明星輝き出でぬ。

（完）

詞叢

先輩諸君　忘吾生

朝に城山の晴嵐を仰いでは人生の神秘を歌ひ夕べに蘇川の落暉に對しては思を理想の高きに馳す、嗚呼諸君は此の搖籃の中に呱々の聲を擧げ而して此の樂園に遊遊せしなり、然るに今や諸君の跡影は多くを此の樂園に見ざるなり。

諸君、吾人の諸君に於ける諸君の吾人に於ける因緣豈淺しとせんや、諸君の跡影を此の樂園に多くを見ざるも而も自然は尙ほ諸君の面影を語りつゝあるに於ておや、吾人が艶陽四月の交諸君に迎られて學窓に呻吟する既に二歲有餘、如何に其の情緒の濃かなりしよ如何に其教導の懇切周到なりしよ、慧安の道希望の光明は實に是れ諸君の賜なり、感謝々々、然るに豈圖らんや諸君が學成り業遂げて飄然棱門を辭して故山を有するの時より杳として其聲咳に接する事の稀ならんとは、嗚呼諸君は劇務に忙殺せらるゝの止むを得ざるに由るか、將た修養に吸々として後進を誘掖するの餘裕なしとするか、請ふ諸君、諸君にして眞に友愛の情と母校

を愛するの情あらば願くは其所懷を告ぐるに吝なる勿れ、諸君の動靜を報ずるに吝なる勿れ、敢て望む。

學友諸君

忘吾生

在校百有余の學友諸君、諸君は日々五時の課業と課外の實習と三時の特別自修其他御道庭球に實に能く學び能く勉む、然り其精神的方面と身体的方面に於ゐて孜々汲々以て修養に怠ざる誠に慶すべき哉、然れども諸君、諸君は此間能く同窓和親を全ふし互に思想を交換融和して以て團体意志の統一を鞏固ならしめ同心協力相誘掖精助して斯道に盡瘁せんとはせざるか、一室の談論未だ以て廣く同窓に告ぐる能はず、遐邇同壇能く是れを全ふせんとする即ち本誌發刊の止むを得ざる處ならずや、適當なる修養を勉めて有益なる智識を蓄き、内は以て校風を發揮し見地を擴め、外は會員相互の思想を連絡し、内外一致協同して和親を全ふする是れ本誌の任務ならずや、然るを諸君は百有余の頭顱を有しながら投稿するの余りに寥々たるは何ぞや、諸君は何が故に默して更らに言ふ處なきか、若し夫れ此の如くにして止まむか如何にして相互の思想を交換統一して健全良美なる校風の發達助長を圖るを得ん、本誌は固とより文學雜誌にあらず學術雜誌にあらず唯校友會精神發表の機關たるのみ、慨天動地の名論卓説を聞かんとするものは既に誤れり辭句の巧拙の如き又問ふ所に非らざるなり、諸君が烱眼に映じたる所諸君が鼓膜に響きし所、諸君が修養の全忠忠の迸溢せる處、是を一枝の筆に載せて以詩歌論藝を進んで之れを投せざる諸君何の憚る處かある、諸君何の躊躇する處かある、吾人は滿分の白を存して諸君が稿を投ずるを俟たむ。

希望を大にせよ

通常會員諸君は果して如何なる希望を有するか、本校卒業生諸君は果して如何なる希望を有するか吾人悉くこを知るに由なしと雖も、兎に角現在林學を修めつゝ將た嘗て修養せる林學を應用しつゝ實事に當らるゝ諸君なれば、必ずや林業に關係せる事業によりて其一身を立てんとするは諸君の否まざる所なるべし、否希望して止まざる所ならん、偖て其の林業によりて身を立つるにも種々の情況あり、官吏となりて國有林野を經營するもあるべし、或は事業家となりて自ら大森林を經營するもあるべし、其の何れにするも官吏たらば須らく唯一の能吏たるべく事業家たらば其のグレートたらん事を期すべし、豈に徒に一生を小官吏に甘んじ小事業家に安んじて可ならんや、夫れ希望大なれば日常の行爲は他人の規制を待ずして自ら積極的なり進歩的なり、奮勵自主能く艱苦に堪へ目前的欠乏を甘んず、希望小なる者は全く之に反し總ての行動皆其日暮りにて意氣銷沈小成に安んずるを常とす、諸君夫れ現今果して其の何れにありや。(曠北)

先輩と後輩

何れの世如何なる地と雖も先輩と後輩とは離るべからざる因緣を有するものなり、先輩卒業生諸君の社會に於ける働き振り如何によりては勿論母校なる山林學校の盛衰に關するは言を待たず、延ひて後進出身者の進路に大關係を有するものなり、先進諸兄の事業の成否は後進諸弟の將來に大なる關係ありとせば先輩卒業生諸兄の責任又輕からざるなり、幸に諸兄が奮勵と成功を望む。(曠北)

大に海外の林業に注目せよ

韓國可なり、清國可なり、是等諸國の森林事業の經營は諸君青年林業家の手腕を待て解決すべきもの甚だ多し、從らに猫額大の本土に戀々として其の曠足を屈する如きは吾人の甚だ與せざる所なり、然りと雖も徒らに空想に走るが如きは亦大に慎むべき處たり、凡そ一事を成さんとするや先ず詳細なる研究と精密なる計畫とを確立し、之を遂行すべき手段方法に於て遺憾なきを期せざるべからず、將來林業家を以て任ずるの士大に奮發する所あれ。(曠北)

コンモンセンスの修養

如何に深遠なる學識を有し、如何に絶妙なる技術を有するも常識に於て欠くる所あらば、或は專門學者若くは技術家としてはよし慣値あらんも活社會に立てる活人物としては何等の價値を認めざるなり、活社會に立ちて活事業を執らんとするもの大にコンモンセンスの修養を勉めよ、夢の世の變りものとなりて人の嘲りを買ふ勿れ。(曠北)

共同一致の精神

日本人通有の弊として共同の精神を缺ける事は皆人の稱ふる所なり、共同一致の精神は互に他人を信用し或る程度迄他人に事を委任して疑はざるより起る、猶ほ此の精神を持續せんが爲めには自己を犧牲にするの精神相互になかるべからず、自分の都合よき事利益なる

事のみを自己に執り、自己に都合惡しき事不利益なる事は之を他人に塗り附けんとするが如くんば焉んぞ共同一致の成立を得んや。（驥北）

朋友相互間の制裁

古語に曰く「善を責むるは朋友の道なり」と、夫れ朋友は惡あらば之を忠告し善あらば之を勸むるは益友たるものゝ執るべき所なり、故に若し朋友にして誤れる道に踏み迷へる場合に於て之を改めざるは朋友の道を缺けるものなり、善に勵めざるは友たるの義務を忽にするものなり、鉄拳制裁時に甚だ可なり、然りと雖も人を正さんとするものは先づ自ら正さるべからず、自ら正さずして人を正さんとするが如きは薄氷の上に坐して池中の地を上げんとするに等しかるべきのみ。（驥北）

長壽の一夜物語　肥後　金四郎

僕も何ぞ書く積りであつたが遂に忙しくて、とは言ふもの其實ぞ―か、といふに例の懶惰其物がいたす所に外ならぬのだ、嗚呼意氣地の無い話何時も〳〵何かに付けて後悔ばかり、時々として增すものは欠点ばかり、これでは前途が覺束かないなと思ふ事も少くない、然し欠点を見出す其都度發奮の情は增して來る、うれにも係らず實行は誠に出來ない、一体何うしたものだらう詰り意氣地がないからだ、恁う自分鑑定をして大に憤慨に及んだ今後は終始之れを念頭に置いて勤勉なる諸君と共に學び强健なる諸君と共に体力を練らう、今言つたうれの如くなるけてゐた爲め今回は自分の起草が出來ぬのみか諸君のを集める事が出來なかつた、實に殘念である、うこで雜報部も少いようだから、或書物から一寸とした事を轉載する、うれは糸先生の衛生話だ題は長壽の一夜物語といふ、次の通り。

我れ甚て小さな詩囊を絞りつゝ段々羊腸たる坂道を辿つて行くと何時の間にか芝生の小平な所に出た、座して四方を眺ひれば何れも淋しい景色、殊に南方の山腹に當つて一軒の屋根が森の間から見ゆる樣はねも言へぬ幽邃な境界、さて何人の住居やら是非問うて見たいと云ふ例の好奇心に驅られ、うれより刑に縋り木の根に攀ぢ一歩に一喘き五歩に一休みと云ふ有樣で遂々着いた時ははや日も入相の鐘を聲かせてゐる寺である、

早速夕刺を通じて方丈の室に到れば拂子を手にしたる院主の霜白い長き眉と髯とは何となく神々しさを添へてゐる。

四方山の談の末「失禮ながら御年は」と問へば七八十と思ひの外百十歳なりとの事、「嗚呼うの年迄生きたらば必ず思ふ一分遂げようものを」羨ましくなつた我は色々老僧の長命法を尋ねた、これより夜に入つての衛生論愈々戰はして愈々面白かつた、今其の大要を記せば左の通りである。

「我が衛生法は心外無別法から割り出したので現今の學者が說くのとは大に違ふ、失禮ながら君等の說くのは言行不一致でしかも人を臆病にする傾きがある、尙ほ詳しく言へば空論に走つて實際に行はれぬ唯物論である、今食物から言はうなら蛋白質は幾ら含水炭素は何程脂肪は斯く〳〵でこれに違へば夫々身体に害があると、されど天下の人誰か一食毎に或は分析し或は其の目方を秤つて食ふものがあらう恐らくはあるまい、滔々たる幾億の民は心の好ひ所に從ふて之れを調理するのであらう、又心から牛乳を厭ふものに强ひて之れを呑ませたり、何うしても鷄卵を欲せざる人に無理に之れを食はせたりして或は惡氣を催し或は嘔吐するに至つてうれでも滋養の功があらうか、決してあらざるべし、之れ心が之れを避くるからである、蒙古高原の人は山羊の血を大に樂しとして飲むから又大に身体を養ふけれど、我國のものは之れを見たばかりでもゾッとするのみならず必ず滋養の功がないに相違ない、又極端に言へば煙草の成分たるニコチンは一つの魔睡劑で非常なる毒物とは云ふけれど、心之れを樂しんで習慣となれば却つて娛樂的の興奮劑となり、睡魔の襲ふ時怠惰心の起る頃吸一吸すれば精神愉快になつて又業に就くを得、心之れを欲すれば味噌の副食物も大なる功を奏し如何なる美肉も心之れを欲せざれば三文の價値あるものではない、又一つのものを食ひ續くれば心之れを厭ふであらう其厭ふ樣になつてうれでも矢張り身体に効あらうか、これは現今の學者でも否と云ふであらう、又悲哀憤怒が胸中に鬱勃たる時食事を取らねばならぬとて無理に食ふのと、歡樂愉快に滿ちてゐる時談笑しながら食ふのと其差果して幾何ぞや、故に心に從ふて食すれば衛生の道にも適ひ生理の法にも背かず、嗚呼心外無別法と云はねばならぬ。斯樣な譯であるから心配は生命を削る斧である快樂は長命の藥王である、否快樂と云ふよりも寧ろ平々淡々たる虛心がよ

いのである。然るに外出して歸つた後衣服に如何なる傳染病毒が着いてゐるかも知れぬ、魚の刺身を食ふ時に若しや黴菌が生とてはゐないか疊の上に手をついて疊の上は不潔なもの、嗚呼我手は汚れ湯水で洗はうか湯水は消毒の功はない、濃い石炭酸で洗はうか皮膚は腐蝕する、偖何うしたら善からうかなど思ひ續けて居たならば遂には精神病にもなるであろう、又華氏寒暖計二十度の時綿入二枚に羽織ッャッ襯着各一枚然らば華氏寒暖計二十三度になつたからシャッの厚さXを減さねばならぬ、外は寒の内よりも寒が強い同じ外でも時と處とに依て相違がある、故に何時も寒暖計を見ながら歩行し十歩乃至百歩毎に衣服の增減をせねばならと云ふ如き精密なる議論は到底實行出來るものでは無ぬい、故に心大に寒暖を感じたら衣服も之れに依て增減するが可い、些少の寒暖は心に依つて大抵は禦く事が出來る、心之れを欲して行へは寒中水垢離しても感冒に罹らぬけれど睡熟して居る人を素裸体となし理不盡に冷水を浴せかけたならば忽ち病氣になるであらう、已れ心之れを欲せぬからである、心なるかな心心に從ふより外に衛生の道はない。次に運動に就いて言はうか矢張り心に從はねばならぬ、心の欲せざる運動を叱咤的に行はしむれば疲勞を增すばかりで管に効なきのみならず却つて害がある、今や諸學校に課してゐる体操法の如きは或は規律正しと云ふ生徒の躾上には善いに相違なかろうが我が所謂衛生と云ふ点から考ふれは左程の益は無いと思ふ、何となれば一擧一動教師の小事を聽いて明日も明後日も變化の少ない面白みの無い事を繰り返す故である、されに反して或は山に登り或は谷に下り或は春花秋葉の林に散歩するが如きは心之れを樂しむから其筋肉に及ぼす効力も亦一通りでない、又彼の温泉浴や海水浴は如何と尋ぬるに取りも直さず心を樂ませる点が多いから從つて身体にも効あるので、若し之れを厭ふ心ある者に他から無制的に行はせたら効少く害の多いとは醫學社會にも認むる所ではないか、換言すれば温泉は大抵山水明媚の地に在りて浴者の心を樂しませ、海は固より廣大な景色目前に游泳者の心を喜ばしむるもの故うれで衛生上の効あるのである、其海水や温泉に含む礦物の成分に依つては左したる効力あるのではない、又沐浴して皮膚を清潔にすれば老廢物の排泄を盛にし体温の高低を調節するなど効能を過大に云ふけれど、老廢物の排泄体温の調節は沐浴をなさぬ人にも自然に行はれてゐるものであ

る、彼の蠻民を見給へ終生沐浴をせぬけれど皮膚の機能は十分強健である、要するに沐浴も亦心を樂ませる點が善いのである。此他目見て之れを面白がり耳聞いて之れを嬉しがり、嗅ひで喜び味はつて樂しみ觸れて快よくあつたならば皆々身体の藥である、我は若い時から此理を悟りすべて心を以て本とし心欲すれば食らひ心欲すれば遊び我心の欲する所にのみ從うてゐるのである、遙峰近岳何時も變らぬ形烟霞裏霧の映昏に變ずる樣を眺めながら古今東西の本を友とし、倦めば山上に登り溪流に臨み興至れば歌ふ、一杯の黎羹一枚の黑衣之れを樂しとしてゐるから能く消化吸收もし能く寒暄を防ぎもするのである、我が衛生法は之れより他にあるとなしこれ我の長命したる秘術である、これより將來尙幾十年の生命を保つかも知れぬ、然るに一般の生理衛生家は唯だ形体のみを知つて靈妙なる精神を知らぬ、又普通の人は五六十歳に達すれば早や老衰したなどゝ心細く感じてゐる、これ健康長命者の尠い所以である、嗚呼心なる哉心、天上天下唯我獨尊云々。」

と言葉終つて一腕の茶に喉を濕した、余は聽き終つて「偖なる哉貴僧の說、狹なる哉上人の論、余に余の生理衛生上から破らるは勿論佛道から論じても其偏狹を笑はねばならぬ、余は固より佛法に暗いけれど上人の論は佛法の所謂小乘で色即是空空即是色非有非空の中道たる佛法の所謂大乘の道で無いかと思はる。されば物に拘泥出來ぬのみならず心にも偏るべからず、成る程一般の生理學者は形にのみ走つて心を說かぬ缺きある身体を說かぬは五十歩百歩ではゐるまいか、夫れ心身は一つで心即是身身即是心と謂はねばならぬ、平たく言へば心ゐるが故に身体は活動す心無き身体は身体でない、熟々考ふれば心も身体の一つであつて身体を離れて心は獨往獨來するものでない、身体の快樂は心の快樂心の快樂は身体の快樂、身体の苦痛は心の苦痛心の苦痛は身体の苦痛である、故に一方にのみ偏したならば眞正の衛生法と謂ふを得ず、抑々人体の健否は一は先天的の性質にも依るけれど一は其鍛練に依つても大に變ずるものであるから眞に衛生を重んずるものは唯だ危險を避けて心の快樂を取るばかりでなく、却つて身体の苦痛をも自ら求めて苦痛に堪へらるゝ身体を練らねばならぬ、時には同に浴し風に櫛づる底の苦痛をも受ける稽古をなし時には勞働使役の艱難も熟練せねはならぬ、さうでないと僅かな寒熱困苦にも害を受

けてこれに堪へられぬようになる、貴僧の如く山中に籠つて風月を共とする世捨人ならばそれでも長命は保たれようが、南北氷洋の風に胸毛を吹かせ寒熱劇甚の大陸に頻繁なる事業を取らうといふ者には心に愉快ならざる衛生法も忍んで稽古せねばならぬ、心に愉快ならざる体操術も堪へて之れを行へば遂には愉快なる心を宿すに至る、眞生の衛生學者は寒暖計を携へて衣服の増減をせよといふ如き柔弱なる方法を說くものでは無い、彼の野蠻人が皮膚を不潔にして居ても强健なのは即ち自然々々は身來を鍛練した結果である、故に今其野蠻人をして清潔法を實行せしめても必ず病氣を招くものではないのみならず益々强健に趣くものである、貴僧の說に贊成するのは心配をせぬ工夫即ち成る可く心を愉快に有てといふ事である、これは從來の衛生學上にても說かぬではないが如何せん大抵の生理學者は心理學に暗く之れを重要視せぬのは遺憾である、故に余は長命の術は身心を訓練せよと言ふ一言に歸着するのである、上人如何思召すか。」と反問したけれ共老僧の委忽然として消え失せた一夜の夢物語。少しでも讀者諸君の參考にならば幸甚。

日記の一節（九月一日）　日後生

午前八時登校、今日は第二學期の始めの日である、同窓の友は皆壯健で大抵暑中休暇前よりも色の白かつた者も眞黑げな顏をして各々旅行の談などやつて居る、やがて集れの鈴が鳴ると一同一學年の教室に整列し久しぶりで（校長先生は御歸鄕になつてまだ御歸りにならぬ故）教頭米山先生の訓示を謹聽した、要は一層攝生に注意して健康を計り益々勉强せよとの事であつた、各級各々其教室を掃除しあとは隨意退散、時は丁度十一時であつた。（以上學校にて）

明日の學科の豫習をしまつて小丸山邊へ逍遙したが四方の景色と云ふたら實に樂てがたい眺めであつた、もうつと繪でも書けると寫生して見たい位である、家に歸つたら親友の所から手紙が來て居た、取る手遲しと開封……。

松と柳　仝

松＝＝毅然として嚴寒に耐へ鬱蒼として炎熱を拂ひ、始終其色を變せず能く節操に富ひ、宜なり祫を賞して樹中の君子となすや。吁樹木すら君子あり況んや萬物の靈たる人間に於てをや、豈鑑みざるべけんや。

霜雪にうたるゝとても變らざる
松の操ぞ譽れなりけり

柳＝＝艶妍たる嫩芽風雅なる枝葉其容姿女孃に類す、然りと雖とも强風烈しく吹き來るも搖々として爭はざるは讓の志を有し、青々として繁茂するも條々として垂るるは謙の風を保つに似たり嗚呼柳も亦一德を有する乎、現今青年社會此志風非常に衰頽す、豈鑑みると共に勉めざるべけんや、噫。

延るはせなをへりくだる青柳の
ぼうきすがたぞひともゆかしき

一意專念　仝

騷がしい世ならずや煩さき世ならずや、新しき出來事は刻々に生じ新しき誘惑は時々に生じ來るを見ずや、限りある頭腦限りある智慧を保てるわれ等遂に能く此の時々の誘惑に打ち勝ち刻々煩瑣の出來事に一々應じ得べけんや、夫れ二点間の最短距離は直線なり、人間の一生をうの最短距離に依りて歩まんとせばただ一直線に進むあるのみ、而して人間の一生を一直線に依つて進むべき出發点は生にして到着点は即ち死なり、生を出でゝ直に死に歸すこれ人間の一生を一直線に依つて進みしものなり、しかも之れ最も無意味なる人間の一生なり、何を以て無意味なりといふ、人間此世に生るゝ各自一個の使命を持して此世に生るゝなり、この使命の債未だ果されざるに其生死を苟くもするはこれ自ら人間を蔑視するものなり、世には往々にして人間の一生を一直線に最短距離に依りて進むものあり、即ち自ら人間を蔑視し各自の使命未だ果されざるに生死を苟くもするものなり、されど自らを持すること輕忽にして生と死とを見ること其だ重からざるの責に於いては即ち同じ、說いていふものあり人間の一生に二箇の大なる出來事あり其の一つは生にしてその他は死なりと。然り生と死とは人間一生に於ける二個の大なる出來事なるべし、されども生と死とが人間一生の大なる出來事なるべき所以のものは生死の間に繫がるゝところの意味極めて重く極めて大なればなり、即ち生より死に至る間に於て人間の此の世に處すべき使命極めて重且つ大なるものなればなり、されば生死を蔑視するものは取りも直さず人間の使命を蔑視するものなり、果して然らば人間の使命とは何ぞや。人間此の世に生るゝとうの分に應じ各自一個人として其の自らの本分とする所に向ひ一意專念以つて進む所なからざるべか

らずこれ其使命の一なり、人間此の世に生るゝ決して單獨なる事能はず必ずや相關係するところあり、即ち人間として此の世に立つと共に自己以外に關係する所のものなかるべからず、即はち父母あるべし兄弟姉妹あるべし大にしては自己と國家と繼がるゝところあるべし、されば人間は自己の本分とするところに一意專念するとともにこれ等相關する所に向ひても夫れ々々忠恕ならざるべからずこれ其使命の二なり、その他尙あるべきも重且つ大なるものは即はち以上二大使命なるべし、この二大使命は繋つて人間生死の間にかゝはる、これ生と死との人間一生にとり二個の大なる出來事なる所以にして、而かもかゝる絶對相對あらゆる關係によりて生より死に至る人間の徑路に位煩瑣多樣の出來事を生じ誘惑生じうの限りある頭腦と智慧とは時々刻々煩はさるゝところとなる、然りと雖も退いて思へばかゝる煩瑣多樣の出來事と誘惑とは人間の試金石なり。彼の銀難汝を玉にすと云へる亦た此意味に依つてなり、然かも一意專念するにあらざるよりは人間は遂に此煩瑣の多事に對して試金石たるに堪ゆる能はざるなり、彼の人間を蔑視し人間の使命を蔑視し生命を視ること輕忽なるものに對しては生死遂に人間の二大出來事とするに足らぬとともに、彼等は生死の間を完全に直線に歩めるものとはいふべからざるや論なきなり。

雜報

木曾山林學校第二回卒業證書授與式

去る三月二十四日午前第九時生徒職員來賓一同着席の上、君が代を合奏し、校長勅語の捧讀あり、來山教諭の學年報告あり、續て證書及賞品の授與を終り、校長及び手塚教諭の餞辞、並に來賓の祝辞、生徒總代の答辞にて午前十一時全く式を終りたり、今茲に今回卒業せし生徒三十四名の族籍氏名を左に掲ぐ。

身長　㎝

岐阜縣　西尾忠治　山口縣　武久眞一
鳩根縣　鵜飼政義　石川縣　川岸滋次郎
長野縣　平野正平　長野縣　林卓二
石川縣　乙谷耕吉　石川縣　岡田直一
鳩根縣　遠藤治一郎　石川縣　前勇次郎
長野縣　丸山春

長野縣　平澤政吉　長野縣　坂本忠治
長野縣　正又實次郎　長野縣　林與五郎
長野縣　杉本貫　長野縣　中澤龜吉
長野縣　大熊俊彦　長野縣　南村末吉
石川縣　木下清　長野縣　藤原周紫
長野縣　大鵜又衛　岐阜縣　岩久宗治
長野縣　木村鉦次郎　長野縣　中嶋源一郎
長野縣　原傳　長野縣　奥牧金次郎
長野縣　下條初太郎　長野縣　柳澤邦信
石川縣　温井誠一　長野縣　松井定道
長野縣　蜂谷光香　長野縣　倉澤眞

因に記す今回の卒業生中既に各地の招聘に應じて本月末を以て右任地に越くもの多く、其待遇は何れも十五圓以上二十五圓以内なり、尙其明細は次の如し。

甲種本曾山林學校第二期卒業生方向調　明治三十八年拾月調

任地	俸給	賞格	本籍	氏名
長野縣	月俸　拾五圓	縣定長榮賞	長野縣	杉本貫
仝	拾貳圓	松本藩立賞	仝	林與五郎
群馬縣	仝　貳拾圓	縣賞	仝	大熊俊彦
滋賀縣	仝　拾八圓	林業技師員	島根縣	遠藤治一郎
新潟縣	甲種農林學校	仝	貳拾圓	助手	石川縣	川岸滋次郎
---	---	---	---	---	---	---
愛知縣立	砂利局水管支廳	仝	拾貳圓	雇	長野縣	丸山春
仝	伐木所	仝	拾貳圓	能登郡書記	鳩根縣	鵜飼政義
鳥根縣		仝	拾五圓	第三部雇	長野縣	平野正平
鳥根縣		仝	拾貳圓	調度課勤務	仝	平澤正吉
岐阜縣足尾銅山		月手當拾貳圓	調度課勤務	仝	岐木忠治
長野大林區署		月俸	拾貳圓	本雇	仝	木村鉦次郎
三重縣		仝	拾參圓	雇	仝	原傳
長野大林區署		仝	拾圓	雇	仝	下條初太郎
岐阜縣足尾銅山		月手當拾貳圓	調度課勤務	仝	温井誠一
石川縣		月俸	拾五圓	羽咋郡林業巡回教師	石川縣	西尾忠治
福島縣		仝	參拾圓	三次巡行員	長野縣	岐阜縣
愛媛縣兵站兵		仝	拾圓	縣林主事	仝	山口縣
一年志願兵站兵		仝	拾圓	仝	仝	武久眞一
仝格		仝	拾圓	仝	仝	石川縣
仝（兵種不明）		仝	拾貳圓	仝	仝	乙谷耕吉
鎮州安東縣		月俸	參拾圓	三次巡行員	長野縣	南勇次郎
在宅實業三從事		仝	拾圓	縣林主事	仝	柳澤邦信
高知大林區署		仝	拾圓	仝	仝	松井定道
仝		仝	拾貳圓	仝	仝	正又實次郎
長野大林區署		仝	拾貳圓	仝	仝	南村末吉
御料局交渉中		仝	拾貳圓	仝	仝	藤原周紫
同修學ノ爲ニ上京		仝	拾貳圓	仝	仝	大鵜又衛
		仝	拾貳圓	仝	仝	加藤純一

仝			仝	中澤 龜吉
仝			岐阜縣	岩久 宗治
高等農林學校入學準備ノ爲上京修學			長野縣	蜂谷 光香
長野縣	日給參拾五錢	福島縣殷苗圃監守	仝	林 卓次
東京農科大學林學部	月俸拾貳圓	雇員	石川縣	岡田 直一
石川縣		郡吏員	仝	木下 清
在宅實業ニ從事			長野縣	中島源一郎
仝			仝	奥牧金次郎
仝			仝	倉澤 眞

第一回卒業生諸氏の其后の狀況

第一回即ち去廿七年度卒業生諸君の狀況は前號に其一般を報じたるが、其後稍々變動せる所あるを以て更に最近の狀況を次に錄する事とせり。

甲種木曾山林學校第一期卒業生方向調（明治三拾八年拾一月調）

任地	俸給	資格	本籍	族籍	氏名
東京府林業事務所	月俸拾七圓	仝所書記兼森林監守	長野縣	士族	遠藤 宗作
兵庫縣立有馬農林學校	仝 貳拾圓	敎諭	仝	仝	齋藤 正端
山梨縣廳	仝 拾六圓	仝縣林業手	仝	仝	興戸 廣治
農科大學	仝 拾貳圓	仝大學林學科雇	仝	平民	高橋 博
長野大林區署飯山小林區署	仝 拾五圓	森林主事	仝	仝	宮下 作治（入營）
農科大學	仝 拾貳圓	雇	石川縣	仝	小瀧 絆太郎
盛岡高等農林學校入學志望ノ爲メ上京現在東京正則英語學校（正則豫備校）			長野縣	仝	輪湖 正由
長野大林區署長野小林區署	月俸拾五圓	森林主事	仝	仝	中村 豐治
長野大林區署上田小林區署	仝 拾七圓	森林主事	仝	仝	三澤 義治
實業ニ就ク			仝	仝	林 哲治
麑島大林區署高城小林區署	月俸拾八圓	森林主事	鳥取縣	仝	坪倉藤三郎
廣島大林區署	仝 拾四圓	仝署雇	長野縣	仝	森 正治
山梨縣廳	仝 拾六圓	仝縣林業手	仝	士族	近藤 昌平
麑島縣熊毛郡立農林學校	仝 貳拾圓	敎諭	仝	平民	園原 咲也
廣島大林區署廿日市小林區署	仝 拾五圓	森林主事	鳥取縣	仝	青戸 爲九郎（戰死）
靜岡縣富士郡林業講習所	仝 貳拾圓	敎諭	長野縣	仝	中村 俊
山梨縣廳	仝 拾六圓	仝縣林業手	仝	仝	原 四郎
東京大林區署	仝 拾貳圓	雇	仝	仝	寺島 恒治
御料局木曾支廳王瀧出張所	仝 拾參圓	雇	仝	士族	大森 久治
石川縣廳	仝 拾參圓	仝縣林務手	石川縣	平民	細田友次郎（現役召集）
長野大林區署岩村田小林區署	仝 拾五圓	森林主事	長野縣	士族	伊東 兵太
三重縣尾鷲實業補習學校	仝 拾五圓	敎員	仝	平民	細井 利吉
麑嶋大林區署	仝 拾五圓	雇	仝	仝	古根 是
長野大林區署上田小林區署	仝 拾四圓	森林主事	仝	仝	見野 榮
麑嶋大林區署	仝 拾五圓	仝署雇	仝	仝	征矢野寛巳
長野大林區署岩村田小林區署	仝 拾五圓	森林主事	仝	仝	小松 橘内
臺灣總督府專賣局	仝 貳拾五圓	仝局技手	仝	仝	松原 三郎
在宅實業ニツク			仝	仝	原庄 次郎

合計二十八人

諏訪中學生無錢旅行

諏訪中學四學年生伊藤一郎仝花岡和夫三學年生小坂正晴二學年生味澤定義仝花岡芳樹の五氏無錢旅行を企て、九月二十八日午後五時頃諏訪を發し同夜鹽尻に一泊、廿九日鹽尻發仝夜八時頃本校に來り、偶々百瀨敎諭舍監の宿直にて仝夜舍監室に宿し、翌三十日寢覺の床を見物し其れより引き返へし權兵衛峠を越へ上伊那郡坂下町泊一日歸諏の豫定なりと云ふ、休業日を利用しかゝる儉約旅行を企つるは頗る快心の事にして修養上得る所少なからざるべし。

寄宿舍だより

寄宿舍は學校に於ける大勢力の一なり、されば學校を觀察し改善せんとする者は先づ其寄宿舍を觀察し改善せざるべからず、左に吾が校當時の寄宿舍につきて多少語らんと欲す、寄宿舍は都合二棟より成りて東西に位す、舍生は大凡七十名位なり、毎月二十日乃至二十五日に五十錢を寄宿舍料として郡役所に納め、食費は一ヶ月大凡四圓五十錢にして前月末日に舍監之れを徵收す、各室毎に室長一名を定め以て諸務を辨せしむ、毎土曜日の夜は午後五時半より同八時五十分迄外出を許されありて平日の鬱を散ず、土日の兩曜日は歸省し得れども平日は保證人の證明書無くては許されず。日々日課あり孜々勵行して敢て反せず其時間割表は

午前の部

五時半……………起床
六時……………人員檢査
六時半……………朝飯
十二時……………晝飯

午後の部

三時より五時二十分迄……外出時間
三時より五時二十分迄……入浴時間
五時半――……夕飯

五時半……閉門
七時より八時半迄……自修
九時……人員檢査
九時半……消燈

にして舍内常に靜肅、殊に自修時間の如きは殆んど人ありや否やを疑はしむ、起床ベル鳴るや否や直ちに床を去る、程なくして再びベルを聞くや直ちに各室前に整列して人員檢査を受く、朝飯を喫し登校の用意なす、放課後は或者は外出し或者は運動し後入浴に終日の勞を洗ひ以て心地よく夕食を終る、再ひ運動場に出づる者あり又机に向ふものもあり。

自修終りて夜の人員檢査を爲し直ちに就寢し間もなくして消燈に至るべし。

今日斯くの如くにして明日も亦然り、然れども一人として怠るなし、嗚呼現代の寄宿舍や制度完美して德風舍に滿つ、誠に一つの良家庭ならずや。

校友會彙報

校友會例會記事

第十二回通常例會　明治卅六年十月十八日、日曜日、午前八時開會す出席會員九十六名なり、本日は第一學年の修學旅行談を主とし左の諸氏の演說ありたり。

一、壹學年修學旅行阿寺伐本事業に就きて　山下　藤一
二、仝　春原善太郎
三、暑中休暇の話　後町金太郎
四、飯省に就きての所感　武久　貞一
五、北山丸太に就きて　齊藤　正雄

右終りて十一時二十分閉會す。

第十三回通常例會　仝十一月廿二日、日曜日、午前九時開會す出席會員百二名左の諸氏の演說あり。

一、人生の行路　寺島　恒治
二、害虫驅除に付て　小松　精円
三、苗圃に就きて　大森　久治
四、故鄕の山林の有樣　山下　常紀
五、農業に就きて　百瀨　榮
六、耶馬溪の話　喜多代慶治
七、石川縣の山林に就き　宮崎清太郎
八、森林と魚業との關係　三原　昇
九、人生の生活に就きて　杉本　貢

頗る盛會にして十一時三十分閉會す。

第十四回通常例會　仝十二月二十日、日曜日、午前九時開會す出席八十九名左の諸氏の演說ありき。

一、八尾山國有林に就きて　遠藤　宗作
二、造林に就て　千村　重喜
三、御嶽山麓農家の主人と語る　加藤十七三
四、堺水族館魚族の說明　岡戸　廣治
五、水無神社近傍の三本松の由來　宮田　實
六、運動と健康　杉本　純平
七、松煙製造に就て　永瀨　豐治
八、健康に就きて　平田　稻男
九、造林の目的　代田善次郎
十、木曾の森林　宮下　信一
十一、燐寸製造所に就きて　福井　利吉
十二、奈良公園の林相に就きて　林　哲治

終りて閉會す時に正午なりき

第十五回通常例會　明治卅七年五月八日、日曜日、午前九時開會す、本日は指命者なき故に希望演說者も少く、依て職員よりも演說ありたり。

一、校友會の有樣　杉本　貢
二、種々に就て　米山　敎諭
三、生徒の心得に就きて　百瀨　敎諭

今日の出席者八十六名十一時閉會す。

第十六回通常例會　仝十月十六日、日曜日、午前九時開會す出席會員……左の諸氏の演說あり。

一、三學年修學旅行に付き學校出發より鹽尻、甲斐國甲府を經て伊豆國修善寺に至る迄の事に就きての概畧　杉本　貢
二、修善寺より東京及房州淸澄山へ行きうれより歸校迄の大畧　丸山　春

右終りて十一時四十分閉會す。

第十七回通常例會　仝十一月十三日、日曜日、午前九時開會す、出席會員七十八名左の諸氏の修學旅行談ありたり。

一、二學年修學旅行に付學校出發より奈川、島々を經て長野着迄　岡田彌兵衛
二、長野より直江津着迄　小林桂一郎
三、直江津より着校迄　後町金太郎

第十八回通常例會　仝十二月十一日、日曜日、午前九時開會す出席會員五十名、米山副會長開會の旨を述べ松田會長より今回新たに就任したる副會長及び幹事の報告あり、續きて手塚幹事長より會務の報告あり、夫れより會員諸氏の演說ありき。

一、佐渡山林及竹林の狀況並に鑛山に就きて　柳澤　熊治

二、佐渡旅行中信濃川沿岸の飛砂の害及び砂防工事其他に就て　清澤末已衛

新任副會長及び幹事

新任副會長　米山太郎吉

新任幹事　武久　貞一

仝　中澤　龜吉

仝　鵜殿　正雄

仝　岡田彌兵衛

仝　竹內　茂

仝　太田喜代松

以上終りて閉會す。

第十九回通常例會　明治三十八年一月廿九日、日曜日、午前九時開會す出席者八十一名、今回は出征中病氣に罹りて歸郷療養中なる水野末代吉及若村寅太郎の兩氏に聘して日露實戰談を聞き正午過ぎ閉會す。

日露實戰談

第二軍と陸の光景より金洲攻撃、南山の占領等一々地圖によりて其戰況を語られ、出征軍人諸氏の苦痛慘憺勇壯活潑の狀況恰も聽くものをして身戰場にあらしむるの想あらしめ、得る所誠に掛少にあらざりき。

如上の如くして時間は經過したるにより、通常會員の談話演說は何れも次回に於てなすことゝせり。

第二十回通常例會　二月十九日、日曜日、午前九時開會す出席者六十名左の諸氏の演說ありたり

一、戰捷後に於ける我が國の經營　溫井　誠一

二、愛國心　竹內　茂

三、經木眞田並びに西筑摩郡に於ける當綠濕葉城に付きて　手塚　先生

右終りて先に出征せられし會員よりの通信數通を朗讀して閉會せり、時に十一時四十分。

十年の苦鳥毛の無き毛布かな　子規

會員人簿名

通常會員

明治三十七年度卒業生

長野縣西筑摩郡福島町　遠藤宗作
仝　仝　岡戸廣治
仝　仝　宮下作治
仝　仝　森　正治
仝　仝　近藤晶平
仝　仝　大森久治
仝　仝　原　庄次郎
仝　仝　伊藤兵太
仝　仝　兒野榮
仝　仝　大桑村　高地博
仝　仝　古根　是
仝　仝　福井利吉
仝　仝　讀書村
仝　仝　松原三郎
仝　仝　田立村　林　菅治
仝　仝　山口村　圍原咲也
仝　仝　三岳村　原　四郎
仝　仝　開田村　中村　茂
仝　仝　長野縣西筑摩郡日義村　征矢野克巳
仝　仝　木曾村　寺嶋恒治
仝　仝　更級郡　入倉村　永瀨豐治
仝　仝　南安曇郡穂高村　齋藤正雄
仝　仝　東筑摩郡廣丘村　輪湖正由
石川縣羽咋郡鹿野村　三澤義治
仝　仝　北邑知村　小松精內
鳥取縣日野郡山上村　小澤升太郎
仝　仝　明治三十八年度卒業生　稻田友次郎
長野縣西筑摩郡福島町　坪倉藤三郎
仝　仝　靜坂村　青戸爲九郎
仝　仝　讀書村　林　卓二
仝　仝　大桑村　下條初太郎
仝　仝　檜川村　蜂谷光香
仝　仝　大島又衛
仝　仝　坂本忠次
仝　仝　木村鐵次郎
仝　仝　野尻慶造
仝　仝　平野正平
仝　仝　倉澤　眞

仝	三岳村	正又實次郎	仝　蛭川村
仝	仝	奥牧金次郎	仝　坂本村
仝	仝	南村末吉	山口縣豐浦郡粟野村
仝	玉瀧村	杉本貫	嶋根縣能義郡廣瀬町
仝	仝	平澤政吉	仝　母里村
仝	田立村	林與五郎	長野縣更級郡榮村
仝	吾妻村	松井定道	參學年
仝	駒ヶ根村	中澤龜吉	長野縣西筑摩郡福島町
仝	東筑摩郡片丘村	大熊俊彦	仝　仝
仝	仝	丸山春	仝　仝
仝	仝	中島源一郎	仝　仝
仝	松本町	藤原周紫	仝　仝
仝	南安曇郡安曇村	加藤純一	仝　仝
仝	上水内郡長野市	原傳	仝　仝
石川縣羽咋郡河合谷村		岡田直一	仝　仝
仝	仝	川岸滋次郎	仝　吾妻村
仝	堀松村	南勇次郎	仝　仝
仝	加茂村	溫井誠一	仝　讀書村
仝	球洲郡正院村	二谷耕吉	仝　大桑村
仝	東若山村	木下清	仝　日義村
岐阜縣惠那郡武並村		西尾忠治	仝　木祖村

志津辨次郎	加藤十七三	肥田幸一郎	河島正巳
岩久宗治	千村重喜	水野忠一	古畑金藏
武久貞一	前野慶治	木村乙次郎	鵜殿正雄
鵜飼正義	杉本純平	由雄忠助	小林桂一郎
遠藤治一郎	三宅周吉	新井喜多雄	春原善太郎
柳澤邦信	宮田實	澤田眞次郎	後町金太郎
	宮下信一	三原昇	北原利雄
	下畑德十	寺嶋俊一	柳澤熊治
	代田善次郎	武居文作	清澤己禾衛
	櫻井銀三郎	上條嘉一郎	岡田彌兵衛
	松原秀吉	平田稻男	寺尾敬二
	野知里慶助	大島角造	但馬廣造
	池井深一	赤岩藤太郎	小藤作四郎
	寺嶋正治	武井俊一	宮森太一郎
		永田精一郎	宮崎清太郎
		西之入德	山下藤一
		和田宗吉	山下常記
		宮崎源一郎	戸田績
		宮崎二郎	
		中嶋昌利	
		矢島駒二	

仝	檜川村	仝	仝
仝	仝	仝	仝
仝	小縣郡長瀨村	仝	仝
仝	仝	仝	仝
仝	泉田村	仝	仝
仝	豐田村	仝	仝
仝	諏訪郡中洲村	仝	仝
仝	下伊那郡上郷村	仝	仝
仝	更級郡榮村	仝	仝
仝	南安曇郡穗高村	仝	仝
石川縣羽咋郡西土田村		仝	仝
仝	加茂村	仝	仝
仝	北志雄村	仝	仝
仝	北邑知村	仝	仝
仝	鹿島郡京港村	仝	仝
仝	河北郡金津谷村	仝	仝
鹿兒島縣川邊郡西加世田村		仝	仝
熊本縣菊池郡龍門村		仝	仝
岡山縣眞庭郡富山村		仝	仝
貳學年		仝	仝
長野縣西筑摩郡福島町		仝	上水内那三水村
仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝

仝　埴科郡　森　村　　竹内　茂　　湯川寛一
仝　南佐久郡大澤村　　市川　潔　　松原茂樹
仝縣　下伊那郡山本村　　肥後金西郎　　樋口　勇
仝　北安曇郡常盤村　　太田喜代松　　北川信美
仝　下伊那郡朝日村　　有賀　昇　　山下廣治
石川縣羽咋郡　高濱町　　竹内房太郎　　越田直人
仝　仝　南邑知村　　永野謹一郎　　小池新伍
岐阜縣本巣郡　穂積村　　廣瀬静之進　　北林　武
愛知縣東加茂郡生駒村　　小澤　順　　松下源吾
福岡縣築五郡酉吉富村　　喜多代慶治　　久保田傳一郎

壹　學　年

長野縣西筑摩郡福嶋町　　山村治一　　小島林三
仝　仝　　林　省三　　唐澤勇作
仝　仝　　千村善三　　横山治人
仝　仝　　原田英二　　曾根原重平
仝　仝　　岡戸都二　　小林　彪
仝　仝　　津田新七　　池田藤三郎
仝　仝　日義村　　大脇重作　　關　寅松
仝　仝　　今井健治　　小山田喜十郎
仝　仝　　淺邊仁右衛門　　宮嶋惠喜太
仝　仝　　奥原吉右衛門　　塚原信雄
仝　仝　木曽村　　仲俣伍郎

仝　仝　三輪村　　霜田時三郎
仝　上高井郡山田村　　水橋要作
仝　仝　小布施村　　櫻井　忠
仝　埴科郡　松代町　　金井澄水
仝　仝　五加村　　溯立　實
仝　南佐久郡小海村　　武川保平
仝　仝　穂積村　　高見澤政次郎
仝　北安曇郡　大町　　倉科浦一郎
仝　仝　常盤村　　藤卷壽一
仝　下水内郡秋津村　　松澤萬吉
仝　上伊那郡飯嶋村　　鹽澤英一
愛知縣葉栗郡　瑞穂村　　脇田義正
仝　東加茂郡伊勢神村　　安藤考一
仝　中島郡　開明村　　田中鳥太郎
石川縣羽咋郡　志雄村　　宮城忠藏
鹿兒嶋縣熊毛郡北種子村　　柳田麟江
岐阜縣惠那郡　落合村　　上田銘二
山形縣北村山郡大高根村　　高橋金作

會員消息

○特別會員手塚長十氏

久しく木曾山林學校に教鞭をとられ熱心子弟の薫陶に從事せられし本會幹事長たりし氏は今回突然教職を辭し滿韓の利源拓開に從事せらる、幸ひに健全にして邦家前途の爲め御盡粹あらん事を祈る、而して今氏の消息は詳かに傳へられざれども、去る月廿四日韓國城津に無事着せりと、

○仝丸山春氏

本年三月螢雪の功なりて當校を卒業し西筑摩郡闇伐木事業所に勤務中、氏の着實溫厚にして勤勉なるの令名近村に傳はり、讀書村長勝野寛輔氏に乞はれて同氏の令嬢鈴江子と燁燭の奥を擧げられたり、目出度しとも目出度し。

○仝柳澤邦信氏

丸山君と同樣本年三月當校を卒業して志を海外に立て滿洲安東縣三友洋行に入りて將來大に發展せんとするの礎地を作られつゝあり、君幸に健在なり、日露戰役平和を告げ滿韓の野開拓すべきの遺利あり、此時に當て本會員二名の此地に行かる、吾人は赤誠を以て両氏の前途に於ける成功を祈らざるべからず。

○西尾忠治君武久貞一君の両氏は今回右の所へ入營せられたり

第九師團金澤輜重兵補充大隊　西尾　忠治
下ノ關要塞砲兵聯隊第四中隊　武久　貞一

○中村茂氏

君は客年招集に應じて習志野に軍務中滿洲に出陣して勇敢に軍務に服しつゝありしが、敵騎の襲ふ所となりて名譽の戰死を遂げたり、而して去る五月八日葬儀執行につき本會より副會長米山太郎吉會葬せり。

○征矢野茂樹氏

本會特別會員同氏は義きは召集に應じて第一師團勤務中近衛騎兵聯隊に轉じ、其後樺太に出征し戰功空しからずして特務曹長に昇任し、平和克復を告ぐるに及びて內地に凱旋せられ、目下福岡縣企救郡大里臨事陸軍檢疫所內近衛師團第十三補助輸卒隊にありて專ら檢疫事務に從事せられつゝあり。

山林學校學則改訂

我校にては本年六月其筋の認可を經て其學則を改訂せり、而して其改訂の主なる点は(一)在來の二學期制を三學期とせる事。(二)暑中休みを減して年始年末休暇を多くせる事。(三)新に第四章を設けて實習及修學旅行に關する規定を加へたる事。(四)第七章成蹟考査に於て多くの改訂を施したる事。(五)學科程度授業時間數等の增減を行ひたる等なり。今左に改訂學則全部を掲載すべし。

長野縣西筑摩郡立甲種木曾山林學校學則

第壹章　總　則

第一條　本校ハ農業學校規程甲種程度ニ基ツキ森林ニ關スル學理實習ヲ授クルヲ以テ目的トス

第二條　修業年限ハ三ケ年トス

第三條　生徒ノ定員ハ百五拾名トス

第貳章　學年及學期　採業日數及休業日

第四條　學年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三拾一日ニ終ル

第五條　學年ヲ分チテ左ノ三學期トス

第一學期　自　四月一日　至　七月廿一日

第貳學期　自　八月一日　至　十二月廿一日

第三學期　自　一月一日　至　三月廿一日

第六條　授業週數ハ每學年四拾週以上トス其細別左ノ如シ

授業週數　三拾六週
實習週數　四週（以上）計四拾週以上

第七條　休業日ヲ定ムルコト左ノ如シ

但シ臨時必要アル時ハ監督官廳ノ許可ヲ得テ臨時休業ヲナスコトアルベシ

一　大祭日及祝日
一　日曜日　但シ實習期ニ於ケル日曜日ハ休業セサルコトアルベシ
一　開校紀念日　毎年五月拾五日
一　學年末休業日　一週間
一　夏季休業　自　八月一日　至　八月廿一日
一　冬季休業　自　拾貳月廿六日　至　一月拾八日

前項休業中實習又ハ修學旅行ヲナサシムルコトアルベシ

第參章　學科課程及每週教授時數

第八條　學科目及程度並ニ每週教授時數ハ別表ノ如シ

第四章　實習及修學旅行

第九條　實習ハ林業農業及ビ測量科ニ之ヲ課スルモノトス

第拾條　實習ヲ分ツテ定期實習及臨時實習ノ貳種トス

第拾一條　實習ハ正課時間ヲ以テ之ニ充ツルコトアルヘシ又正課時間以外ニ於テ之ヲ課スルコトアルヘシ

第拾貳條　第貳學年及第三學年ニハ學術實地指導ノ爲メ修學旅行ヲ課シ林業ニ關スル各般ノ觀察ヲナサシム

但シ旅行ノ日數ハ第貳學年ハ約貳週間第三學年ハ約三週間トス

第拾參條　本校ニ於テハ殊ニ修學旅行ニ重キヲ置クヲ以テ生徒各自ノ都合ニヨリテ之ヲ免ルヽコトヲ得ズ

第五章　入學及退學

第拾四條　生徒入學ノ期ハ學年ノ始メトシ募集人員及ビ必要ノ事項ハ其都度之ヲ公布ス

但シ時宜ニ依リ臨時ニ入學ヲ許スコトアルヘシ

第拾五條　第一學年ノ入學志願者ハ左ノ資格ヲ具フルモノタルヘシ

一　年齡滿拾四年以上ノ男子ニシテ其學力、修業年限四ケ年ノ高等小學校卒業、及ヒ中學校第貳學年以上修業、若シクハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノ
二　身体强健ニシテ規程ノ課程ヲ修ムルニ耐フルモノ
三　品行方正ニシテ林業ニ從事セントスルノ志望確實ナルモノ
四　在學中所要ノ學費ヲ辨シ得ルモノ

第十六條　入學志願者ニシテ前條第一項前段及ヒ中段ノ卒業者シクハ修業證書ヲ有シ且全條第貳項以下ノ資格ヲ具フルモノハ無試驗檢定ヲ以テ入學ヲ許シ其他ノモノニアツテハ入學試驗ヲ行フ、若シ入學志願者募集人員ニ超過スル時ハ應募者全体ニ就キテ學力ノ試驗檢定ヲ行フモノトス

但シ入學志願者ノ學力檢定ハ修業年限四ケ年ノ高等小學校卒業ノ程度ニ於テ國語算術地理日本歷史理科ニ就キ之ヲ行フ

第拾七條　入學志願者ハ左ノ書式ニヨリ入學願書履歷書及身体檢査書ヲ出スヘシ

入學願書（用紙美濃紙）　某　儀

御校ハ入學志願ニ付御許可致成下度履歷書及身体檢査書相

證此段願上候也

何府縣何郡市町村何番地居住
（寄留ナレバ寄留地ヲモ記入スヘシ）
何府縣華士族平民誰子弟等　入學志願者　何　某
年　月　日
仝　上　何　某㊞
仝　上　何　某㊞
右父母後見人

長野縣西筑摩郡立甲種木曾山林學校長氏名殿

履歴書

本籍　何府縣何郡市町村番地族籍誰子弟又ハ戸主
寄留地　何府縣何郡市町村番地　何　某㊞　年生月日

學業

一　何年何月ヨリ何學校ニ於テ何科何學年ノ教科ヲ修業若シクハ卒業
（証書ノ寫シヲ添フヘシ）

賞罰

一　何年何月ヨリ何年何月迄何處何某ニ就キ何學修業等

一　何年何月何處ニ於テ何事ニ付賞、若クハ罰ヲ受ケシ等

右之通リ相違無之候也

年　月　日

身体検査書

本籍　何府縣族籍
寄留地　何府縣何郡市町村番地　何　某　生年月日

一　体格
一　身長
一　胸囲（常時／充盈／空虚）
一　体重
一　視力
一　痘　天然痘若クハ種痘　何病院長或ハ開業醫　何　某㊞

第拾八條　入學許可ヲ得タルモノハ保證人貳名（内一名ハ學校所在地ニ居住ノモノ）ヲ定メ入學後貳週間以内ニ左式ノ誓約書ヲ差出スヘシ

相當收入印紙貼用

誓約書（用紙美濃紙）

某、本人ノ名儀入學御許可相成候ニ付テハ御校則堅ク相守リ會令教訓ニ從ヒ勤學可仕候依テ誓約如件

何府縣何郡市町村何番地居住
族籍誰子弟又ハ戸主等
年　月　日　本人　氏　名㊞

前文何誰在學中ニ係ル一切ノ事件ハ連署者共ニ於テ引受申ヘク候也

何府縣何市町村何番地居住
族籍戸主　保證人　氏　名㊞　生年月日
仝　保證人　氏　名㊞　生年月日
仝　保證人　氏　名㊞　生年月日

長野縣西筑摩郡立甲種木曾山林學校長氏名殿

第拾九條　保證人ハ丁年以上ノ男子ニシテ相當ノ家計ヲ立テ在學ニ關スル一切ノ事件ヲ引キ受ケ得ヘキモノタルヘシ

第貳拾條　保証人ハ本校ニ於テ必要ト認ムル時ハ之ヲ換ヘシムルコトアルヘシ

第貳拾壹條　保證人ニ異動ヲ生タル時ハ更ニ第拾八條ノ手續ヲナスヘシ

第二十貳條　本人及保證人改氏名改印若クハ保證人ノ住所ニ異動ヲ生スル等ノ事アリタルトキハ其旨速ニ本校ニ屆出ヘシ

第二十三條　學校長ハ左ノ各項ノ一ニ該當スルモノニハ退學ヲ命スルモノトス

一　性行不良ニシテ改善ノ見込ミナシト認メタルモノ
二　學力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者
三　引續キ一ケ年以上缺席シタル者
四　正當ノ事由ナクシテ引續キ一ケ月以上缺席シタルモノ

第二十四條　生徒病氣又ハ己ヲ得サル事故アリテ中途ニ退學セントスル者ハ其事由ヲ具シ父兄若クハ後見人及保證人連署ヲ以テ學校長ニ出願スヘシ
但シ病氣ニテ退學出願ノ者ハ醫師ノ診斷書ヲ添フヘシ

第二十五條　本校生徒ノ修守實踐スヘキ要項左ノ如シ

第六章　生徒心得

一　勢實ニ關スル勤勉ノ聖旨ヲ奉體シ常ニ實踐躬行ヲ勵ムヘシ
一　校規ヲ遵守シ師長ヲ尊敬シ其教誨訓諭ニ服從スヘシ
一　學業ニ懇勵シ勞働ヲ厭ハス常ニ實事ヲ旨トシ攝生ニ注意スヘシ
一　信義ヲ守リ廉恥ヲ重シ禮節ヲ慎ミ誠實ヲ旨トシ温良ノ德ヲ養ハンコトヲ努ムヘシ

第二十六條　生徒心得ニ關スル細則ハ學校長別ニ之ヲ定ム

第七章　成績考査

第二十七條　生徒ノ成績考査ハ學科及ヒ實習ニ就テ之ヲ行フ

第二十八條　各學期末ノ學科成績ハ日課臨時試驗及學期試驗ニ依リテ之ヲ定ム

第二十九條　實習ノ成績ハ其巧拙勤惰等ヲ考量シテ每學年末ニ之ヲ定ム
但シ實習ハ各種類ニヨリテ考量シタル成績ヲ平均シタルモノヲ以テ成績トス

第三拾條　學科及實習ノ評点ハ各一百点ヲ以テ定点トス

第三十一條　各學年進級ノ成績ハ各學期ニ於ケル各學科成績ノ平均点及ヒ實習ノ得点ニヨリテ之ヲ考査シ實習科評点ハ六拾点以上

學科ハ五拾点以上総平均点六拾点以上ヲ得タル者ヲ及第トス

第三十二條　卒業ノ成蹟ハ三學年間ノ進級成蹟ノ総平均点ヲ更ニ平均シタルモノヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條　成蹟考査ニ關スル内規ハ學校長別ニ之ヲ定ム

第三十四條　第一、第弐學年ノ課程ヲ修了シタルモノ及ニ本校課程ヲ卒業シタルモノニハ左式ノ証書ヲ附與ス

（第一、第二學年修了者ニ與フル者）

修業證書

族籍

氏　名

生年月日

右ハ本校第何學年ノ課程ヲ修了シタルコトヲ證ス

年　月　日

校印

長野縣西筑摩郡立甲種木曾山林學校

割印　番號

（卒業生ニ與フルモノ）

卒業證書

族籍

氏　名

生年月日

右ハ本校規定ノ課程ヲ履修シ眞業ヲ了ヘタリ依リテ茲ニ之ヲ證ス

年　月　日

校印

長野縣西筑摩郡立甲種木曾山林學校長位勳氏名印

割印　番號

第八章　授業料

第三十五條　授業料ハ一ケ月金五拾錢トス

但シ授業料ノ徴收期ハ毎月廿日トシ休業日ニ當ル時ハ繰上トス

第三十六條　授業料ハ出席ノ有無ニ拘ラス之ヲ徴収ス

但シ休業全月ニ及ブ場合及ヒ正當ノ事由アリテ欠ノ届出デ欠席全月ニ亘ル時ハ其月分ノ授業料ヲ徴收セザルモノトス

第九章　生徒賞罰

第三十七條　品行方正學力優等ナル者ニハ賞狀若クハ賞品ヲ附與スルコトアルヘシ

第三十八條　本校ノ校規又ハ命令ニ違背シ其他學生タルノ本分ヲ誤ル言行アリタル時ハ其輕重ニヨリテ之ヲ處罰ス

第三十九條　罰ハ左ノ三種トス

一　謹責　二　停學　三　放校

謹責ハ訓諭ヲ加ヘ將來ヲ戒メ停學ハ在學ヲ停止シ學校若クハ父兄又ハ保証人ノ許ニ於テ謹慎セシメ放校ハ退學ヲ命スルモノトス

第十章　寄宿舍

第四拾條　本校生徒ニシテ住所ヨリ通學ヲ能ハサルモノハ寄宿舍ニ入ラシムルモノトス

但シ都合ニヨリ舍外ニ宿泊セントスル者ハ父兄若クハ後見人及保証人並ニ家主連署ノ上其旨願ヒ出テ校長ノ許可ヲ受クヘシ

第四拾一條　寄宿舍生徒ハ舍費トシテ一ケ月金五拾錢ヲ納ムヘシ

但シ其月拾五日以前ニ退舍シ若クハ拾六日以後ニ入舍スルモノハ半額トス

第四拾弐條　本郡各町村ヨリ入學スル生徒ニシテ通學シ能ハス本校寄宿舍ニ入舍スルモノニハ學費ノ幾分ヲ補給スルコトアルヘシ

第四拾三條　學費補給ニ關スル規定ハ郡長之ヲ定ム

寄宿舍ニ關スル細則ハ學校長別ニ之ヲ定ム

第十一章　職員職務

第四拾四條　學校長ハ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ統督ス

第四拾五條　教諭及ヒ助教諭ハ生徒ノ教育ヲ掌ル

第四拾六條　舍監ハ學校長ノ指揮ヲ受ケ寄宿舍ニ關スル事一掌ル

第四拾七條　書記ハ學校長ノ指揮ヲ受ケ庶務會計ニ從事ス

第四拾八條　職員ハ校長及ヒ舍監ヲ除クノ外宿直ナラシムヘシ

第十二章　附　則

第四拾九條　本則ニ定ムル外必要ナル事項ハ學校長之ヲ定ム

第五拾條　現在ノ學ノ生徒ニシテ本則ニ依リ難キ場合ハ仍從前ノ例ニ從フ

長野縣西筑摩郡立甲種木曾山林學校學科目及程度並毎週授業時間表

學年	壹學年			弐學年			參學年		
學課目	毎週授業時數		程度	毎週授業時數		程度	毎週授業時數		程度
	第壹學期	第弐學期		第壹學期	第弐學期		第壹學期	第弐學期	
修身	一	一	人倫ノ道	一	一	全上	一	一	全上
讀書	三	三	國語	二	二		二	二	
作文	三	三	普通文	二	二		二	二	
記事	一	一	說話	二	二		二	二	
論			論						
委員			委員						
道徳			道徳						

	數學	化學	物理	博物	經濟	体操法規	森林保護及動物學論	森林通論及森林經營學	造林及植物及造林	森林利用及森林測量製図及造林	土木及土木氣候學大意	農學大意	外國語（英語）	計
第六學年	六	一	四			一	二	三	二	一		二	三	三〇
第五學年	六	一	四			一	二	三	二	一		二	三	三〇
第四學年	六	一	四			一	二	三	二	一		二	三	三〇
	算術代數幾何初歩	化學	動植物			兵式体操	森林保護及森林動物學	森林ノ効性及森林ノ利用	造林			農學通論	綴字讀法譯語	
第六學年	六	二	三			一	二		二	一	二	二	三	三〇
第五學年	六	二	三			一			二	二	三	二	三	三〇
第四學年	六	二	三			一			二	二	二	二	三	三〇
	幾何	化學	物理			全上	全	測樹	森林造林植物	全上	測量	氣土壌候	農業各論	文法譯文書ヲ取意
第六學年	二				一	二	三	四	三	三	三		二	四
第五學年	二				一	二	三	四	三	三	三		二	四
第四學年	二				一	二	三	四	三	三	三		二	四
	三角術				經濟學大意	全法制大意	森林法規	經営法及森林法規	全	森林利用及造林上	測法及測量製図及土木		全	文法譯文

備考　實習、各學年四週以上、修學旅行、三學年約三週、貳學年貳週トス

我國と國てふ國は澤にめれどしなぬの國は國のよき國

體入不知

編輯だより

一、會報第四號發刊の義大に延引致し候のみならず印刷所の都合より數多の誤植と數ケ所の印刷漏とを生じ候段會員一同に對し深く謝し置く所に有之候

一、次號即ち第六號は引續き其編輯に着手中なれば遲くも來年二月中旬迄には出來の筈に有之候

一、卒業生諸君其他會員諸君は會報編輯上の材料續々御投稿被成下度希望に堪へず候

會告

一、卒業生諸君は本會々費として一ケ年金壹圓拾錢宛御負擔可相成義につき該會費を數回に分かち此際至急御送金被下度候也

一、會員諸君にして住所任地等御變更の節は直接本會へ御一報被下度雜誌發送上等に差支へを生じ候に付き申上候

本會山林學校の再生

本會山林學校が郡立として生れしは去る明治三十四年四日なりしが本月十三日長野縣會に於ゐて明治三十九年四月より縣立となすの議可決確定せられ愛に縣立本會山林學校は生れ出づる事となれり。山林學校萬歲。

明治三十八年十二月二十日印刷
明治三十八年十二月廿三日發行
長野縣西筑摩郡福島町
編輯兼發行人　神林律
長野縣松本町八六五
印刷人　丸山尙
長野縣西筑摩郡福島町
發行所　諸式用達商會
長野縣更級郡中津村
印刷所　田嶋活版印刷所

本誌本號實費一部金十八錢郵稅金二錢

會員諸君にして金壹圓拾錢宛御入用の向は、猶又會員以外にても御希望の方は右金相添へ信州松本町八六五信青年社へ御申込なされたく候。